
月に叢雲 華に風

あしなが犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月に叢雲 華に風

【Nコード】

N0678R

【作者名】

あしなが犬

【あらすじ】

成りあがり商人の娘・美夜子は『呪い人形』と実しやかに噂され、一部では都市伝説と化している。その理由の一つは彼女の顔には表情が、声には抑揚がない事。もう一つは死者と対話できる能力。おかげで見合いを24回連続で断られ続けているが、それでも平凡で慎ましやかに生活してきた。そんな彼女に舞い込んだのが、とある貴族令嬢の失踪事件。その事件が、美夜子の運命を大きく変えることとなる。

それはあまりに美しい景色だった。

雲ひとつない夜空に大きく浮かぶ白い月。

そこから放たれる明るすぎる月光を受けてきらきらと淡い光を放ちながら、無数の桜の花弁が舞い落ちる。

それは現実かはたまた春の夜の幻か、桜の木が一面に生い茂る森の中に存在する神秘的な泉。

降りしきる桜の花弁の色に染め上げられた泉は、この世のものではないほどに澄んでいる。

その畔に小さな影が二つ、幼い面影が残る少年と少女。

二人は向かい合って手を握り締めあっていた。

「大好きだからずっと一緒にいてね？一人はもう嫌だ。」

少年のはにかみながらの告白に、少年より少し年上に見える少女が笑みを深くした。

「勿論。ずっとずっと私たちは一緒よ。」

少女が更に言葉を続けようとした瞬間に、ざあ…と強い風が一陣走り抜ける。

あまりに多い桜の花弁が全ての視界を遮断したが、少女が続けた声は鮮明に聞こえてくる。

「……例えば死が二人を別つとも永遠に。」

目が覚めた瞬間に目の前に広がるのが見慣れた天井であることに美夜子は酷く安心した。

しかし、どうして自分が安心したのか、その理由は一瞬で忘れてしまう。

それに彼女が安心したという事実は、眉ひとつ動かない鉄壁の無表情を保つ彼女の外側からでは誰一人知ることはないだろう。

張り付いたような無表情のまま美夜子は、聞いているだけで暑苦しい蝉の鳴き声と、部屋にさしこんでくる眩しい西日に気がつく。

「……寝過したか。」

そういえば外出から帰ってきた所までは覚えているが、寝起きの彼女は頭も体の動きも鈍いまままで寝転がったまま考えようと、動こうともしない。

それでもかなりの寝汗をかいたらしく、微妙に湿っている洋服が気持ち悪いと襟元を掴んで、それがいつも自分の着ているような簡素な洋服の襟でないことに気がついて、急速に昼寝をする前の記憶が蘇る。

「そう言えばまた見合いを断られたんだっけ。」

ぼつりとこぼれた独り言は平坦で、何の感慨も感じられない。

だが、表に出る様子は変わらずとも、美夜子の心内は酷く落胆していた。

その理由を説明するには彼女と言う人物が、どうという人物か説明することから始めなくてはなるまい。

彼女の名前は鳴無美夜子、おとなしみやこここ数年幅広い商売で急成長を遂げた

【鳴無屋】のご令嬢であつたりする。

まあ、小綺麗なワンピースを着てみたところで、汗で落ちかけた化粧の顔に大の字で畳に寝転がるような彼女は正直いつて生粋の令嬢と言う訳ではない。あくまで成り上がりの金持ちのお嬢様だ。

とはいうものの彼女の实家は成長目覚ましい商家であり、財力という点においてはそのあたりの貴族など相手にならない。

故に彼女自身と言うよりは鳴無家と縁続きになりたいと願う野心家は多く、見合いという場合は美夜子は今年で24になるがここ数年両手では数え切れないほど舞い込んできた。

言っておくが決して美夜子から望んで申し込んだ見合いは一度たりともない。

つまり、どれもが相手方からは是非にと申し込まれた見合いばかりであった……にも関わらず気がつく相手方より御断りされている。今日は先週に見合いをした相手とデートまでこぎつけたにも関わらず、急に相手より『僕では貴方の相手は無理です』と悲鳴をあげられながら走って逃げられた。

街中に取り残されて非常に居たたまれない感情に押しつぶされそうになった美夜子である。

美夜子も別に見合いをした相手全てに好かれないと思いたい訳ではないが、それでも全部断られているという事実は彼女を打ちのめした。

(これで連続お断り記録24……母さんにまた笑われるな)

しかも、断られている原因を彼女自身が自覚しているのであるから、余計に悲しいというか悔しいというか、なんとも言えない感情が美夜子の中で渦巻いていた。(そんな様子は彼女の様子からは微塵も察せられないが)

美夜子はぼんやりとした頭のまま起き上がると部屋を出て、とりあえず化粧を落とすかと洗面台に向かう。

（そんなに不気味かなあ？）

鏡の中の自分の顔は化粧が落とされて、少々さっぱりしすぎた感はあるもののどうみても女性にしか見えない。

綺麗かと言われれば十人に九人が綺麗じゃないというだろうとは思うが、決して見れない顔ではないはずなのだ。

ただ、美夜子の場合、覗き込んだ表情が何一つ変わらないのだ。

無論、瞬きはするし、言葉を話せば口も動く、それでもまるで仮面が張り付いたように彼女の顔には感情が浮かばない。

嬉しくて笑みが浮かぶことはなく、悲しくても泣かないし、怒っていても眉ひとつ動かない……彼女の表情筋は死に絶えている。彼女の兄はよくそのように評する。

ちなみに美夜子に感情がない訳ではない。

彼女も笑いたくない訳でも、泣きたくない訳でもないのだ。

でも、彼女は外に感情を表すことが出来ない。

恐らくというか間違はなく、それはある種の病気なのだと思う。

それは美夜子にもその家族にも分かっている、医者や妖しげな呪いなど様々な方法に解決の道を求めたのだが、結局は全て徒労に終わった。

結局、感情が表情や声色に出ないからと言って死ぬわけではないし、いつしかもうこの病気とは一生付き合っていくしかない諦めた。

ただ、諦めた結果、彼女の容貌はただひたすらに不気味という言葉に尽くされることとなる。

それはいつかの見合い相手曰く『動く呪いの人形』。

美夜子も自分のことながら、確かにそれは不気味だと納得してしまふ部分もあったりするのであった。

（不気味だっていうなら、最初からお見合なんか申し込まなきゃい

いのに。)

だいたい見合い相手たちも悪いのだ。見合い相手たちも初めは鳴無家の財力の為にと、美夜子を褒めたりする。

だが、見合いのお決まりで後は若いお二人でという段階になってくると、だんだんと相手の顔色が悪くなってくる。

色々と振ってくれる話に相槌を打ったり、逆に質問したりもする美夜子ではあるのだが、その声はなんの感情も伝えない。その表情も何の感情も浮かべない。

その様がだんだんと時間をかければかけるほど不気味になるらしい。

酷い時は悲鳴を上げて途中で逃げられる時もある。

何が断れる原因なのかは分かっている、それを改善する手段が何もない。

美夜子も諦めの境地にあるのだが、鳴無家の財力は日々増え続けているので見合いの数は減らない。

しかも、母親は美夜子が見合いに嫌がっているというのを分かっているながら、懲りずに見合いを持ってくるのだ。(拒否しても気がつくといつも見合いの席に付けられている)

「はあ」

美夜子は溜息のつもりだろうが、感情がこもらない以上、それははたから見るとただ息を吐いただけのように見える。

(そういえば何か夢を見たような気がするな…忘れちゃったけど)

ふと見合いのことを忘れようと別のことを考えようとした時、そんな事が頭をよぎる。

何だがそのことが気になって、どんな夢だったかと思いだそうと

した瞬間、誰かに肩をたたかれて何の意識もせずにそちらへ振り向く…と『むにつ』と角ばった頬に誰かの指がのめりこむ。

「つぶ…不細工な顔だな。」

その様子を見て遠慮なく笑う人物が一人。
それを認めて美夜子是不細工な顔を更に不細工に歪めた。

「お兄ちゃん。やめてよ。」

出た声はまるで造り物のように平坦な声。
お見合い相手が聞いたらとび跳ねるような不気味な響きを持っているそれも、彼女の家族となると何ともないらしい。

「いやいや。また見合いを断られて落ち込んでるんじゃないかと思つて、お兄ちゃんは心配しているのよ?」

そう言つて美夜子とは全く違つ、そこそこ整つた顔ににこりと笑顔を乗せるのは美夜子の兄、^{かなと}叶。

美夜子が世間の人々に不気味がられても、お見合いを24回断られようと、それでも孤独に支配されないのはこの兄と、後はお見合いを次々と持ち込んでこようと商魂たくましい母親のおかげだろう。

美夜子もそれが分かっているから家族のことは本当に大切に思っていた。(それが表に出ることはないが)

「別に落ち込んでない。もう24回にもなればいい加減に慣れたし。」

「24回って回数数えているってことは気にしているってことだろう?」

「……」

「だから、そうやって無言になるのが一番怖いっつーの。」

そう言っただけは両の頬を思いっきりつね上げる。

「ほづら、これを少し上げれば笑顔に……」

そのまま美夜子の顔を直視せずに沈黙したまま目を逸らす兄。

「お兄ちゃん。口元だけ笑っても目が笑ってないと不気味さが倍増だって母さんが言ってた。」

「お袋は馬鹿だけどその事実は正しかったな。……ごめん。」

「いいよ。謝られたほうが切ない。」

『……』

狭い洗面台で兄と妹は微妙な沈黙に沈んだ。

「人探し？」

美夜子の平坦なしゃべり方はイントネーションすら乏しいので、時に疑問形であるはずの言葉がただの単語に聞こえる。

時々人間と会話すらままならない時があると美夜子は酷く落ち込むので、なるべく使う言葉には気を付けているのだが、今回は自分の話し方に慣れた兄なので気にせずに話す。

「そう。実は俺の上司の知り合いの婚約者が忽然と姿を消したらし

くてな。ほうぼう手を尽くしてもまだ見つかってないらしい。」

兄と妹は豪商が住まうというには酷く質素な木造家屋に家族だけで暮らしているのだが、そこで唯一の家族が集まるリビングのソファに對面して座っていた。

ちなみに母親は現在一人でバカンスに行くと言って3日前から不在なので、この家には兄と妹しか今はいない。

「でも、それは軍の仕事でしょう？」

軍は国を防備する他に治安維持など様々なことも行っており、探し人なども軍の仕事である。

少なくとも一般市民の美夜子に頼まれる仕事ではないはずだ。

「まあ、お兄ちゃんの話聞け。普通の失踪だというのであれば俺だってお前に話を持ってこないさ。まず、大前提として恐らくその行方不明になっている婚約者は恐らく既に死んでいる。」

「え？」

「その婚約者：名前は桜月華代おしづきはな、年齢は25歳。」

そう言っ葉は机に一枚の写真を出した。

そこには舞い散る桜の中でカメラに向かって笑う男女が写っていた。

男女はともに美しく儂げな印象がよく似ていて、一目でどちらが年上かは判断しかねるが血縁関係にあることはすぐに判断できた。だが、写真よりも美夜子の気を引いたのは女性の名前であった。

「お兄ちゃん。桜月ってあの【桜月】？」

「ああ。その【桜月】だ。我が国の二大貴族の。」

美夜子たちが暮らす月影の国は帝を頂点とする貴族社会である。その中でも鳴無家のように平民でも才能さえあれば成り上がることが出来るが、貴族と平民の序列は絶対であり強固な身分社会でもあった。

【桜月家】はその中でも、代々帝を輩出する【天宮家】に次ぐ貴族であった。

月影の国に暮らす人間であれば、子供であつても知っている名でもある。

話を持ち込まれた瞬間に嫌な予感はしていたが、いよいよ雲行きが怪しいと思つて美夜子は心の中だけで盛大な溜息をついた。

「話を元に戻すぞ。その桜月華代嬢は結婚間近の婚約者の屋敷に弟と一室を与えられてそこで暮らしていた。だが、1か月前彼女は忽然と消えた。部屋に彼女のものと思しき血を、致死量をはるかに超える量残してな。」

叶は淡々と何事もないように話を続けているが、血塗れの部屋を想像するだけでぞつとして美夜子はごくりと唾を飲み込んだ。（表情は何一つ変化していないが）

「だが、彼女：まあ多分死体になっているだろうが、彼女の体は何処から見つかからないんだ。部屋から出したのなら、それだけ血が出ているんだ血痕なんて残りまくりだらうけどそれは何一つない。死体だけが神隠しにでもあつたように忽然と姿を消している。屋敷の中をひっくり返して探してみても何処にもないし、軍としては正直お手上げ状態らしい。」

「彼女は誰かの殺されたということになるの？」

「死体がない以上、殺人事件と言う扱いにする訳にもいかんらしい。建前は失踪事件と言うことで軍は動いているらしいが……彼女が【桜月家】の令嬢という事実もあつて、かなり秘密裏に慎重に軍は動

いているみたいだな。結果として1か月もたったというのに事件に何の進展もない。そもそも事件自体が公になっていない。上司の知り合いは何でもいいから藁をもつかみたい気分と言う訳だ……そこで話題に出たのが【鳴無家の呪い人形】の話だったらしい。」

【鳴無家の呪い人形】というのはありがたい美夜子の通り名と言うやつだ。（多分、いつかの見合い相手が付けたに違いないと美夜子は考えている）

美夜子が持つちょっとした能力が、彼女の無表情さが増長させる不気味さと相まって、気がつけばまるで都市伝説のように噂されるようになった。

「まあ、相手はお前に全てを賭けているって訳じゃない。分からないきや分からないで、お前が言うとおりこれは軍の管轄の問題なんだから、お前が責められることはないだろう。ただ、俺も上司から頼まれたもんだからな。俺の出世のためにもお前には一応話だけでも聞いてもらいたい訳よ。」

「とかいって、もう会う約束くらいまでは取り付けているじゃないの？」

これが叶でなければじつと美夜子に見つめられて、その威圧感にたじろぐところだろうが、彼はにやりと笑って返す。

「分かるか？」

「とりあえず話を聞くだけならいいけど。本当に期待しないでよ。」

軍が乗り出しているような事案を自分に少しばかり特別な能力があるからと言って、解決できるなど思っていない美夜子。

彼女は何が起こっても動じないように見えているだけで、その心はあまりに繊細で謙虚さの塊のような人物であった。

1 - 1 (後書き)

はじめましてな方も、またお会いしましたな方もここまで読んで頂いてありがとうございます。

この話はずっと『小説家になろう』の場で続けさせて頂いている長編に煮詰まっている時に書きためていた話です。もうすぐそっちの方が終るし…というかそっちのラストに煮詰まってしまうていて、うっかりこちらの連載をスタートさせてしまいました(笑)

多分、非常にのんびりした更新スペースになりますがお付き合い頂けたら嬉しいです。

美夜子と女は格子を隔てて対面していた。

細かい鉄格子の向こう側は顔がほんの少ししか見えないが、互いの顔を認識することは可能であった。

格子を隔てただけで、木の椅子に１メートルと離れていない場所に座っている女を美夜子は注意深く観察する。

（綺麗な人…だけど幸せそうではない）

年は美夜子より少し上だろう、美しく見えるように施された化粧に垢ぬけた服装…ただその表情は酷く疲れている。

美夜子が言える義理ではないがその表情には生気がなく、さりとて表情の中心にある瞳だけは爛々と光って美夜子を睨みつけていた。そのアンバランスさが女の存在を強く禍々しく見せていた。

（帯がきつい）

美夜子は正に【呪い人形】の名に相応しく着物に身を包んでいたが、その服装で長時間座ったままという状況は彼女をほとほと疲労させていた。

それでも睨み合っていては何も始まらないと、意を決して口を開く。

「貴方の言いたいことは理解したつもりです。ですが、私にできることはそれを彼に伝えることだけです。」

美夜子は無表情、無感情のままに淡々と言い切る。

女はぎろりと強い瞳で睨みつけたが、美夜子にたじろぐ様子すらないと大きく息を一つ吐いて、木の椅子に音を立てて体を凭れかけた。

「あんたみたいな能面顔の女にあたしだけが感情を露わにするのも馬鹿馬鹿しくなってきた。あたしも恨み憎み続けることにもいい加減疲れたしね…ここは一つ要求を飲んでくれればあの男を解放してやろうじゃないか。」

「それは良かった。私も延々と3時間近く話を聞きたかいがあったというものです。」

「そういう割には全く心がこもってないねえ。」

「すみません。でも、心の中では泣いて喜んでいるんです。」

言葉とは裏腹に何処までも一切の感情のない声に、女は声を立てて笑った。

互いを隔てる格子と椅子、それ以外はガラんとした無限の闇が広がる空間に、その笑い声は恐ろしいほど響いた。

「あたしの要求はたった一つ。あたしの骨をあの男の家の仏壇に供えて、毎日手を合わせることさ。」

「それだけでいいんですか？」

「それだけと言うけどね、あの男の奥さんは大変な恐妻家なんだよ。いくら祟られないためとはいえ、旦那の長年の浮気相手を家で拝まれたらその怒りは…あははっ、考えるだけで恐ろしいもんだよ。」

「分かりました。そのように伝えます。」

美夜子がそう答えると、女がガッと格子を掴んで顔を押し付けた。見開かれた血走った瞳が美夜子を睨み、格子を掴んだ細く白い指が美夜子に掴みかからんと空を切る。

「絶対だよつ！！もし約束をたがえば、今度は孫の病だけじゃ済まない！！そうあの男に伝えなあ！」

美夜子は感情の灯らない視線だけを女に向けて一礼する。

「はい、必ず。もう二度と貴方のことを忘れないように伝えます。」

美夜子が体を起こし視線を上げた時、女ははるか遠くに離れていった。

格子の先の彼女の顔はあつという間に見えなくなる。

最後にちらりと見えた女の顔は憎悪や怒りなど様々な負の感情に歪んでいたが、瞳から一筋の光る涙を美夜子は見た。

広がる闇の中では五感は一瞬鋭くなるため、現実に戻った瞬間が美夜子には具に分かる。

クリアになった視界には闇に潜る前と同じ景色が広がる。

午前とはいえ夏の眩しい日差しが眩しい洋室、傍らには美夜子と同じく着物の女性、赤いテーブルクロスのかかる大きな机の対面には心配そうに美夜子を見つめる初老の男が座る。

ただ闇の中で女と話した前と後では、目の前にする男への印象だけは180度変化した。

美夜子の心中を支配するのは、一見して人の良さそうな老紳士に対する嫌悪と侮蔑。

だが、感情を言葉以外で表現することができない美夜子のそれが男に伝わる訳がなく、男は美夜子にとってみれば酷く空気が読めないそわそわした態度で言葉を紡ぐ。

「それではどうですか？私の家に禍を及ぼしている悪霊の正体は掴めたのですか？」

「はい。」

「本当ですか！？それでは悪霊も祓っていただけたのですか？！」

「初めに申しましたように私には死者と話す能力はありますが、貴方の言うところの霊を祓うという能力はありません。」

【鳴無家の呪い人形】こと鳴無美夜子の特殊能力とは、死者と対話する能力。

いや、正確には先程まで女と話していた闇、生者と死者が混在できる空間、美夜子は【生と死の狭間】と呼んでいる闇を造り出せる能力。

その闇の中でだけで、生と死を分かち格子越しにだけ、美夜子は死者と対話ができる。

死者は美夜子の造り出した闇の中だけで実体を持つことができ現実には存在することはなかったが、今まで遭遇した死者の中には、女のように強い恨みや憎しみにより【呪い】や【祟り】と言われるような禍を現実に取り起こす者もいた。

しかし、美夜子はそんな死者と遭遇して対話することはできるが、それが引き起こす呪いや祟りを鎮める力もなければ、死者を成仏させる力もない。

更に全ての死者と対話できると言う訳ではなく、いくつかの条件が必要になるため、特別と言えば特別な能力であるが、美夜子としてはあまり実用的ではないと感じていた。

しかし、鳴無屋を国一の商家に登りつめさせた美夜子の母・蜜^{みつ}にとっては、美夜子の能力は利用価値があったらしい。

様々な商売相手の中には善良な人間ばかりではなく、人に言えぬような悪行に手を染める人間もいる。

蜜は利益にさえなれば商売相手が誰であろうと頓着しない人であつたし、寧ろリスクが高くても大きな利益が出れば自分から進んで悪人と商売をした。

しかし、どんなに平気な顔をして悪行を重ねる悪人であろうとも、一分くらいの罪悪感や後ろめたさがある。

そういつた感情が例えば悪いことが続いた時、かつて悪人が不幸にした人間たちの呪いや祟りかもしれないという思いを過らせる…ありがちな話ではあるが蜜はその瞬間を逃さずに自分の娘の能力について悪人に耳打ちしたのだ。

悪人も普通ならばそんな眉唾な話を信じないだろうが、悪いことが続いている時というのはどんな人間も心が弱るものだ。

かくして蜜の耳打ちに対して藁をも掴む気持ちと言うか、半信半疑のまま、美夜子の元を訪れる悪人は少なくなかった。

悪人の中には美夜子の能力が適用とならない者もいたが、実際に美夜子の能力が発揮されて悪人を通してそれらを恨み憎む死者と美夜子は対面した。

結果、ズバズバと誰も知らないはずの自分の悪行が死者を通し美夜子から明らかにされた時、どんな悪人も狼狽する。

そんなことが何回か続き、気が付けば【鳴無家の呪い人形】という美夜子的には非常に不本意な通り名がつくようになった。

何度も言うようだが美夜子に霊を抜く能力はないが、それでも【鳴無家の呪い人形】の噂は都市伝説までと化し、現在では蜜が言わなくても様々な所からその手の依頼が舞い込むようになった。

この目の前の男の依頼もそれである。

彼は数ヶ月前から家族の病気や事故が度重なり、中でも幼い孫が生死を彷徨う病にかかったらしい。

事業もつまくいつておらず、このままでは破産や家庭崩壊も逃れられない。

立て続けに起こる災難に、彼は自分か家族に悪霊でも憑いているに違いないと思うようになり、美夜子にその悪霊の正体を暴いてほしいと依頼してきたのだ。

かくして美夜子は男の背後に感じた死者との対面を果たし、その結果を淡々と言葉にした。

「しかし、貴方の言うところの悪霊。井手川幸さん^{いでがわさち}は一つの変更を飲んでくれれば、これ以上貴方の家を祟らないと仰いました。」

その名前を口にした瞬間、男の顔色が一気に変わった。

「な？ど…誰ですと？」

「ですから井手川さんです。ご存知ですよ？何十年前に貴方が愛人として囲っていた女性です。奥様と結婚前からのお付き合いにも関わらず、いつか結婚するからと彼女を愛人として囲いながら、野心のために貴方は貴族の奥様と結婚された。しかし、奥様に愛人である彼女の存在を突き止められそうになった途端、貴方は彼女の存在を隠すだけでは足りない…彼女を殺して地面に埋めた。他に家族もなく、貴方の愛人としてしか存在していなかった彼女を探す者もなく、彼女はずっと殺されたことも知られないまま現在に至ります。」

美夜子が告げた二時間ドラマのような愛憎の物語は核心についているらしく、男はそれまでの人のいい老紳士の皮が剥がれ、蒼白な顔で二の苦も告げない。

「ご心配しなくともこの事は公には口外致しません。それに何十年も前の話ですしね、事実が明るみになった所で貴方は法的な裁きを受けることはないでしょう。ですが、彼女の恨みは何十年のうちに大きく成長し現在貴方と貴方の家族を苦しめている。…貴方も彼女

にしたことを覚えているのであれば、恨まれる覚えはおありですね？」

「わ・私はどうすれば？」

彼しか知りえない悪行をズバズバと言いあてられ、我を忘れて男は美夜子に詰め寄る。

「彼女の望みはただ一つ。貴方が貴方の家で彼女の骨を仏壇に供えて、毎日手を合わせることにそうです。」

「なっ！」

「彼女の骨の場所はお分かりですよ？貴方が埋めた場所を覚えていないとは言わせません。心配しなくても彼女いわく土に還らないまま、彼女の骨はそこに残って」

「待つてください！！しかし、それはっ……」

男の顔に焦りの色が浮かぶ。

どうやら女の思惑通り、この要求は男にとってかなりリスクが高いらしい。

「できない……とおっしゃるのであれば禍は更に続くかと思われます。お孫さまの命も私は保証しかねますがそれでもいいのですか？」

「それだけは……」

「では、彼女の要求を飲むしかないでしょう。貴方は自分の勝手に彼女の命を奪っておいて、その罪を償うこともせず、自分の要求だけ通るなど……そんな虫のいいことがあるとでもお思いですか？それでは私ができるのはここまでですので、後は貴方がご判断ください。失礼します。」

「ま……」

「申し訳ございません。」

追いつがる男と美夜子の間に、それまで美夜子の隣で沈黙していた女性がにつこりと笑いながら割って入り、美夜子の着物を掴む男の手を優しい手つきだが、強い力で引き離す。

「初めに申し上げました。美夜子様のお力は決して万能ではなく、可能性として貴方様のご意向に沿えない場合もございます…。その場合はなにとぞご容赦いただきたいとも申しましたよね？貴方もそれに同意されました。」

「しかし！」

「だからこそ、この件にしましては一切の謝礼などは頂くつもりもございます。これはあくまで慈善事業のようなもの…でございますから。なのでこれ以上、美夜子様を煩わせるようなことをされるおつもりなら、この話を奥様にお話しさせて頂いてもいいのですよ？」

（慈善事業…こうして弱味を掴んだら最後、鳴無屋に二度と逆らえないように脅すっていうのに紗耶^{さや}さんも良く言うよね。）

着物の女・紗耶の完璧ともいえる美しい笑みに男はいよいよ、口をパクパクさせて今にも失神しそうだ。

実際、美夜子が受けた依頼で今まで謝礼を受け取ったことはないが、その後、美夜子が死者を通して知った依頼人の悪行などを公には口外しなくても、蜜や紗耶が脅しの材料として使っていることは知っていた。

死者の呪いを抜えないように、生者の悪行を裁く力も美夜子にはない。

蜜や紗耶が死者の無念を晴らすために依頼者を脅しているとは思えないが、美夜子は失神寸前の男を決して哀れとは思わなかった。しかし、使用人に部屋から引きずり出されようとする男に美夜子はもう一つ告げることがあった。

「井手川さんは貴方を恨んでいても、この数十年は決して貴方に禍を起こすようなことはなかった。それがどうして今、それを起こしたか：貴方はそれを考えるべきです。」

引きずられていく男の背中は何の反応も示さなかったが、美夜子にできるのはここまでである。息を一つ吐くと椅子に凭れかかった。闇の中の椅子とは違って、さすが鳴無屋本社の応接室の椅子は柔らかく美夜子の背中を支えてくれた。

「何？今のはどういう意味よ？」

男が連れ出されたのを確認すると、紗耶はそれまでの丁寧な造られた様相を消して、興味津津といった感じで美夜子に詰め寄った。

「井手川さんの死体はあの男の別荘宅：元は彼女を囲っていた屋敷の庭に埋められているんだけど、あの男はその別荘を最近売り出すことにしたらしいの。殺されても彼女はあの男を愛してたけど、忘れられるのはそれ以上に許せなかったみたい。」

「別荘を売る売らないの前に、あの男は絶対忘れてたでしょ？」

紗耶の言うことも一理あるかもしれないが、井手川幸にとってはそうではなかった。いや、忘れられているという事実を彼女は認めたくなかったただだったのかもしれない。

殺されて、更に自分と言う存在と、自分を殺したという事実すら忘れられたら：想像するだけでも嫌な気分になる。

それを別荘を売られるという事実によって否応なしに突き付けられて、井手川幸は男を祟る所まで追い詰められた：というのが恐らく今回の顛末。

しかし、それは井手川幸と話した美夜子の憶測にすぎず、それを

確かめようとも思わない。

確かに美夜子は仲介役を果たしたが、美夜子にはそれ以上は二人の関係に入り込む権利も、あれこれと言う権利もないのだ。

美夜子はこの話は終わりだと話題を変えた。

「それよりこの着物をさつさと脱ぎたいんだけど？そろそろお兄ちゃんとかの依頼人の所に行かないといけないし。」

「えー？脱いじゃうの！？せっかく、正に【呪い人形】って感じですっごい迫力あって最高なのに！！あの男、美夜子の完璧な無表情にすっごいビビってたわよ。…っていうか、叶の依頼って何？何？！事件の臭いがぶんぶんするわ！私も連れてってよ！！！」

「紗耶さんにはまだ仕事があるでしょう。」

激しく肩をゆすぶられて、無表情ながら美夜子は疲れを感じていた。

紗耶は鳴無屋の社長である蜜の秘書であり、美夜子にとっては数少ない自分の無表情を気にしない姉のような人物である。

なかなかの美人で仕事もできる才色兼備であるが、如何せん彼女は少々変わっていた。

彼女は無類のオカルトやミステリー好きでそういった小説を読み漁るだけでは飽き足らず、しばしばこうやって美夜子の依頼に同席してその雰囲気味わうのだ。

しかも、気分を盛り上げるため、不必要に美夜子にこうして着物を着せたり、本社の一室を小説に出ていそうな内装にしてみたり、ともかくやることが徹底していた。

紗耶のことを姉のように思い慕っているが、こういう部分に理解を苦しむ美夜子にとって、子供のように駄々をこねる彼女は非常に疲れる。

だが、今回はどんなに駄々を捏ねられても彼女を連れていく訳にはいかなかった。

「ともかく急いでこの着物を脱がせて…今度、ちゃんと説明するから。」

「ヤダヤダヤダ…!!」

「紗耶さん…」

「やあだ…!」

かくしていい大人だが駄々っ子な紗耶と、無表情な美夜子の一見するとシニールすぎるコントの如きやりとりはしばらく続くのであるが、多大な労力を持って美夜子はなんとか時間通りに兄と鳴無屋本社を出発することができた。

その代償に美夜子は紗耶のお気に入りのおカルト小説に出てくる妖怪のコスプレという頭の痛い難題を抱える羽目になったが、それはまた別の話である。

1 - 2 (後書き)

ここまで読んで頂いてありがとうございます。

まだ色々分からない部分が多いですが、物語の舞台は月影の国と言う架空の世界で、現代日本みたいな環境です。

昨夜、叶からもたらされた令嬢失踪事件に協力を求められた美夜子。

彼女の想像通り、叶は次の日：すなわち今日、依頼人と会う手筈を整えていた。

何しろ叶は役人で、しかも出世意欲が強いのだ。だからこそ、その事件が上司から頼まれたものというのであれば、彼の意気込みも想像に難しくない。

美夜子は叶が出世したい理由を知っているので、それについて責めるつもりはないし、できるだけ協力したいと思っではいる。

しかし、いざ依頼人と会うために貴族の居住区に行くぞと告げられた時、彼女は無表情で兄にちよつと待てをかけた。

それを聞いてくれる兄ではなく美夜子の訴えは無視されたのだが、そんな風には微塵も見えないが驚きで泣きそうになった美夜子である。

と、いうのにも理由がある。

それというのも美夜子が暮らす月影の国は、帝を頂点とした強固な貴族社会だ。

そのために貴族とそれ以外は徹底的に区別されており、居住区も明確に分かれている。

国土のほとんどは一般国民の居住区だが、その中心に国土にして僅か数パーセントだけ貴族の居住区が存在する。ちなみに人口比についても、それと同じ比率だ。

貴族の居住区は一般国民からその姿を隠す高い壁と厳重な警備の元を守られ、出入りを許されるのは貴族と出入りを許可された僅かな一般国民のみなのだ。

美夜子はもちろん役人である叶ですら貴族の居住区に足を踏み入れるのは初めてであるという。

桜月家の令嬢が関わっている事件だと理解してはいたものの、いざめったに入れるはずもない場所に足を踏み入れるという現実を突き付けられて、美夜子は気後れを感じずにはいられないのだ。

かくして着物を脱ぐことを渋る紗耶を振り切って、よそゆきのワンピースに身を包んだ美夜子は貴族の居住区に向かって出発した。

鳴無屋の本社に叶を乗せて現れた迎えの車に乗り込んで数十分、厳重な検問を通り抜けた先に広がる普段暮らす街とは全く違う景色に美夜子はこれほど違うものかと感嘆する。

多くの一般国民が住まう、月影の国の大部分を占める部分は通称【ツギハギ街】。

絶対的な貴族の存在に押さえつけられながら、鳴無屋を含めて商魂逞しい気質を強く持つ月影の国の国民たちは、少しずつ国を拡大を繁栄させ、今では世界有数の大国家となっている。

しかし、もつたいたない精神を大事にする国民性からか、人々は古い建物を不必要に壊して新しい建物を造ることをあまり良しとせず、古い建物の間に新しい近代的な建物を建設していった。

そのように街を拡大していった結果、デザイン性や統一感は全くの皆無で無秩序に成長した街は正に【ツギハギ】の趣きを有し、活気がある中にも混沌の雰囲気も漂わせていた。実際、治安の非常に悪い場所と言うのも少なくない。

貴族以外は全く平等を権利を有する月影の国は、ある意味徹底的な弱肉強食の国であり、国民たちは自分の力一つで億万長者になることも夢ではなかったが、一度足を踏み外すと何処までも転落していく可能性も孕む。

この国の人々はそういった差がはつきり出る。また、その差がはつきりとうつてしまう国でもあった。

そんな美夜子が長く暮らす街とは、まるで対照的な景色が車窓に流れる。

白・白・白：それ以外は何もない。

様々な高さや形の建物はもちろん、道路や車、貴族の服装に至るまで色を変えられる全てのものが白で彩られている。

（そういえば、今乗ってる車も白だった。：貴族の居住区では白しか使つてはいけない法律でもあるのかな？今まで会ったことのある貴族も皆白っぽい服しか着ていなかった気がするし…）

そんなことを漫然と考えながら、厳しい夏の日差しに反射する白は非常に眩しくて目を細める美夜子は、【白亜の乙女】と異名のつく貴族街の、汚れ一つない白で埋め尽くされる景色に圧倒された。

「話には聞いていたが、まるで別世界だな。」

「うん。壁を一つ隔てて、こんな景色があるなんて想像もしてなかった。」

「何だ。黙りこんでると思ったら、感動して声も出なかったのか？」

その声には美夜子は応えなかった。

確かにある種感動しているのかもしれないが、それは恐らく叶が思っているような美しさに感動しているというよりは、異様なまでに執着された白に対して違和感のような、恐ろしさのようなそんな言葉には言い表せない感情を美夜子は抱いていたからだ。

それは単に見慣れない景色に抱く感情なもの知れないが、美夜子は興奮気味に外に目をやる叶とは違いなるべく外の景色を見ないように視線を落とした。

二人を乗せた車が白亜の乙女に入ってから30分ほど車を走らせた後、車は一度巨大な門が聳える豪邸の前で停まる。

敷地を囲む塀の端が何処にあるのか見えなくらい広大な敷地、重そうな音と共に開いた門から更に道が続き、その道の先に大きい屋敷がある。

屋敷内の木や草は自然の色なので、建物の密集地であつた中心街ほどの白一色という感は少ないが、屋敷を囲む塀や門、近づいてくると屋敷も全てが純白だ。しかも、一片の汚れも見当たらない。

美夜子はさぞ掃除が大変だろうと思ひながらも、さすが貴族の屋敷と思わせる屋敷に目を凝らす。

白一色で彩られて下手をすると味気ない様子にもなりそうだが、きつと高名な建築家が建てただろう屋敷は日光によってその白のニュアンスを変え、様々に施された細工に陰影ができることで、なんとも荘厳で重厚感のある様子である、

その様子は美夜子が住む木造家屋と比べるのもおこがましいほどで、美夜子は今からでも依頼を断れないものかと本気で思った。

「お兄ちゃん、ここって一体誰のお屋敷なの？この主が依頼人になるの？」

車中は運転席と乗車席の間に仕切りがあり運転手の姿は見えないが、一応声を落としてそう聞いてみると、叶は呆れたように溜息をつきながらも美夜子と同じく声を落として返した。

「お前、今さらそれを聞くか？門の所にあつたでっかい表札を見なかったのか？」

兄の言い方に毒を感じるが、実際屋敷の規模ばかりに目が言っていて表札には気がつかなかったので素直に頷いた。

「この屋敷は【天宮家】^{あみやけ}の別宅だ。」

「天宮って…お兄ちゃん。」

屋敷の持ち主の名を聞いた瞬間に、兄として付き合いの長い叶には妹が驚いているのが分かったが、会話は車が停まり外から扉が開いたことにより中断せざるを得なくなる。

「鳴無様、お疲れ様でございました。天宮家が別宅、白鷺邸に到着いたしました。」

「ああ、どうもありがとうございます。美夜子も…お前はそうやって固まっていると薄気味悪いから、さっさと行くぞ。」

「…そんな言い方を普通、妹に言う？」

「事実だから仕方ないだろ？それにお前、気を遣って嘘言つと怒るくせに。」

そう言つと叶は美夜子の反論など聞く気がないようで、さっさと開けられた扉から出ていく。

美夜子は咄嗟に反論が出かけたものの、叶の言葉が真実であるのでそれ以上は何も言わずに彼に続いた。

天宮家とは帝は別格と考えた時、貴族の中の頂点に君臨する家柄だ。

国の主たる帝はその直系の子供がなる訳ではなく、必ず天宮家の中で最も力があるものが選ばれるのがしきたりなのだ。

故に天宮家は貴族の中では別格であり、同時にそれはすなわち帝

とは単なる国の象徴ではなく、天宮家の人間が有する【力】こそが帝の証明であるということを表す。

その力はこの国に生きる全ての人間に関わる。

【魂】を操る力…天宮家の血が持つ力がそれであり、その中でも帝になる者だけが【命宿の力】いのちやちを得ることができる

かくして命宿の力が何かと言うと、その名の通り【命を宿す力】である。

この世界の赤子は父と母の間に生まれる。

10月10日母の腹の中で育った赤子はこの世に生を受けるものの、生まれた赤子は魂のない抜け殻。

赤子は魂が入っていないままに生まれ、生まれた直後は心臓は鼓動をし、呼吸はしているもののまるで人形のように何声一つ上げず、目も開くことはない。

その赤子に魂という名の命を与えることができる能力が命宿の力であり、それを有するのは帝だけなのだ。

ちなみに魂が吹き込まれないまましていると、赤子はそれからおよそ10日後には死んでしまう。

故にその力は強大にして絶対なのだ。

帝とその力を有する権利を持つ天宮家は、その力を有するがために絶対権力を有し、以下全ての貴族を彼らの臣下とたらしめている。

まさか、そんな貴族の別宅というものの屋敷内に足を踏み入れることなど、生涯ないだろうと思っていた美夜子は、その現実に対応しきれない自分を感じた。

視界に入る景色がどうにも夢の中の出来事のようにふわふわとした印象を受ける。

そのくせ洗練され、到底国民が暮らす空間ではない荘厳で重々し

い内装はずっしりと感じられる。

屋敷の中は白を基調としているが、外観のように全てを白として訳ではなく、木造の優しい色合いや、赤の絨毯、床の色など、白以外にも様々な色があった。

また【白鷺邸】という名の通り、屋敷内には白鷺を象ったり、モチーフにしたデザインが廊下や扉などに散りばめられていた。

「さすが天宮家の別宅。我が家のボロ屋と比べるのが恐れ多いほど立派だなあ。これでは管理するのもさぞ大変なんでしょうね。」

「お褒めにあずかり光栄です。これも全て主のため。それこそが私どもの幸せでございます故。」

車を降りると外で直立不動で美夜子たちを迎えた初老の執事が、叶の言葉に慇懃無礼に言葉を返す。

その言葉に何たる忠義だと、美夜子は案内の為に前を歩く執事の背中に感心した。さすがは天宮家の執事。

その背中からふと視線を移す。

三人が歩いているのは南向きの廊下で、ふと視線を外せば屋敷の裏庭のような場所が見えた。

門から屋敷までの距離もかなりあったが、裏には巨大な庭にうつそうと茂る森まで存在する。

どこまでが天宮家の土地なのかは定かではないが、本当に何もかもが国民感覚とかけ離れていて美夜子は深く考えるのをやめた。

歩きながら整えられた庭に目をやる。

今は夏も真っ盛りなので美しい花と言うよりは、目に眩しい新緑が目につく……と、その中に人影を見る。

木の影に佇む二つの影。屋敷から近い距離にいるため、視力の良い美夜子には二人の姿がはっきりと確認できた。

最初は何となく見たことがあると思いを巡らせたあと、それが兄に見せられた写真の男女であることに気がついて美夜子は表情には

出ないがはつとする。

確かその女性の方は失踪しているじゃないか…と、どくんと心臓が大きく鳴った。

ずっとずっと私たちは一緒よ。例えば死が二人を永遠に別つとも

美夜子の耳の奥に響く声。

同時にふらりと軽い貧血のような浮遊感を感じて、足元がもつれる。

「美夜子。大丈夫か？」

「…うん。お兄ちゃん、あそこに」

眩暈に似た感覚が続いていたが、兄に自分が見たものを伝えなければと美夜子は窓を指さした。

「ん？ ほう… あれは頂いていた写真に写っていた。確か 弟君でしたか？」

一瞬言いにくそうに言葉を濁した叶の言葉に執事が頷く。

「この屋敷の中でしたら問題ありますまい。その通りです。あの方は失踪された華代様の弟君、朔様さくでいらっしゃいます。」

「…あの、もう一人」

美夜子が訴えたかったのは、写真の男性の方ではなく失踪したはずの華代がいるということだったが、眩暈で外していた視界を元に戻して愕然とする。

「ああ。あれは朔様の護衛としてついている者です。」

執事がそう言って示したのは、どうみても成人をした大柄な男性。間違つても写真の中で微笑んでいた華奢な女性ではない。

目をこすってみても男が女性に変わるはずもなく、二人にさつきはあの護衛の男が華代だったと言つたところで信じてはもらえないだろう。

「美夜子はああいう男が好みなのか？事件が解決したら、あの人の見合いでも報酬にお願いするか？」

兄のそんな軽口にも返す余裕がない。

（見間違い……？でも、今の声と眩暈は？）

無表情のままに混乱する美夜子の問いの答えに辿り着く術はない。しかし、後にその答えを知った時、美夜子は愕然とすることになるのだが、それはまだ先の話である。

初めて彼を見た瞬間になんて綺麗な人なんだ、こんな人間がこの世にいるという現実には美夜子は驚いた。

「ほう……これが【鳴無家の呪い人形】殿か。人形と言うから、それなりの美形かと思っていたが並み以下だな。」

しかし、その驚きは爽やかな笑顔で告げられた毒舌によって『なんつー失礼な男だ』という印象に塗り替えられ、以後、彼女の記憶からは初めて彼に感じた純粹な感覚は永遠に消え去った。

かくして鳴無兄妹が案内されたのは、広く日当たりのよい書斎。さすが国一番の貴族の屋敷内であると思わせる部屋で、装飾や家具は趣味が良く、さりげない贅がふんだんに尽くされているのが庶民の美夜子にも分かった。

部屋の手前の勧められたソファは革張りで非常に座り心地が良い。その奥で重厚な机と背もたれの大きな椅子に彼は座っていた。

窓を背にしているからか、夏の強い日差しが後光のようでその神々しいまでの美しさに叶の方は我知らず目を細めていたが、美夜子の方は眉一つ動かさない無表情を保っていた。

（……並み以下。いっそはつきり不細工だと言われた方が気分が楽よね。）

その心の内は非常に強い憤りや不快感で煮えたぎっていたが。

美夜子は自分が美女だとは微塵も思っていないが、それでも十人並み程度だとは思っている。……いや、思っていたかった。

しかし、こうして正面切って暴言を吐かれるなら、同じ内容ならばいっそ不細工だと言いきられた方が諦めもつくというのだ。なの

にこの男、相手をわざわざ回りくどく不快にさせるような言い方を選んでしているとしか思えない。

言葉の内容こそ何度も言われて慣れてはいたが、それでも何度だって美夜子の中には怒りがせり上がる。それは美夜子にとっては強いストレスの何物でもなかったが、彼女はそれに慣れようと思ったことはなかった。

慣れてしまえば、表面上だけではない本当の意味で自分は無感情な人間になる。それだけは絶対に嫌だった。

だから、自分の中に湧きあがる感情は、誰に理解してもらえずとも、自分の中で強いストレスになろうとも、絶対に無視しなくなかった。常にそれを受け止めていたかった。

だが、やっぱりこういった負の感情というものは、自分のものだからこそ辛い。

表情にこそ出ないが、美夜子は心のうちで怒り以上に大きな悲しみと疲れを感じた。

「噂は本当のようだな。これだけ言われて眉一つ動かない無表情と是不気味すぎて気持ち悪い。それにしてもお人形さんは口もきけないのか？それとも僕の美しさに言葉すら出ないか？」

あまりに美夜子の心内とは見当違いなことを言い出した男に、美夜子は彼だけは自分を永遠に理解することはないだろうと確信した。確かに自分で言うだけあって美夜子が今までお目にかかったことがないほど静は美形だが、態々美夜子を引き合いに出す必要も、それも自分で言葉に出すのも愚かだとしか言いようがない。

「静様。相手は女性です。そのようなことを言われては鳴無嬢に失礼では」

「はっ。別に傷ついている様子もないんだ。問題ないだろ。しかも、僕が言っているのは真実だしな。」

「おつしやる通りです！ 静様！！」

この絶世の美青年、名はあまみやしずか天宮静といい、要は美夜子の依頼人である。

絶世の美青年と簡単に彼を表現したが、その詳細を言葉にしようと思うと難しい。

美しいという事実は無論として、その美しさの種類はその毒舌からは考えられない清廉で無垢という言葉が相応しい。

男性としての平均的な身長と体格を有しているため、一目で彼を女性だと間違えることはないだろうが、その顔の造形は男性的というよりは女性的… 中性的な雰囲気だ。

少しでも触れてしまえば壊れてしまいそうな繊細な容貌に、ふと翳る様子が酷く危うげで妖しげだ。

美夜子がうらやましいと思うほど透明で白い肌、黒い髪は濡れたようにつややかで、その髪の奥から高貴な香りの漂う紫の深い色の瞳が覗く。

ちなみにその静の両脇を固める二人の男も、美夜子が今まで出会った男性の中では美形の部類に入るのだが、静のインパクトが強すぎて霞む。

ちなみに静の暴言を諫めたのが一条悠。いちじょうゆうこの人が叶の上司であり、今回の依頼の発端となった人物。見るからに物静かで理知的な容貌は、細いフレームの眼鏡により一層磨きがかかっている。

年のころは叶よりも一回り以上年上だと言うが若々しく、はつきりいって年齢不詳である。

もう一方の男は五条叉輔。ごじょうますけ悠とは対照的に見るからに頭が悪そうで腕っ節だけが自慢というのが一目瞭然なこの男は、悠と同じくスーツに身を包んではいたが、それが異常に似合わなさ過ぎて奇妙なほどであった。

更には男の静相手に美夜子が見ても分かりすぎるほど鼻の下を伸ばしている様子は、滑稽そのものである。

静たちの言葉に湧きあがる負の感情の全てを表に出すこともできず、言葉にすることも面倒で美夜子は初めて口を開く。

「それで私は何をすればいいんでしょうか？」

それを聞きとめて、静の瞳が面白いものを発見した子供のように無邪気に輝く。

「おおっ！しゃべった！」

「（この男、本当に一度引つ叩きでもすれば私の怒りに気がつくのかしら？それとも天宮家の人間っていうのは誰しもがこんな無神経な訳？）……何をすればいいんでしょうか？」

頭の中ではいい加減自分の感情を行動に示してみようかとも思ったが、それを分かっているらしい叶によって横からずつと強い力で腕を掴まれているため行動は起こせない。さすが付き合いが長いだけあって、彼には美夜子の行動などお見通しらしい。

かといって静に一々付き合って舌戦を繰り広げるのも億劫で、美夜子はほぼ完全無視で無表情、無感情な声で言葉を重ねた。

その様はさぞ不気味だろうと美夜子は理解していたが、こういう輩にはこの対処法が彼女の不気味さに言葉を失ってくれるので一番手っ取り早いのだ。

しかし、両脇の男は二人とも想像通り顔をひきつらせて黙っていたが、静はそんな美夜子に対しても笑顔を崩さない。

「ま、とりあえずこれを調べてくれるか？」

これ以上、こちらをからかうつもりはないようだが、呆気ない反応に美夜子は心中で僅かに動揺する。

だが、それを問いただす訳にもいかず、静から悠によって渡され

た物体に目を落とした。

「この眼鏡が何なのですか？」

それは何の変哲もない眼鏡。悠のような細見でデザイン性があるものではなく、大きなレンズと黒のフレーム。する人がすればお洒落なのだろうが、一見すると野暮ったい。本当に何も無い普通の眼鏡の様に見えた。

「君は死者と会おうのに媒介が必要だと聞いている。その眼鏡はある死者の持ち物だとだけ言っておこう。とりあえず君にはその眼鏡の所持者であつた死者に会ってもらいたい。」

美夜子の能力のことを叶が何処まで話しているのか定かではないが、静が言っていることは確かである。

美夜子はいつでもどんな死者でも会える訳ではない。美夜子自身も対面できる死者とできない死者の線分けが、何処にあるのか定かではない。

しかし、そこにはまず死者が心を残す何かが必要なのだ。

それは例えば先程の依頼人の様な死者に恨まれている人物であつたり、死者が生前大切にしていた物などがそれだ。

美夜子的には死者が残す感情が強ければ強いほど死者に会える率が上がるような気がしている。

恐らく彼女の手のうちにある眼鏡も、静が言うことを信じれば、とある死者の大切な所持品と言うことなのだろう。

「あの…その眼鏡を調べることで何かが分かるのですか？私たちはまだ何の詳しい事情もきかせていただいていないのですが？」

会って自己紹介もおさなりに、いきなりの毒舌に続いて何の説明

もなくさつさと調べを始めると言いだした相手に、さすがに美夜子を抑えつけていた叶も困惑したような様子で会話に口を挟む。

「詳しい事情：ね。それはとりあえず呪い人形殿の力が本物であることを確かめさせてもらってからだ。」

要するに力が本物が確かめてから本題に入るとのことなのだろうが、その言い方は明らかにこちらを見下していて叶は不快感を表情に滲ませた。

「ここまでできてですか？」

「ここが何処だと言っんだい？」

叶としては一般市民が白亜の乙女の、さらに言えば天宮家の屋敷に招かれるなど非常事態のほかの何ものでもないと訴えたいのだろうが、静かにとってそれは大したことではないということか。はたまた、それ以上に重大な何かがこの先に待っているということか。

美しい笑顔に宿る重々しい静の言葉に、ぐっと押し黙る叶の気配がする。

それを真横で感じながら、そこそこやり手らしい兄もこの貴族たちの前では何の力も発揮できないことを美夜子は感じた。

相手はそれだけの権力を有しているのだ。

（ここで自分の能力を隠してさつさと市民街に逃げ帰ったほうがいいのかな？）

「君たちには誤解してほしくないんだが、僕は天宮家の人間で、君たちがどれほどの小金を持っていようが普通の市民であるということとは変わらない事実。別に君たちを差別するつもりはない。だが、この国では天宮家は何よりも優先されるべき人種ということは理解しているだろう？ 黙って僕の命令には従ってもらおうか。」

（…いや、これで私の能力が使い物にならないと分かったら、この人たちは鳴無家を潰しにかかるかも。それどころか私たちはこのまま無事に返してもらえるのかしら？）

ただの貴族であるというのであれば、鳴無家の財力を盾にして對抗することも可能だったのかもしれない。

だが、目の前に存在するのはこの国に生きる人間の魂を握る存在だ。

変わらない笑顔でこちらを見返す表情に今まで感じたことがない強い力を感じて、美夜子は背中に冷や汗が流れるのを感じた。

そして、気がついた。この静と言う男に対して感じる微妙な違和感。

彼は美夜子と同じなのだ。

ただ、美夜子は感情の全てが表に出ない。彼は感情の全てを笑顔で覆い隠す。

笑顔でいても何の感情も見えない。

美夜子も自分のことをとても不気味だと思うが、静に対してもその美しさよりも得体のしれない不気味さを感じた。

「分かりました。やらせていただきます。」

「うん。お人形さんはそうやって従順に命令に従ってくれていればいいよ。」

「……」

美夜子を抑えるために彼女の腕を握っていた叶の手が僅かに震えていることに美夜子は気がつく。

彼とてあれだけ言われては美夜子と変わらぬ感情を抱いているに違いない。だが、それが表情に出てしまっているのだろっ彼には、それを気がつかせないために俯くくらいしか手段がないのだろっ。

兄のそんなやるせなさを感じながら、美夜子は眼鏡の所持者であ

るという死者と出会つべく意識を集中させた。

ブクブク・ブクブク

音を立てながら足元が沈んでゆく。それはさながら底なし沼。黒以外、全ての色を許さない漆黒の闇。

美夜子はその闇に下肢が完全に沈み、既に胴まで至っていることを感じた。闇は肌で感じると少し生温かく、どろりとした感触が纏わりつく。

不快感は否めないが、これに耐えなければ生と死の狭間には至れない。この闇こそが美夜子の能力。

美夜子がどんな原理で死者と対面することが出来るのか、学者や医者に調べてもらったこともあるが、何一つ分からないという結論だけが残った。また美夜子自身とて物心つく前からその能力を有していたのだ。どうして？どうやって？死者と対面しているのか本人も分かっていない。

とりあえず美夜子に分かるのは、能力を発揮するためには死者が思いを残す何かが必要だということ。

それを前に意識を集中させると美夜子は死者が残す思いの気配を感じる。それは声であったり、匂いであったり、様々な形態であったりする。今回は声だった。

『タスケテ・コワイ・クライ』

声は遠くから聞こえてきて聞き取りにくかったが、確かに美夜子の耳に届く。

美夜子はその気配を自分の意識で追う。それは体から魂が離れるようなものなのか、美夜子も自分がどこに意識を飛ばしているのか

分かっていない。だが、ああここだなと、死者の気配がある場所がぼんやりと分かる。そうすると脳裏に真つ暗な闇と鉄格子、そして誰かの人影が映る。

（ここだな。死者の魂の気配はこの場所からとても近い場所にいる。まだ、死んで間もないのかも）

気配の場所は様々だったりする。それは美夜子の感覚だけというだけで、実際に死者の魂の有所に距離感があるのか確かめるすべはない。

だが、美夜子のこれまでの経験上、死亡してからの時間経過、また死者の思いの強さに比例して気配は近かったり遠かったり。何から近くて、何から遠いのかそれすらも分からないが、美夜子はそう感じるのだ。

かくして場所を確認すると、今度は頭の中で闇をイメージする。それこそ頭の中を空っぽにして、生と死の狭間にあるあの一点の曇りもない闇で頭を一杯にする。すると文頭の黒の底なし沼が美夜子の足元に現れるのだ。

ずぶずぶと闇に沈んでいく美夜子の視界は段々と下にさがる。そんな事態が目の前で起こっていれば、初めて見る人ならば驚くだろうが3人の美しき男たちは沈んでいく美夜子に視線すら向けない。確かに座り心地の良いソファに座っていたはずなのに、その気配もいつの間にか消えている。

要するに美夜子は実際には沈んではないのだ。

美夜子の体は生と死の狭間に行こうが、こうして闇に沈んでいこうがそのままに、動いているのは魂の様な存在だけ。体は意識を失ってぐったりとしているだけ。体を離れる美夜子の意識など誰も見ることはできない。

そのことは美夜子も知っていたので、次第に家具に隠れて見えな

くなつていく静の顔をこの際だしとまじまじと見つめた。

彼が非常にム力つくのは変わらないが、あれだけの美しい顔はなかなか見られたものじゃない。見惚れていると勘違いされるのも癪だが、見ごたえはあまりあるほどあるのだ。今なら静に気がつかれずに存分に彼を見つめられる。

（うんうん。本当に綺麗だなあ。何ていうか…人間っていうより美術品に近い…え？）

そんな風に沈みながら呑気な感想を抱いていると、ありえないことに静と視線があつた。

ありえない…と美夜子は感じたが、偶々視線が下に向いただけというには美夜子と静の視線は強く外れずに絡み合う。

（この人には私が見えているのっ？！そんな人、今まで誰もいなかったはずなのに！！！）

どきどきと鳴る心臓と絶叫を発する美夜子。だが、それを確かめようにも、沈み始めた自分を止める術を彼女は持たない。闇は既に顔にまで至っている。

視線を静から放すことができず、半ば呆然としてしまっている美夜子であるが、視界が闇に完全に沈む最後の最後に静の後ろにいるはずのない人影が突如として現れた…様な気がした。

それは一瞬、もしかしたらそれは限りなく気のせいかもしれない。だが、一瞬だけ見たと思われるその人影に対して美夜子はその時はほとんど記憶をとどめることはないが、たった一つだけ美夜子に強い印象を残した。

（誰？…私、この人を知っている？）

何処かで見たとがあるような既視感と、何故だか強い不安。それを抱いたまま、美夜子は完全に闇に沈んだ。

ガシャンッ！！！！

「コワイコワイコワイコワイコワイ」

突然の金属を叩く音と、男の絶叫に美夜子は体を硬直させ驚いた。黒の底なし沼を潜れば、そこは生と死の狭間。その場所で与えられた眼鏡に思いを残すらしい死者は鉄格子越しにのたうちまわり泣き叫んでいた。何度もこの場所に立ったことのある美夜子にとってもそれは異常な状況と言ってよかった。

死者は中年で中肉中背の男。鉄格子を掴み、髪を振り乱し、涙を流しながら顔をグチャグチャにしながら絶叫するその姿には狂気すら感じて、美夜子は立ちすくむ。

「真っ暗だ！何も見えない！眼鏡は？眼鏡はどこだ！？」

男は美夜子を前にしてもその焦点はあつておらず、何故だろうと思っていたがどうやら眼鏡がなくてはほとんど何も見えないほど目が悪いらしいと見当がつく。

多分、死ぬ時に眼鏡がなかったのだらう。

彼がどういった状況で死に至ったのか定かではないが、この様子だと何も見えない状況で何も分からないまま死んでしまったのではなかるうか？だから、眼鏡に強い心を残して彼は死んだ。

美夜子はふと自分が眼鏡を握っていることに気がついて、勇気を

振り絞り叫び続ける男に声をかけた。眼鏡を持っていることに対しては深く考えない。ここは生と死の狭間、現実にはあり得ない事が公然と起こる。

「眼鏡ならここにありますよ？」

「誰かいるのか！？眼鏡！？眼鏡を返してくれ！！！」

鉄格子から伸びる手が限界まで伸ばされたが、美夜子は思わずそれを避けてしまう。それでも懸命に伸ばされる手に恐る恐る（そんな様子には全く見えないが）眼鏡を置く。

男は眼鏡が手に戻ると、せわしない動作で眼鏡を付けようとするが、慌てているため何度も眼鏡を取り落としそうになる。

「落ちついてください。ここにはもう怖いものはなにもありませんから。」

「き…君は誰だ？ここは？！」

やっとのことで眼鏡を付けることに成功して、男は人が変わったように落ち着きを取り戻し、美夜子を訝しむように窺ってくる。

その様子と言葉に美夜子は彼は恐らく自分が死んだことすら理解していないのかもしれないという想像に行きつく。だが、先程の彼の姿に何かがあったことは確かだ。

「私は鳴無美夜子といいます。貴方こそお名前は何というのですか？」

「わ…私は…は・八条王将^{はちじょうおうしやう}。」

「そうですか。はじめまして八条さん。実は私もここに迷い込んでしまったようで、何処なのか分からないのです。」

「本当に？君は迷って困っているようには全然見えないけど。」

（余計なお世話。）

美夜子は無表情で彼を見返したまま、王将が発した聞きなれた言葉に心の中だけで返事をするだけに留める。

しかし、八条と名乗った男の方は表情の全く変わらない不気味な娘の登場に安心を感じつつも、かなりの不信感を抱いているらしく、鉄格子から一步下がり戻った視力であたりを忙しく見まわす。

（眼鏡が戻っただけで、こんなにもすぐ正気を取り戻すなんて…これは彼に事実さえ告げればすぐに成仏してくれるかも。いや、そもそも私はこの死者に対して何をすればいいのかしら？それすら聞いてないし……）

通常は死者の話を聞いて、その死者の想いを成就させたり何なりして現実に影響を及ぼすことを止めることが美夜子に課せられた大まかな役割だ。だから、王将を前にして成仏云々ということをまず考えてしまったが、静に何をすればいいかも聞いていなければ、美夜子はどうしたものかと躊躇った。

とはいうものの、ここまで来た以上何もしない訳にはいかないの
で、とりあえず王将の話を聞こうと気を取り直す。

（何も言われなかったということは、何をしてもいいってことよね）

などと非常に開き直って、美夜子は王将に改めて質問をする。

「八条さんはどうしてここにいるか、いつからここにいますか覚えて
いますか？」

「え？…そういえば何だか記憶がおぼろげで」

考えを巡らすように王将は頭を片手で抱える。

「では、覚えている最後の記憶は何ですか？」

彼に死んだことを告げるのは簡単だ。だが、それでは彼が死を受け入れたことにはならない。自分で思い出すことに意味があると美夜子は考えて質問を繰り返す。

「最後の記憶……？」

「はい。貴方はどこで、いつ眼鏡を落としたのでしょうか？」

眼鏡に思いを残していたというのであれば、それをなくした直後くらいに何かがあったと考えられる。

「め・がね？？？あ？あああ？」

あああああっ……！！

ガシャン……！！と鉄格子に体をぶつけ、王将は再び発狂した。突如として再び変貌した彼に、美夜子は驚嘆し一歩大きく後ずさりする。

鉄格子は王将が何度体をぶつけようともびくともせず、加減を知らずに体を打ち付けているので痛いに違いないのに王将はそれを止めることしない。眼鏡が鉄格子にぶつかってぐにやりと曲がって、美夜子とは逆方向に吹っ飛ぶ。眼鏡がなくなっても、王将は気がつかないままに暴れ続ける。

「助けてくれ……俺が何をしたというんだ……？」

「八条さん」

「真っ暗、何も見えない。だけど痛い……誰？俺は……！！」

「痛い……怪我をされたんですか？」

「怪我……！！？そうだ……！！俺は誰かに刺された……！！」

「刺された……。誰に？」

（この人は誰かに刺されて死んだ？でも、この怯え具合は一体何？）

美夜子は混乱する相手に静かに質問を繰り返す。一見すれば淡々とした物言いだろうが、その実は王将の様子にかなりビビりながらの問いかけである。

それでも少しでも情報を得ようと試行錯誤する。とにかくにも、こういう相手が落ち着くには相当の時間がかかるのだ。それは何時間と言う単位ではない。下手をすれば数日：いや、ずっとこのままの状態が続く死者も少なくない。

「分からない！！！」

「どうしてですか？」

「俺は部屋の中にいて、突然知らない男が部屋に入ってきた。男はナイフを持っていて：助けを呼ぼうとして：！！そうしたらあの男が俺から眼鏡を奪ったんだ！！！！」

死んだことは理解していないが、死んだ時に何も見えなかったという恐怖が強く思いを残す結果となったのだろう。

「ここは暗い！怖い！！！！誰か誰か！！！！ここから助けて、ここにはいたくないよおお！！！！」

鉄格子からぐつと伸ばされる手は鉄格子に阻まれて美夜子に届くことはないが、それでも美夜子はもう一步後ろに下がった。

この鉄格子は生と死を隔てる強い境界線。それが崩れることは万が一にもないだろうが、それでもその手に掴まれたら逃げ出せなくなるようなそんな気がして美夜子は強い恐怖を感じていた。

様々な死者に出会ってきた。恨みや悲しみなど負を持つ感情の死者に数多く対面してきたが、これほどに生に執着する死者に出会っ

たのは初めてであつた。

死者でありながら生に向かって力の限り手を伸ばす姿は、人間として当たり前前には違いないのだが、それが怖いと感じた。

美夜子の抱く恐怖が生と死の狭間にどんな影響を及ぼしたのかわからないが、そう感じた次の瞬間にぐらりと鉄格子が一本外れる。

カランと乾いた音が闇に響く、美夜子はその音が理解できず、格子が外れたという事実認識が一瞬遅れる。それが彼女に逃げるタイミングを外させた。

「たすけてくれえええええ！！！」

絶叫と共に外れた鉄格子の分だけ体を前に出して、それでも格子の外に出れるほどではないが、王将がぐつと腕を大きく伸ばす。生を強く望む死者の腕が美夜子の腕を掴んだ。

強すぎる力に痛みが走るが、それ以上に美夜子は恐怖に慄いて叫ぶ……しかし、その声は淡々とした声にしかない。

（怖い！！誰か助けて！！）

「離してください。」

「助けて助けて助けて!!!」

恐怖に支配されようともし変化のない美夜子の平坦な声を、王將の絶叫がかき消す。

美夜子はそうは見えなくても必死で腕を外そうとするが、強すぎる王将の力に逆らえるはずもなく、死の世界側にぐいぐいと引つ張られる。

王将は徒助けてほしいだけなのだろう。暗いのが怖くて、何が起こったのか分からなくて混乱している。

だけど、その恐怖が焦燥が生者である美夜子を死の世界へと道連

れにしようとしている。

「八条さん。落ちついてください。お願いします。話を聞いてください。」

もはや言葉にもならない叫びを上げ続ける王将に美夜子の声は決して届かない。

こんな事態は美夜子自身も初めてでどうしていいかわからない。だが、生者が死の世界へ踏み入れてしまえば、大変なことになるのは想像に難しくない。

美夜子は自分自身に落ちつけ落ちつけと言いつけて、意識を集中させると現実にはいた先程のまで自分が存在した世界を頭に思い描く。すると黒しかない世界から一筋の光明が、まるで地獄に垂らされる蜘蛛の糸のように美夜子の前に現れる。

美夜子は掴まれている方の手で、それに縋りついた。

開いた瞼の先にあるのが、闇ではないことに美夜子は安堵する。鳴りやまない心臓の音は大きくて、背中に脂汗がびっしょりとかいていけるのにも気がついたが、現実に戻ってきた美夜子を見る男たちの視線は平然としていた。多分、表情はいつも通り変化一つないのだろうけど、こういう時、美夜子はいつも自分が嫌になる。

心配されたいと思うあさましい自分と、心配されない無表情の自分。二つがダブルで美夜子を打ちのめす。

しかし、今回に限っては自己嫌悪よりも先までの恐怖が彼女を支配していた。

（何？さっきのは何なの！？あんな事、今までなかった！！！）

絶対に見えないだろうが、美夜子は基本的にビビりで小心者のごく普通の女性である。

死者との対面については普通ではないが、今まで散々話を聞かされたり、面倒を頼まれたりという苦痛はあったものの、自分の命の危険を感じるようなことは一度もなかった。

（鉄格子が外れるなんて…あの死者が特別ということ？それとも他に何か要因があった??）

美夜子はパニックで叫びたい衝動にかられるが、実際にはぶつぶつと気味の悪い独り言を呟きまくる頭のおかしい人間にしか見えないので、美夜子は自室で一人きりのときにしかそれをしないと心に決めている。

（ああ！！もう早く家に帰りたい！！）

ぐつと抑えきれない感情に拳を握りしめた…と、ここでどうやら現実に戻ってきたらしい美夜子が沈黙を守り続けているのに、しびれを切らした静が声をかけた。

「いい加減、何かわかったのか説明してくれないかな？」

多分、美夜子の様な一般市民に半ば無視された形になったことに腹を立てているらしく、静の顔にはうつすらと怒りの色が見える。

美夜子は何から説明していいものかと言葉を選んでいると、静の横にいた遥がその沈黙を誤解したらしく先んじて言葉を発した。

「やはり、噂は宛てになりませんね。この短時間で彼女は眼鏡を握って目を瞑っていただけ。計器にも何の変化も見られませんし…たかが一般市民に魂の存在を見ることはできないということですね。」

遥は手のひらサイズのリモコンらしきものをもっていて、かなり冷やかな言葉と視線を美夜子に向ける。どうやら美夜子の力を確かめるために科学的な検証を試みらしい。結果は何も得られなかったようだ。

一方、又輔も遥の言葉に同調するように大きく頷いて静に募る。

「だから私も申しあげました！こんな眉唾な噂など無視して、私にお任せいただければ軍人たちを使って必ずや真相を突き止めて見せます…！」

ぐつと拳を握り、すぐ隣にいる静に大声を張り上げる様子は暑苦しい他の何物でもない。体育会系も悪いとは思ないが、限度というものがあるだろうと美夜子は心の中で溜息をつく。

「それは面倒になるからやめろって言っただろ。後、声がでかい。」

その意見には静も賛成の様だ。又輔の言葉に眉をひそめる。

だが、すぐにその表情は違和感を感じたあの笑顔に変わり、うすら寒い何かを加えて静は美夜子に微笑みかけた。

美夜子の心臓が大きく一つなる。

それが恋の始まりのような甘い疼きでも伴ってくればいいが、美夜子を感じたのは強い恐怖。思わず両腕で自分を抱き、そこで気がつく。夏だが品位を損なわないために薄い素材の袖付のワンピースの上から触った片腕が熱を帯びている。その腕に視線を落として驚く。

（これは…手形？まさか、さっきあの死者につけられた跡だというの？）

薄いシフォン素材の下に透けて見える腕を掴んだ人の手形が赤く腫れている。

それが気がつく痛みと熱を持って美夜子を苛む。今まであの空間で起きたことが、現実、ましてや美夜子自身に影響を及ぼすことなどなかったため、ありえない事態に混乱を極めた。

そのせいで静の言葉に緊迫した室内の雰囲気は一瞬遅れをとった。こちらを見つめる男たちの無言の視線に、自分が何か言われたらしいと察する美夜子はあるが、一切聞いていないから何を返すこともできない。愛想笑いもできないため、瞼一つ動かない無表情で沈黙を守るだけの美夜子。

これが常のお見合いの席であれば、その不気味さに相手は顔を引きつらせることろだが、静は笑顔を張り付けたままだ。

「聞いていたか？」

その反応に美夜子は少しだけ戸惑う。初対面の相手には大抵引かれる事が多いので、それ以外の対応は新鮮というか戸惑う。

「すみません。聞いてなかったです。もう一度お願いできますか？」

「だから、君を採用するよ。って言ったんだ。」

「採用？」

「だから、我婚約者・華代の探索を君に依頼することに決めたと云ったんだよ。君はしばらくこの屋敷に留まって、彼女の行方を追ってもらおう。遥、又輔はそういう風にとりからはからってくれ。」

（げええ！何？今の流れは私はインチキだから使わないって流れじゃなかったの？）

「静様！」

「しかし！！！」

美夜子の心の絶叫に追隨するかのように、遥と又輔は抗議の声を上げる。

「これは僕の決定だ。お前たちは僕に従えないというのか？」

しかし、静の言葉に二人はその声を噤んでしまふ。

（ちょっと待て！！もっと粘ってよ！！）

それにぎよつとするのは美夜子だ。この貴族たちの相手をすることに厄介さを感じ、さっきの生と死の狭間で異常事態に見舞われたのだ。これ以上絶対に関わりたくない一心である。

「待って下さい。」

心の中では絶叫、さりとて言葉になるのはあくまで冷静。その言葉に静は柳眉を片方だけ上げた。

「待つって何を待てばいいのかな？君の意志なんて一切関係ないだろ。言っただじやないか…君たち市民は天宮家のために存在しているんだから。僕が力を使えと言え、それに従うのが道理だろう？君たちにそれに逆らう力があるとでも？」

「私は」

「そんなこと妹にさせません！！」

反論しようとした美夜子の言葉をそれまで沈黙を守っていたはずの叶が遮った。

「こんな風に言われてまで…俺は俺は」

「お兄ちゃん」

とりたてて兄妹仲が悪い訳ではないが、叶が自分の為に天宮家の人間に盾ついてくれるなんてと、美夜子は感動すらした。しかし、彼を呼んだ美夜子の方を向いた兄の顔を見て、おや？と思う。

「何？お前はここまで言われても、やっぱりこれを引き受けたいと？」

「お」

そんなこといってないしと思う美夜子であるが、叶はその表情にうつすら涙すらためて訴える。

「いやいや！俺は認めないぞ！！申し訳ありません！少しの間妹と二人で話をさせていただけませんか？」

「いいよ。」

「ありがとうございます。じゃ、行くぞ。」

次いで美夜子の腕をとって叶は廊下に出ると、途端に顔の表情が張り付いた笑顔から鬼のような形相に変わった。

「お前は馬鹿か！！！」

小声で怒鳴られて戸惑う。

「何？いきなり」

「折角、俺が小市民を演じて相手を油断させてやって、お前が天宮家に取り入れるように計らってやってるのに！！」

「お兄ちゃん。ひょっとしてさっきのは演技なの？」

（小市民？それって能力を使う前に震えてたり、今の私を庇ったことが…演技ってこと？）

「当たり前だろ。俺やお前の思惑を悟られないためにはある程度の小細工は必要だからな。素直にはいいということ聞いてやるより、少しくらい反抗して見せた方が、普通の小市民だろう？」

にやりと笑う叶の目には噓泣きの涙が残っている。美夜子は怒るよりも呆れた。

「……お兄ちゃん。だんだん母さんに似てきたね。言っとくけど私は普通の小市民でいいし。」

「狸婆と一緒にするな。ともかく、これから先は多分、俺はお前と一緒にはいられないだろうからな。後は一人で何とか事件を解決して天宮家に恩を売るんだ。分かったな？」

「……はい」

言うは易し行うは難しである。美夜子はとりあえず返事をしたが、兄の過剰とまでいえる演技に聊かうんざりした気分である。

兄がこうなってしまうたら美夜子は何をいつても無駄だろう。大体、感情の発露が出来ない美夜子と、演技過剰であろうが本気になった叶ではその言葉の真意はどうであれ、信じられるのは兄と決まっている。

それに静はこちらの思惑がどうであれ、美夜子に婚約者の探索をさせるに違いない。

（あの人にはあの時の私が見えていた…私の力を信じたってことなの？）

兄に説得されて協力するという設定で部屋に戻る小市民・美夜子は、先程の事、これからの事、考えるだけでただただ憂鬱であった。

1 - 6 (後書き)

読んで下さった皆様、ありがとうございます！導入部分がこれで終了となります。ここまで坦々と話が続いてきましたが、これから色々物語が展開する予定ですので楽しみに。

お気に入り登録してくださる皆さま、本当にありがとうございます。一人増えるたびにとってもうれしく思っております。

コンコンと静かな部屋に響くノックの音で美夜子は目を覚ました。

「あ…さ？」

目を開くと薄暗い室内にカーテンの隙間から洩れる日差しが差し込んでいる。そろそろ起きる時間かあと、そんなことを思いながら背伸びをしつつ起き上がって美夜子は固まった。

周りの景色が慣れ親しんだ自室とは全く違うのだ。

(…：そういえば私、白鷺邸にいたんだった。それにしても私も大物。こんな状況でもしっかり熟睡できたし)

昨日、兄と共に白鷺邸を訪れた美夜子は半ば脅迫される形で邸に留まることを強要された。その後、静よりの話は続いたが、実のところは話の半分も理解していない…というより理解しなくなかった。やる気なく聞いていてもその実が周囲にはれない事をいいことに、その後美夜子はさつさと案内された客室で不貞寝を決め込んだ。

現実逃避と言われても構わない。寝て解決することなど何も無いのは分かっていたが、少しだけでもこの状況を忘れてしまいたかった。

更に言えば、そんな状況であろうが豪華な洋室に鎮座する大きなベッドでぐっすり熟睡していたらしい自分を省みて、心の中だけで乾いた笑いを洩らすしかない。

と、そこでまた扉をノックする音が聞こえて、美夜子は慌てて扉を開けた。

「おはようございます。美夜子様。」

かくして眩しい朝日の中には、深く頭を下げる女性。

「…おはようございます。」

とりあえず挨拶をされた以上、挨拶を返さない無礼はできないので起きぬけの働かない頭で咄嗟に美夜子は挨拶を返す。

身一つで白鷺邸に取り残された美夜子ではあったが、生活するための必需品は普段使っている諸々より上等なものが揃えられており、今は自分では絶対に購入しないだろううひらひらのネグリジエを美夜子は着ていた。

その格好で安易に誰とも分からない訪問者に扉を開けるのは如何なものかと、普段の美夜子ならば気がつくだろうが、咄嗟の事に自分の服装にも、現在の状況にも気が付けてない。

「あの」

「私は七条蝶子しちじょうていしと申します。ここでの美夜子様のお世話を静様より仰せつかりました。」

そう言つて顔を上げた彼女は所謂メイド服なるものを身にまといていたが、美夜子が彼女の全体像を見てとりあえず思ったことは一つ。

（似合つてない）

それは決して彼女が不細工と言う訳ではない。寧ろ彼女は美形の部類に間違いなく入るであろう。しかし、如何せん彼女はメイド服が似合う美形ではないのだ。

背は平均的な身長がある美夜子よりも頭一個近く高く、スラリと

した体軀、長い手足は美夜子から見たらうらやましい限りである。肌は異国の出身なのか黒く、髪は薄い金髪のショートカットで、目の色は髪の色によく似ているように感じるが、何色かと言われると難しい色をしていて、顔全体のパーツはどれも一つ一つがはつきりときりりとしている。

（彼女はメイド服っていうか、もっと派手なドレスとかびしっとしたスーツとかが似合うんじゃないだろうか？）

そんなことを彼女を見た瞬間に思った美夜子は、ぼんやりとしていて蝶子の言った言葉に対する返答が遅れた。

「それでは早速、朝のお支度を手伝わせて頂きますね。」

おかげで呆然と立ち尽くす美夜子の横を通って部屋に入る蝶子を止め損なう。そうは決して見えないだろうが、美夜子は慌てた。

「それくらい自分でできます。世話など私には無用ですから。」

豪商の令嬢とはいえ実家には使用人の一人もなく、自分の世話どころか家族の世話や家事は一切を美夜子は切り盛りしている。世話が無用などどころか、はつきり言ってそんなもの恥ずかしすぎて勘弁願いたい。

「そうですか。まあ、そうですね。」

（あれ？）

「…はい。」

そんな風にあっさりと掌を返す蝶子に肩透かしをくらうが、美夜子の『はい』は普通の返事どころか、恐ろしいまでに感情が抜け落

ちた平坦な『はい』だ。表情も変わらず、美夜子の事情を知らなければどんだけ無愛想なんだと思われるでも仕方ないであろう。

そんな彼女をメイド服の似合わない迫力系美人の蝶子がまじまじと見つめる。

その目には気味悪がる様子もなく、何処となく面白がるような色が見てとれて美夜子は戸惑い一歩後ずさりする。すると蝶子は一歩近づく。

美夜子が一歩下がる。蝶子が一歩近づく…そんなことを繰り返して、気が付けば部屋の隅に追いやられて逃げ場がなくなる美夜子。顔を思いつきり近づけられて居たたまれなくなつて美夜子は俯こうつするが、それを蝶子は顎を掴んで上を向かせた。同じ女性とは言え身長差があるので首が痛んだ。

「へえ…痛みでも表情が変わらないんだ。」

「…痛いのが分かつているなら、放してもえませんか？」

「それでも感情はある訳ね。ごめん。ごめん。」

その言い方に少々カチンときた美夜子は蝶子の手を乱暴に振り払ったが、彼女は特段気にしたようでもなく、少しだけ考えるように黙り込んでぼつりと一つ洩らした。

「…心失病しんしつびょうじゃないのよね？」

その言葉に内心では顔を顰める美夜子。

『心失病』、名の通り『まるで心を失つたような状態になる病』である。その原因も治療法も未だ確立されていない、ずっと昔からこの世界に存在する不治の病だ。

それはある日突然、何の予兆もなく年齢も性別も身分も関わりなく降りかかる災い。多くの人間が同時にかかったり、伝染するような気配もないが、病は常に何処かに存在し、この世界に生きる人間

ならば誰しもが知っている病であった。

そのため一見して感情が抜け落ちたような美夜子は心失病とわ
れがちであった。

「違います。」

しかし、そこは声を大にして言い切りたい美夜子である。

心失病は本当に全ての心が抜け落ち、心どころではない『生』そ
のものが感じられない正に人形のようになってしまうことを指す。

心臓が動き、息をしているだけで病にかかった者は、自分で食事
をすることも、服を着ることも、歩くことすらなく、誰かに世話を
してもらわなければ生きながらえることはできない。記憶すらなく、
声を発し、自分の意思を伝えることすらないのだ。

そこをいくと美夜子は感情こそ表に出ないが、ただそれだけで他
は普通の人間と変わらない。その違いは大きい。

「でも、その一種と言う可能性は無きにしも非ず……かあ。貴方、し
っかり仕事しないとあの女のモルモットにされるかもよ？」

「あの女ですか？」

急に話し方も雰囲気も変わった蝶子に圧倒される美夜子。砕けた
話し方になった彼女は恐らく美夜子とそう年齢は変わらないのだろ
うが、につこりと笑う姿は艶やかで同性の美夜子ですら思わずとき
りとするほど綺麗だ。

だが、その美しさと彼女の物言いと物腰はあまりにギャップが激
しい。美夜子はそれについていけない自分を強く感じた。

「まっそんな事は今はいいか。ともかく、私は貴方の世話というか、
監視と護衛を静様から仰せつかっているから、よろしく！この屋敷
で怪しまれずにいるためにこの恰好をしているけど、メイドなんて

したことないから、世話なんてできないし！！もし断られなかったらどうしようかと思った。」

（なるほど…まあ、私も一人でこの屋敷をうろつく勇氣はないし…それにしても監視はともかく護衛？それに『怪しまれずに』ってどういう意味？）

蝶子の言葉の一つ一つに疑問を感じずにはいらなかったが、それを口にするだけで何故だか自分が関わりたくない何かに関わっていきそうな気がして、美夜子は躊躇う。

だが、自分の身の安全だけは確保しなくてはなるまいと意を決する。ここでは自分の味方は自分しかない。

「護衛とは、どういう意味でしょうか？何か私が狙われるようなことがあるのでしょうか？」

「ああ、構えなくてもいいわよ。あくまで念のためよ、ね・ん・の・た・め！華代様は忽然と消えているし、死人も出ている事件だからあれから一カ月以上たっても何もないけどその搜索で何があるか分からないしね。あと敬語じゃなくてもいいわよお！めんどくさいし！」

がははと蝶子は上品な容姿とは打って変わって大口をあけて豪快に笑いながら、更に言葉を続ける。

「私この事は気軽に蝶子って呼び捨てて！私もあんたのことは美夜子って呼ぶね。」

とまあ、了承を得ることすらなく話を進める蝶子に言葉を挟むすきがない美夜子は、自分がこれからどうなっていくのか今更ながらとても不安になったのである。

「とりあえずクローゼットの中に洋服も入っているから、適当に選んで着てちょうだい。静様が朝食を共にしたいと仰せよ。」

見た目はともかく大凡貴族に仕えるには品が欠けているとしか思えない蝶子であるが、さすがに主らしき静に関しては敬語を使って話すようだ。

朝食から静と一緒にだということに気分は落ち込んだが、クローゼットをのぞいた瞬間に更に追い打ちをかけられた。

ずらりと並ぶ美夜子もっている数より多い服。それを見てくると眩暈を感じた。

しかも、選ぶのも面倒なので、適当に選んだワンピースのサイズがぴったりに驚きよりも不気味さを感じた。

（余計なことを考えるのはやめよう。）

うすら寒いものを感じつつも、そうして美夜子は機械的に自分の支度を一人で整えていった。

蝶子の案内によって白鷺邸の一室に案内された美夜子は、朝も朝から爽やかすぎる笑顔の裏で黒いものを抱えた静に迎えられる。

「おはよう。呪い人形殿。」

『呪い人形殿』と呼ばれて嬉しい訳はないが、美夜子は言い返さない。それよりも静と言葉を重ねることの方が苦痛だと思うからだ。

「おはようございます。」

縦に長い晚餐のために使われるような机の先に腰掛ける静の隣の横面にだけ朝食らしきものが用意されており、美夜子は促されて座る。

静の横には遥と叉輔が立ち、美夜子の後ろには蝶子が立つ。三人には朝食は用意されていないようだ。美夜子は何だがいたたまれない気持ちになり、今更に身が小さくなる思いがした。

「話を始める前に食事を済まそうか。」

「はい。いただきます。」

と行儀よく挨拶をきちんとして食事に取り掛かろうとした美夜子は、目の前に用意された朝食らしきものに違和感を覚える。

それはスープだと思われるもの。だが、湯気を立てる透明なスープには具が何一つ含まれておらず、その近くには他の主食やおかずらしきものも皆無。

貧しいとしか言えない食事内容に見覚えがない訳ではないが、貴族の食卓で並ぶ内容ではあるまい。少なくとも昨日ふるまわれた夕食は食べたこともないくらい豪華な内容であった。（ちなみに夕食を気分が乗らなくてあまり食べられなかったこともあり、美夜子は今は非常に空腹を感じている）

（何…いじめ??）

スプーンを手にして固まった美夜子であるが、視線を動かして静を見れば同じ内容の食事を顔色一つ変えずに食している。

「ああ、これは天宮家秘伝のスープだよ。魂を扱う者として生き物を食べる訳にはいけないのでね。僕たちは基本的に菜食主義者なんだ。」

「そうなんですか。」

そう言われると昨日、美夜子をご馳走を前にしていた時、夕食を共にしていた静はサラダしか食べていなかった気がした。

だが、昨日は美夜子は別メニューだったのに、どうして今日は同じメニューなのだろう？

疑問はあったが、このあっさりしすぎたメニューに氣力を無くして美夜子が出されたスープに手を出し始めた。

まずくはないが、薄い…としか言いようがない内容に心の中では不満たらたらの美夜子である。かくしてあっという間に朝食は終わった。

「さて本題に入ろうか。」

（美しいっていうのは分かっているんだけど、私、やっぱりこの人の事を好きになれない。ま…私に好かれようが、嫌われていようが天宮家の方には関係ないのか）

などと心の中だけで昨日の静の言葉に嫌味を返すが、実際にそんな事を言えるはずもない。

「一応、昨日あらかたの話はしたつもりだけど、呪い人形殿はほと

んど話を聞いていなかっただろう？」

（ばれてたか）

「沈黙は肯定とみなすよ。今日はちゃんと聞いて頂きたいものだね。僕はこの後は仕事があるから、捜査には協力できない。その辺りは蝶子と叉輔に頼んである。」

背後にいた蝶子がそれに答えるように美夜子の横に立ち一礼をし、静の後ろに立つ叉輔はぶすつとした顔を隠そうともしない。

「事件の大凡は事前に知らせていた通り。僕の婚約者であった桜月華代は一か月前、この白鷺邸に宛がわれていた自室から忽然と姿を消した。更に言えば、彼女が消えたその部屋は一面が血塗れだった。部屋の大きさは君の客室と同じくらい……その血の量が大量であったことは分かるだろう？」

消えた令嬢に血塗れの部屋。

紗耶に付き合っつてサスペンシ的なドラマや映画、小説に関して詳しい美夜子は、その情景がありありと想像できた。

フィクションだと思っていればさして恐怖もわいてこないが、現実に関にそれを目の当たりにしたら卒倒ものだ。

今はまだ話に聞いているだけで想像にも限度があるので問題ないが、実際その部屋をこれから目の当たりにするのだろうと考えるだけで気が滅入る。

（せめて『血塗れ』だけは勘弁してほしい）

美夜子はそんな風に考えながら静の言葉を黙って聞き続けた。

「四方八方に手は尽くしているけど、華代は未だに見つからない。そもそもこの白鷺邸は天宮家の別邸とはいえ、僕が長年主を務める

屋敷。悪いけどセキュリティについては国の中でも嚴重な方だ
と思う。にもかかわらず、華代はその夜何者かに攫われたか、もし
くは殺された…訳だ。」

「誰も、何も気がつかなかったのですか？」

「生きている者は…ね。」

「どういう意味ですか？」

静は昨日の眼鏡を机の上に置いた。

それを見て、美夜子は昨日の事を思い出して王将に捕まれた腕を
触る。つけられた手痕は気が付けば消えていたが、美夜子の脳裏に
は深く恐怖と戦慄が刻まれている。

「そのために昨日、これの所持者と対面してもらった訳だよ。」

「あの人がその目撃者と言う訳ですか。」

「その通り。彼は華代の護衛であり、あの夜、華代と共に姿を消し
た。恐らく華代と共に何かに巻き込まれたと考えるのが妥当だろう
ね。名前は……」

「お待ちください！！！」

続く言葉は又輔によって遮られた。その馬鹿でかい声に美夜子は
耳が痛くなるようなきがした。

「…うるさいよ、又輔。」

「はっ！申し訳ありません、静様！！」

「もういい。それより何だ？」

大きな動作で頭を下げる又輔に対して、呆れたように静は先を促
した。美夜子の後ろでは蝶子のあからさまなため息が聞こえた。

「はい！その死者の名はこの女に言ってもらってこそ、この女の能

力が証明されるのではないでしょうか？大体、昨日は結局この女
能力が本物かどうかはつきりしておりませんし。」

それに同調するように遙も頷く。

「そういえばそうですね。静様は鳴無嬢の能力を信じておられるよ
うですが、女史より借りた計器には何の反応も示しませんでしたよ。」

「

どうやら美夜子の能力について科学的な解析を試みたようだが、
結果は何も得られなかったらしい。

要は二人は美夜子の力について胡散臭さを拭えていないというこ
とだろうが、美夜子にとってはそんなどうでもいい。寧ろそう思っ
てさっさと家に帰してくれと思うところだが、美夜子には美夜子で
事情がある。

息を大きく吐いて美夜子は静かにあれこれと訴える二人を黙らせ
た。

「私がその眼鏡を通して対面した死者の名前は八条王将。眼鏡がな
くては視界がほとんど得られない彼は、死んだ時…眼鏡を奪われて
いたようです。だから、彼はその眼鏡に強い思いを残した。」

目を閉じた先にある瞼の裏の闇は、生と死の狭間の闇とは全く違
う。同じ闇でも重みが違う、暗さが違う。

それでも明るい朝日の中よりは、蓋をしたい記憶を思い出すには
適しているだろう。鮮烈に闇の中の王将の狂気と、腕を掴まれた時
の恐怖が蘇る。

『クライ！コワイ！ココニハイタクナイ！！！！』

生を死を別つはずの鉄格子を超えて掴まれた腕が痛むような気がする。だが、それは気がするだけだと言い聞かせて、美夜子は言葉を重ねた。

「ですが、彼は自分が死んだことすら認識していないようでした。突然現れたナイフを持った男に刺されたと、そう言っただけ以上は何も私に語りませんでした。」

「ふーん。男に刺された。王将はそう言ったのか。他には？」

「眼鏡をなくして、本当に何も分からないまま八条さんは亡くなったようです。助けを呼ぼうとしたら眼鏡を奪われた……と言っていました。」

静は美夜子の言葉に顎に手を当て考えるような素振りを見せる。

一方、その後ろの二人は遥は驚いたような顔をして、又輔は悔しそうに顔を顰めている。それを見て少しだけ気分を良くした美夜子であったが、次いでかけられた静の言葉に思考は完全停止した。

「さて、僕から話せることはとりあえずこんな所だけ……まず、ここで一つ聞かせてもらいたい。君たち兄妹の目的は何だい？」

「何のことでしょうか？」

美夜子はこのいう時にだけ自分の能面顔に感謝する。どんなに動揺しても、焦っても彼女には感情の欠片も見当たらぬ。

「お互い面倒な腹の探り合いはやめよう。正直言っただけの兄の小芝居も興ざめだったし。」

（お兄ちゃん……ばれてるよ）

「僕としては君がこの事件を解決さえしてくれば、僕が出来る事ならある程度の事は報酬として叶えてあげようと思っているんだよ？」

静が推測、いや確信するように鳴無兄妹にはこの事件を通して遂げたい『目的』がある。

それがなければ美夜子はここに残ってはいない。いや、そもそもこの能力をこんな風に誰かの依頼を受けて使うことも一生なかったに違いない。

だが、誰が正直にそれを言えるであろう。

「目的なんかありませんよ。私は兄を通してそちらの一条様からご依頼を受けただけです。」

「そんな戯言が通用すると思っているのか！？鳴無家がお前の力を使って暗躍していることは、もうすでに調べ済みなんだぞ！！何か目的があるからお前はその能力を使って、色々な貴族を食い物にしているんだろう！！！」

「私は困っている方をお助けしているだけです。それがどうして暗躍に繋がるんでしょうか？」

怒鳴り散らしながら喚く叉輔に美夜子は内心ビビる。

それでも美夜子は母が自分の力を経て知った情報で脅迫を繰り返している事実を知っているが、しらを切り通す作戦に出た。というかそれしか思いつかなかった。

もし、美夜子に表情というものがあつたのなら、アタフタとして彼女が嘘をついていることなど誰にでも分かつてしまっただろうが、無表情で平坦な声のまましらを切り通す美夜子には不気味さと迫力が備わっていた。

「な・そんな事！！信じられるか！！」

「私は嘘を言っていないません。だから、信じられないと言われても、私にはそうだとしか申し上げられません。」

「お前、言っていることが嘘っぽいんだよ！！」

美夜子の切り返しに頭が弱いのか、言葉が足りないのか、まるで子供の癩癩の様に怒鳴り散らす又輔に遙と蝶子が揃って特大のため息を吐く。それが更に又輔を煽り彼は一人で激昂を続ける。そしてそれを一切無視してこちらを窺うような顔で見つめてくる静。

美夜子はどうしたものかと悩み続けて、それならばと切り出す。

「そこまで言われるなら、私の、いえ鳴無家の悲願をお恥ずかしなから申し上げます。」

静がおやと面白そうな顔をし、又輔が黙る。遙と蝶子も美夜子に注目した。4人の視線を一齐に受けて美夜子はやっぱり無表情に告げた。

「それは私の結婚です。」

端的で明確な願いに一同驚いた後に、又輔が激昂のあまり音を立てて机を叩く。

「冗談をいうな!!!」

「冗談なんかじゃないですよ。私はこんな風なので何回もお見合いを繰り返しているんですけど、縁談がまとまらないんです。私ももういい年なのでそろそろ結婚したいんですよ。なのでもしこれが成功したら、天宮様のお力で私に縁談を下さい。」

本当のところは死んでも言えない。こんな冗談のような言葉で彼らをだませるとは思っていないが、美夜子の言葉を聞いて静は声をあげて笑い始めた。

それを美夜子他の三人が驚いたように目を大きく開いて見つめる。

「ははは……いいだろう。考えておこう。じゃあ、報酬の話も済んだことだし今日から頼むよ。呪い人形殿？」

ひとしきり笑った後、静は美夜子を見てにっこりと微笑んだ。

それはそれは美しい頬笑みだったが、その微笑みに美夜子は非常に黒い不吉な予感を抱いた。

（ひょっとして私、何か大きく間違ったことを言っただかも？）

さりとて全ては後の祭りである。

静と遙と別れた事件捜査チーム（美夜子・叉輔・蝶子）はまず事件現場に向かうこととなった。要するに華代の自室と言う訳だ。

部屋の血はすでに綺麗に掃除されていて安堵した美夜子ではあるが、開け放たれた扉を前にして何故だかその部屋には入りたくないと本能が訴えた。

扉の前で足を止めた美夜子に先に部屋に入った二人が眉をひそめる。

「何？やっぱり悪い霊でも感じる訳？」

静がいなくなった途端に、とてつもなく砕けたというか、やる気のない口調になる蝶子のことに美夜子は敢えて考えないようにして言葉を返す。

「いいえ。私、基本的に靈感とかはないので、そういうのではないと思います。ただ…何となくこの部屋には入りたくないと思って。」

美夜子は生と死の狭間以外で死者が動いているのを見たことがない。幽霊的なものを感じたこともないし、他には一切特別な力を有していない。

この部屋に入りたくないのは、多分別の要因だ。美夜子は根拠はないがそう確信する。…がその原因に心当たりはない。

「だから、敬語はいいって言ってんのに。っーか靈感ないの？」

「じゃあ、何で死者と対面できるんだよ！！！」

「それは私にもよく分かりません。」

「おっお前なあああ！！！」

がくりと倒れこんで青筋をたてる又輔。

又輔からすれば美夜子に相当おちよくられている感覚なのだろうが、美夜子としてはそんな気持ちは微塵くらいしかない。

微塵はあるのだから、悪気が全くないとはいえないだろうが、美夜子を不気味がることなく、こうして怒りに打ち震える彼の態度は新鮮だなあと思うのだ。

「まあまあ、そんなに怒んない。怒んない。」

「チョーコ！！お前は誰の味方だ！！大体、そんな似合わないメイド服！さっさと脱いじまえ！！」

又輔を宥めようとした蝶子だが、逆に又輔に似合っていないと言わざるを得ない服装について言及されて顔つきが変わった。

「うつさい。この服装の何処が似合っていないって言うのよ！！大体！私は静様からこの子の護衛を任されてんのよ！？あんただってそうでしように、その態度を静様に言いつけるわよ！！！」

「こいつの態度が気に入らねえ！お前のメイド服も気に入らん！！」

「何ですって！！」

（話、ずれてるし。とうか、蝶子さん：似合っていないとは思っていないんだ。）

静の配下同士で気心が知れているらしい二人は、美夜子の話から段々お互いを罵り合いだした。言葉を挟む隙間もない、ある意味非常に息の合った罵声の応酬に呆気にとられる。しかも、一向に収束の様子が無い。

美夜子はとりあえず二人と部屋に入りたくないという直観は放つ

て、部屋の中に華代の行方の手がかりがないか探すことにした。

瞳を閉じて、意識を集中し自分が感じられる何かを探す。

王将の眼鏡の様な確かな手ごたえは全く感じない、だが、ふと美夜子は微かな匂いを感じた。それはとても馨がくわしいように感じたが、次の瞬間に不快な香りで更に言えば良く親しんだ気配を孕んだ。

（……生と死の狭間？）

匂いや気配というよりは、空気……のようなものだろうか。

美夜子を感じたのは生と死の狭間の冷たく、陰湿で、淀んだ空気。それは常に美夜子にとっては生と死の狭間に横たわる暗闇とセットであった。

――王将の狂気を帯びた叫びが木霊する

ゆっくりと瞼を開けて、ここが現実であることを確認して美夜子は大きく息を吐いた。そして、思いいたる。

美夜子がこの部屋に入りたくないと感じたのは、昨日の恐怖が苛むから。生と死の狭間とよく似た空気が、美夜子の中の恐怖心を無意識に起こさせて部屋に入ることに拒否感を感じさせたのだろう。

（だけど、現実でそれを感じたことなんて、今まで一度もなかったのに……どうして??）

一瞬だけ悩んでみた美夜子であるが、それをすぐに頭の片隅に置く。美夜子は基本的に悩んでも分からない事には、あまり時間をかけないタイプである。（ようは考えるより、体を動かすということだ）

とりあえず部屋に入りたくない理由は分かったのだ。扉の前で戸惑っていても仕方がない。そう考えて美夜子は意を決し、部屋の中

に足を踏み入れる。

部屋に入った途端、感じている空気が一層重くなったように感じた。

「……」

が、それ以外は取り立てて何もなさそうだ。美夜子は改めて部屋の中を見回した。

とりあえず姦しく喧嘩を続ける又輔と蝶子は無視して、部屋の中を物色する。部屋は血は綺麗に拭きとられているようだったが、基本的には現場の保持を務めているらしく、日常品などが無造作に置かれたままで、まるでこの部屋の主は今もここを使っているような気配がした。

ただ締め切られた部屋の中はムワツと夏の熱気に蒸しかえつていたし、埃っぽさは感じずにはいられない。

部屋の大きさは静が言ったように美夜子に宛がわれた客室と同じくらいの広さであり、ここも客室なのか雰囲気も良く似ている。

部屋に入れば怪しげな雰囲気はぶんぶんするので何か分かるかと思っただ、生と死の狭間とよく似た空気の他は何も感じられない。

（どうということ？ここで一体何があったの？）

「で？何かわかったあ？」

思考の海に沈んでいると、眼前に突如として蝶子が現れ声をかけた。

完全に二人の事を忘れていたこともあり、美夜子的には空気のせいで強い緊張も感じていたので、突然声をかけられて美夜子は驚いた。それはそれは驚いて……

「きゃー」

まるで気の抜けた大根役者の下手すぎる叫びみたいな声が出た。仕方がない。心の中では大絶叫だが、美夜子が発することが出来るのは何ともやる気のない音でしかないのだ。

驚きの次にはっと我に返る美夜子。彼女はこちらを呆然とこちらを見やる又輔と蝶子を、嫌な予感を抱きながら恐る恐る見る。

『……………ぶ』

又輔と蝶子は呆然とした表情を次の瞬間歪めると、僅かに笑い声を洩らし、その後大爆笑にのたうち回った。

「ぎやははは、何！？今の叫び？何かの鳴声みたい！！！」

「ぶぶつ！ぐ…ぐるし！！」

これだから嫌なんだと美夜子は笑い転げ始めた二人を冷ややかに見下ろす。知っている。自分の絶叫が如何にして他人に影響を及ぼすなど、家族の反応から嫌というほど理解している。

『お前、それっ！それっ！何、気の抜けた叫び！！！！』

兄・叶にはさして何回聞いても笑われる。故にそれを知っているからこそ、美夜子はあまり驚かないようにしているし、いつも冷静沈着をもっとうにしているのだが、美夜子だって人間だ。驚いて叫びを上げて何が悪い。

2 - 3 (後書き)

ちよつと短めですが、やつと物語も本題に差し掛かってくれました。
これから美夜子には色々巻き込まれてもらうつもりです(笑)

お気に入り登録や評価して頂いた皆様ありがとうございます! 数は少なくても、とても励みになりました!

「ゴホン。で？この部屋から何か分かったのか？」

あれからどれくらい二人が笑い続けていたのか分からないが、結構な時間を二人は笑うことに費やした。

美夜子はそれに対して何も言わなかった。何か言うと更に笑いを煽ることを美夜子は過去の経験から理解していたからだ。

「結論から言えば、何も分かりません。」

それを聞いて又輔は怒鳴った。

「何い！？それじゃあ、俺は笑い損か！？」

「意味がわかりません。」

一刀両断した美夜子に又輔が眉を上げたが、蝶子がまあまあというように間に入る。

「又輔、それは私も意味分かんない。何よ、笑い損って？」

「チヨーコ！またお前はあ。」

「ストップ」

話が再び脱線しそうだったので、美夜子は二人の間に割って入った。

二人はきょとんとした顔をして、無表情のまま美夜子是不気味がられるかと不安がったが、二人はあっけらかんとしたものだっ

「そうね。喧嘩は後でもできるわね。」

「俺は喧嘩しねーぞ……まあ、今は事件解決が先だな。で？何も分からないっていうのは、ここには何も無いってことか？」

この二人、何とも美夜子に対する対抗が柔軟だ。家族以外では普通の対応すらされた覚えが少ない美夜子は戸惑うが、そういう場合でもあるまい。又輔の言葉に頷いた。

「昨日、八条王将さんの眼鏡から感じ取れたような手掛かりは一切感じられません。この部屋には桜月華代さんが思いを残すものがないと考えるか、はたまた彼女が死んでいない……という可能性もあります。」

生と死の狭間の気配はある。……が、それをどうして伝えればいいか。それがあるからと言って、何だと言われると美夜子自身も答えに窮するので口を噤んだ。

「それはないな。」

だが、希望を口にした美夜子の言葉をあっさりと又輔は否定した。その迷いのない否定に美夜子は違和感を覚える。

「どうしてですか？死体は見つかっていないんですよね？血塗れの部屋と言っても、八条さんがここで殺されていると言うならば血は八条さんのもので、華代さんは死んでいない可能性だってあるじゃないですか。」

「血液に関してはDNA鑑定をしている。」

『DNA鑑定』という、テレビや小説で耳にする言葉に内心で感心する美夜子。実感は未だに湧いてこないが、確かにこの事件は軍

が血眼になって捜査した事件なのだ。

「結果として王将のものは勿論、華代様の血液も発見されている。確かに死体が見つかっていない以上、死んでいると断定できるものではないが、王将が死んでいると言うならば、華代様も十中八九死んでいると考えるのが定石だろう。」

「ちなみに王将の死体もまだ見つかっていないわ。私たちの一縷の望みとしては、王将が華代様を連れ去ったという可能性が残っていたのだけれど、貴方の話が本当ならば…王将は既に死んでいる…一緒に消えた華代様もまた死んでいると考えるのが自然…よね？」

三者の間に陰鬱な空気が流れた。
なるほど。得てしたものではないにしても、美夜子は彼らの最後の望みを打ち砕いてしまったという訳である。

（それにしても天宮静…あの人は全く何も感じていないようだった。自分に近い人の死を突きつけられたら、少なからず何か感じるものが彼らのようにあるはず。婚約者となれば、私じゃないんだし、何らかの感情の変化がありそうなものだけど）

表情を暗くする二人を見ながら美夜子は朝食の場での静の様子を思い出すが、彼の表情は特段変わった風もなかった。それが今になつて不自然に蘇る。

「あの…死者の思いは勿論死んだ場所とか、その時に近くにあった者に依ることが多いんですが、その他に多いのが家族や恋人です。天宮様とかご家族とかを調べさせて頂くとか、桜月華代さんが思い入れの強い物とか何か分かりますか？」

事件のあらましかけだけで華代についての情報はほとんど皆無と言っ

てもいい。事件現場らしき場所には何の手がかりもない以上、美夜子は次の手を考えた。

又輔は美夜子の言葉にぐくりと唾を飲み込んだただだったが、蝶子は少し考えた風の後に続けた。

「家族ならこの屋敷にいるわ。華代様の弟・朔様。華代様は弟と仲が良かったから、彼に思いを残しているという可能性はあるわね。私や又輔も華代様に附いたことはないから、実際の所あまり詳しいことは知らないの。その辺も彼から聞けたらいいけど……今は難しいかもしれないわね。」

二人とも頭が足りなさそうというか、言葉遣いに少々社会人としてのモラルを欠く気がしていたが、さすが貴族に仕えているだけのことはある。

美夜子の問いに答える様子は非常にきびきびとしている。（蝶子のメイド姿でのその様子には何とも奇妙な感覚を覚えるが）

「難しいって、どういう意味ですか？昨日、遠目から拝見した様子だと病気とか、気落ちされている様子はなかったですけど。」

と、美夜子はそこで思い出す。

華代の弟・朔を見かけた時、彼と一緒にいた人物に華代の幻覚が重なった。その理由は分からないし、それが華代の残す朔に対する思いの影響なのかは定かではないが、蝶子が言うように朔に彼女の想いが残っている可能性は高い。

「まあ、言葉で説明するのは難しいの。実際に見てみた方が早いわ。又輔、今どこにいるか連絡取ってみてよ。」

「おう。っていうか、俺が連絡するのか。」

「だって、私アイツ苦手だもん。」

軽口をたたき合い、ぶつぶつ言いながらも又輔はズボンのポケットから携帯電話を取り出すと、何処かに電話をし始めた。

「何処に電話しているんですか？」

「ん？ 朔様には超がつく過保護な護衛が付いているからねえ。アポなしで近づこうものなら、美夜子みたいな不審人物はシャットアウトされるちゃうから。先に連絡して了解とっておこうと思って。」

不審人物という言葉に否定できない自分を悲しく思いながらも、その過保護な護衛とやらが昨日、朔と一緒にいた人物だろうとあたりを付ける。

「後は朔様しか手掛かりがない以上、難しくても美夜子には頑張ってもらわなくちゃ。そのためなら私も又輔も協力するから。」

「はあ…ありがとうございます。でも、天宮様っていう手掛かりもあるんじゃないでしょうか？」

どれだけ華代と朔の姉弟の仲が良かったかは知らないが、婚約者である静にもそれとは違った絆というものがあつたに違いない。

だが、蝶子は首を横に振った。

「静様に華代様の想いが残っているということは、絶対にない。」

「え？ それって……」

思わぬことに聞き返そうとした美夜子であつたが、ちょうど又輔がアポイントが取れたと二人の会話に割って入る。

蝶子はそれ以上何も語らず、美夜子としては彼女の言葉が大きな疑惑として残った。

美夜子が朔と対面したのは、所謂共同娯楽場的な所だった。美夜子の家が丸つと入りそうな広い部屋の中にはビリヤード台などが設置されている。

遊ぶことと同時に社交場的な役割も大きいのだろう。椅子やソファも多く置かれていて、美夜子たちはその一角を勧められた。かくして写真の中で笑っていた青年と同じ顔が、机を挟んで笑っていた。

華代と雰囲気似ている色白で儂げな青年は、後ろに控える護衛の大男とは対照的でとても華奢に見えた。

その彼を前にして美夜子は蝶子が言った言葉の意味をやっと理解した。

「お姉ちゃんは大あれ？」

その言い方と大きな黒目がちな瞳で無遠慮な程に見つめてくる様子は、美夜子と同年であるという青年には余りにも不釣り合い。それは奇妙すぎる光景だった。

しかし、それを指摘するのも躊躇われて美夜子は尋ねられるままに答える。

「私は鳴無美夜子といいます。初めまして」

「うん！初めまして！！僕は桜月朔おつきまひくです！！」

機嫌良く答えた朔であるが、すぐに美夜子に興味を無くしたのか、片手に持っていた車の玩具を机に走らせ始めた。

まるで子供…というか、これでは子供そのものだ。部屋の中にも朔が遊び散らかしたであろう玩具などが散らばっており、彼が既に

この部屋で遊びつくしつつある証拠が残っている。

美夜子は混乱しながら、自分の後ろに控えている又輔と蝶子を見やった。

「だからいったでしょ？ 朔様から話を聞くのは難しいって。」

「…彼は元々…えっと、こんな感じなんですか？」

差別するつもりはないが、思わず言葉を選んでしまう美夜子。

「いいえ。それは違います。」

それをきっぱりと否定したのは、朔の後ろに立つ黒のスーツがいかにもそんな大男である。ずっと朔の相手をしてたらしく、その手には不釣り合いな愛らしいウサギのぬいぐるみが握られている。

「お初にお目にかかります。鳴無美夜子様、静様よりお話は窺っております。私は一条奏、いちじょうかなでこちらの屋敷で朔様の護衛を務めさせていただきます。ただいている者です。」

一礼をして美夜子を真正面から捕えた瞳は、睨みつけるだけでチンピラくらい追い払えそうなほど鋭い眼光を宿していて、内心ビビった美夜子であるが座りながらも小さく会釈をした。

「相つ変わらず、固いなあ。奏。」

「遙もだけど、どうして兄弟そろってそんな堅物なのかしら？」

美夜子が座るソファの背に凭れかかりながら、又輔と蝶子が奏を見やる。

「…貴方達が聊か軽すぎるのです。兄も嘆いていましたよ。」

「一条遥様の御兄弟なんですか？」

「はい。遥は私の兄でございます。」

慇懃無礼すぎる態度でそう返されて、後ろの二人の適當さにも驚いている美夜子であるが、奏の固すぎる態度よりはそっちのほうがましだと感じた。

「それより話を続けさせていただいてよろしいでしょうか？」

「あ、はい。お願いします。」

奏にそのつもりはないと思うが、慇懃無礼ながらも鋭い眼光は美夜子を十二分にビビらせ、体がカチンと固まった。

「朔様がこのように子供返りされたのは、姉君の華代様が亡くなった時と同時にです。それまでは年相応以上に聡明で穏やかな方でいらつしゃいました。」

「では、えっと……姉君？が亡くなったショックでということですか？」

奏の言葉遣いに引きずられて言葉に詰まりながら問う美夜子に、彼は首を横に振った。

「いいえ。朔様は未だに華代様が亡くなられた事実を知りません。」

「……どういう意味でしょうか？」

それは特に何があったという夜でもなかった。

広大な敷地と森に囲まれた屋敷は静かで、夕食を静と華代と朔の三人は共にして食後に紅茶を飲んだ後、それぞれ自室に戻ろうという事になったらしい。まだ、就寝するには早い時間帯であったが、次の日は街に出かけようという話があったのだ。

食堂から静と、華代・朔の部屋は逆方向にあるため、その場で挨拶をして別れた。

姉弟、二人はそれぞれ王将と奏という護衛を付けたまま、自室に戻った。

朔の部屋は華代の部屋の前を通って階段を一つ上った所にあるため、部屋の前で彼女とは別れた。王将と共に華代は笑いながら、朔におやすみと声をかけた。

奏も朔を部屋まで送り届け、その夜は何事もなく別れた。朔も華代とよく似た笑顔で彼におやすみと言った。

それは本当にありふれた日常の風景であった

全てが狂いだしたのは、次の日の朝、使用人の女の悲鳴が響いた時。

奏だけではなく、その悲鳴に白鷺邸の使用人たちは驚き駆けつけた。静かで穏やかな空気が支配する屋敷の中で、その悲鳴はあまりに異常事態としか言いようがなかった。

彼女は華代の部屋の扉の前で腰を抜かして、目を見開き震えていた。集まった使用人たちも声なく恐怖と驚きに支配された表情で立ち竦む。

「何があった!？」

主である静はまだここにはおらず、華代に何かあったことは確実に駆けつけた奏は腰を抜かした使用人に声をかけながらも、開いた扉から見えた部屋の中の光景に言葉を失った。

白鷺邸の雰囲気壊すこともない淡い色調でまとめられた部屋だったはずなのに、そこに広がっていたのは、それとは全く違う赤。赤、しかも、それは一部ではなくまるで赤いペンキで部屋全てを塗りつぶしたかのように、壁も床のカーペットも家具も全てが赤く染められていた。

それがペンキだったらどれほど良かっただろう？だが、扉から臭う鉄くさい匂いがそれが血であることを奏に教えてくれた。

「は・華代様は！？」

声が出ない奏に変わり、年長の使用人が声を上げた。奏もそれに我を取り戻して、部屋の中に人影がないかを探した。

視線を部屋の隅々に走らせるが、人影も気配も感じられない。他の使用人が部屋の中に入って探そうとしたが、奏はそれを止める。

どうみてもこれは異常な事態。それも自分たち使用人風情が勝手に判断してはいけない事項のような気がしたのだ。すぐにほかの使用人に静に報告に行かせて、奏は混乱する思考を整理させる。

「一体、何処に？この部屋は 朔様！！」

と、そこで華代の部屋に近いはずなのに、この騒ぎでもやってこない朔に気がついて奏は駆けだした。

華代に何か起こったのは間違いない。もしかしたら、弟の朔にも何かあったのではないかと思ったのだ。

階段を駆け昇り、扉をノックすることなく開けはなつ。

部屋は華代とは違いいつもと寸分変わらぬ様子であったが、部屋は静寂に包まれ、ベットの途中でこんもりと山があるだけだ。

奏は息を荒くしたまま、シーツを剥がしその中にあるものを暴く。

「う……ん、なに？」

いきなりシーツを剥がされて、目を覚ましたらしき朔はいつもと変わらない様子で眠気眼をこすりながら目を覚ました。

それに大きく息を吐き出しながら安堵する奏。だが、次の瞬間、再び彼は驚きで声も出なくなる。

「お兄ちゃんは大あれ？」

朝日の中で朔は無邪気に笑いながらそう聞いた。

要するに朔は華代が行方不明になった事実を知る前に子供返りしてしまった。奏が言った『朔は華代がいなくなつたことを知らない』発言はそこを理由とするのだろう。

以降ずっと朔は完全に子供返りしたままで、自分の名前も、年齢も、記憶も、姉のことも全ての記憶が抜け落ちていた。ちなみに外傷などではなく体はいたって健康らしい。

「華代様の失踪と同じく、朔様の記憶についても一切手がかりがつかめないままです。私たちがもつとしっかりしていれば……」

そう言つて悔しげに顔を歪ませる奏。車で遊び飽きたのかソファで丸くなつていつの間にか寝てしまつている朔を見て、そつと額にかかる髪を払つてやる。

その表情は鋭い眼光の中に、とても優しげな光が宿っている。

そんな仲睦まじいというか、献身的な主従の様子を無表情に見つめながら美夜子は今聞いた話を整理していた。

華代の異常な形での失踪、王将の殺害、血塗れ部屋、朔の子供返り……全てが同じ夜に起こつていているという事実は、偶然というにはあまりにも出来すぎているとしか言いようがない。だが、そのそれらを繋ぐ糸は何一つ見えてこない。

単純な失踪事件とはどうやら毛色が違うようだと、美夜子は確信を深め、かくしてそれはすなわち彼女の手に余りうる事件であるという確信と同義であつた。

それでも引き受けた以上は投げ出す前に最善は尽くすべきだろうと、変なところで真面目な美夜子は諦めの気持ちが強いままに奏に再び話しかける。

「あの…天宮様に私のことを聞いているんですよね？華代さんの思いが朔さんに残っていないか調べさせてもらってもいいですか？」
「ええ。勿論です。どうぞ。」

物理的距離をつめればいいというものでもないが、気分の問題で美夜子は机を迂回してソファですやすやと眠ってしまった青年に近づいた。

綺麗な人と言うのは寝顔も綺麗なんだと、一瞬見惚れて美夜子は意識を集中すべく目を瞑る。

（ え？ ）

美夜子は気配を探ろうとして、その瞬間に何かの匂いを強烈に感じた。

それは意識を集中する前には全く感じなかった類のもので、それが現実にあるものではなく恐らく美夜子だけが感じられる死者の思いの残滓のようなものであると察知する。

だけど、それはすぐに消えた…そう、まるで先ほど華代の部屋で感じた匂いと同じように。

そして、それからどんなに何かを感じ取ろうとしても全く何も掴めない。

（ どういうこと？何かあったような気がするのに、まるで私から逃げるように匂いは消えてなくなった。…逃げる？隠れている？でも… ）

誰かが故意にそれをしているというのであれば、一体誰が？そもそも死者の思いを隠すことなど出来るものなのだろうか？

美夜子は自分以外にそもそもそれ自体を感じ取れる人物に出会ったことがない。だが、自分と言う能力を持った人物がいる以上、自

分と同じような能力を持っている誰かがいるということは否定できるはずもない。

と、そこで美夜子は昨日、能力を使って体から離れた自分を見ていた静を思い出す。

（そういえば、どうして天宮様には私が見えていた？私と同じ力を彼は有している？それとも天宮家の力がそうさせている？でも、だったら、どうして態々私を利用しようとするの??）

混乱は混乱を呼び半ばパニック状態に陥りそうになり、美夜子はとりあえず自分を落ち着かせようと朔から離れてソファに再び腰掛けようとした。

「お…ねえちゃん？」

…が、美夜子が離れる気配に目を覚めたのか、朔はむにやむにやと意味のない言葉を発しながら美夜子の腕をとった。

いくら心が子供でも体は美夜子と年の変わらない大人の青年だ。美夜子が油断していたというのもあるが、いきなり腕を引かれて美夜子はバランスを大きく崩して、朔の方に倒れる。

「ふふ、あつたかあい。」

「……」

ぎゅうと遠慮のない力で抱きつぶされて美夜子はぐうつと苦しくなった。が、今は苦しさよりも突然のことに驚きの方が強い。

（ぎいあああああ！何何？私つどうしたらいいの!??）

力が強すぎて美夜子にはどうすることもできず、かといってまた

心のままに叫んだものなら大笑いされることは容易に想像がついて声は出せない。

この年になつては親兄弟でも抱きしめられる機会などある訳がなく、また、お見合いに連続24回お断りされ続けている美夜子に今まで恋人がいたことがあるはずもなく、誰かに抱きしめられるという状況はあまりに彼女にとってイレギュラーであつた。

（む…胸板が！人の体温が！って私、そんなことに感心している場合じゃない！！！）

故に先程までの事件についての悩みなど全てが吹っ飛んで本当のパニックになる美夜子。さりとてわたたと心の中だけで慌てて何もできないでいると、次の瞬間強い力で後ろに引つ張られた。

「うぎゃ」

驚きが微塵も感じられない悲鳴を上げて美夜子はその勢いのまま、どさりと後ろにひっくり返る。

「おい、大丈夫か！？」

幸いにふかふかの絨毯の上なので怪我も痛みもないが、全てが突然すぎて美夜子は声も出ない。

「奏！女に暴力をふるうなんて男としてどうな訳！？」

上から降ってくるこちらを心配する又輔の声に次いで美夜子を支えるようにして蝶子が鋭い声で、彼を非難する。

彼　　奏だ。

そうして美夜子は初めて自分が抱きつかれた朔から力づくで奏に

よって引き剥がされて、床に引き倒されたのだと理解する。

ある意味助かったと言えない訳ではないが、美夜子から抱きついた訳でもあるまいし、あんなに乱暴に引き離される覚えもない。

だが、それ以上に美夜子は目の前にいる奏に驚いていた。

- - - 強い強い負の感情が光る瞳

その感情が果たしてどういう意味合いを持つのかは定かではないが、ただ、自分をまるで仇かのように睨みつけている奏の表情に驚きと恐怖を抱いた。

その意味する所を察しようとした美夜子であるが、奏はまるで憑物が落ちたかのように次の瞬間表情が戸惑いと驚きに変わり、そして酷く慌てたように歪んだ。

その表情の変化はまるで別人に変わったかのよう。

「あ…も・申し訳ありません！」

そしてすぐに謝罪と共に直角に体を折られしまっては、その勢いに一同どう対応したらいいか迷う。

「おい？」

「咄嗟のこととはいえ、私は…駄目なんです。朔様に誰かが近づこうとするだけで強い不安を覚える。あの夜から私は…私はっ！」

華代の失踪が彼にとってのトラウマになっているらしいが、それにしても過剰反応だろうと美夜子思った。

「まあ、華代様のことがあったからねえ？」

「そう…だな」

又輔と蝶子とて美夜子と同じ思いだろうが、酷く思いつめた様子
様子の奏に彼をフオーするよう言葉に言葉をかける。美夜子も別に放
り投げられたことを怒っている訳でもないの、いいですよと声を
かけた。

重要なのはそこじゃない。

（さっき、奏さんに睨みつけられたときあの匂いがした。）

それはこれまでの曖昧な気配とは違う強いはつきりとした何か。
奏の表情と共にそれは消え去り、今は何処にも感じられないがそれ
は間違いなく奏から発せられていた。

(うーん)

与えられた部屋に戻って美夜子はひたすらに悩んでいた。

はたから見たら椅子に背筋を伸ばし座って一点を見つめ、無表情で固まっている様は不気味という他ないだろう。

美夜子はそれを自覚しているが、幸いに今は自分以外に誰もいないから思う存分に悩んでいた。

「お腹すいたよぉ!!」

その後、非常に微妙な雰囲気の中で一人だけその空気を読めない存在。体は大人、心は子供な朔が愚図りだしたためその場は解散となった。

一見すれば美少年ともいえない朔ではあるが、あまりに子供っぽい物言いは異様だと思えず、美夜子は内心ぎよつとする。

一体、彼の精神年齢は何歳くらいなのだろうと考えつつも、とりあえず助かったと美夜子だけでなく主従を見送った叉輔と蝶子も大きく息を吐きだした。

それはすなわち美夜子だけではなく、彼らも主従の様子がおかしいと思っているということであった。

そんな二人を窺っていると、蝶子が美夜子の視線に気がついて苦笑を浮かべ、座り込んだままの美夜子を引っ張り上げて立たせてくれた。

「ごめんねえ。怪我はないかしら？奏、昔から糞真面目で融通が利かない所はあったけど、朔様がああなつてからはそれにより一層磨きがかかったちゃって…正直言つて同僚の私たちも理由がなきゃ近づけない感じなのよね。」

「そうですか。まあ、仕方ないですね。それだけ奏さんは朔さんのことを大切に思っているということですよ。」

いつもどおりに感情のこもらない美夜子の声。だが、今回は美夜子に感情を発することができたとしても、多分その声色は変わらなかっただろう。

美夜子にとっては奏が朔に過保護な事よりも、感じたあの『匂い』の方が重要なのだ。表面上は蝶子と会話しながらも、美夜子の頭の中はその事で高速回転をしていた。

「大切…かあ。何かその言葉もしっくりこねえな。」

「そう？昔から朔様に対して色々過保護だったじゃない。」

「いや、それはそうなんだけどよお。それは何ていうかもっと義務的っていうか…、朔様が大切っていうよりは、自分の仕事が大事っていう感じを俺は持っていた。」

又輔と蝶子ではどうやら奏の朔に対する態度に感じるものが違つたらしい。二人の会話に奏に関するヒントがあるかもしれないと、美夜子は興味を持つ。

「だけど、今久々にあの事件以降の二人を間近に見たが、今は俺がこれまで感じてきた二人とも違う気がした。」

「それは当り前でしょ？朔様があんなになっちゃったら、違つて当たり前じゃない！！」

「だから、そういうんじゃない。奏は確かに前から朔様に過保護だ

ったさ。華代様が失踪した後だし、奏が朔様に対して過保護になるのも当たり前といつてはそうなんだろう。」

と、そこで一瞬だけ言い淀むように言葉を詰まらせてから又輔は言葉を続けた。

「だけど、前のあいっならそれはあくまで【条家】^{じょうけ}の枠内だ。奏は良くも悪くも【条家】としての自分に強い誇りを持っていた。それは朔様に対しても同じ。あいっにとって朔様はあくまで【条家】として守るべき対象でしかなかったはずだ。だけど、今のあいっからはそれ以上の感情で朔様に接しているように感じた。でなきゃ、いくら初対面の相手とはいえ、こいつは静様の客だぞ？朔様を守るために、桜月家以上に従うべき天宮家にこんな形でも【条家】が逆らうのか？」

「あの」

深刻そうに会話を続ける二人の話の腰を折るように、美夜子がぽつりと言葉をはさむ。

「何だよ？」

「『ジョウケ』とは何ですか？」

延々と続く又輔の言葉に、やっと美夜子は問うことができた。何度か続くこの単語の意味が分からなくては、又輔の言っている意味が全く分からないのだ。

「ああ?!……まあ、一般市民はしらねえか。」

面倒そうに唸った又輔の声は突如としてでかくなる。びくつきな

が美夜子はコクコクと頭を縦に振った。

「【条家】っていうのは、簡単に言っちゃえば天宮家と桜月家の為だけの使用人の家系だな。俺や蝶子、遙も奏もそうさ。皆、苗字に【条】がつくだろう？一条家を頭に十条家まである。条家は貴族とは違うが天宮家と桜月家にしか仕えることはなく、他の貴族たちに対しても立場的な上な場合もあるんだ。」

そう言われてみれば静や朔以外で名前を知っているこの屋敷の人は皆、【条】が付くことに美夜子は初めて気がついた。
なるほどそんな存在がいたのかと理解する。

「天宮家と桜月家に仕える使用人は全てが条家の人間で、この屋敷もメイドから庭師、執事に料理人に至るまで全てが条家の人間なですよ。条家にも色々種類があって、一条家が条家の筆頭で遥みたいに天宮家の方々のお傍にあることができたり、私の七条家は主に隠密行動や諜報活動をする家系であったりするの。」

又輔の大雑把な説明を補足する蝶子の言葉に更に美夜子はほうと感心する。

「そうだったんですか。勉強になりました……で、話を元に戻していただくと、奏さんは以前はその条家としての枠内でしか朔様に接していなかったのに、今は違うということでしたか？具体的には何が違うんですか？」

「へ？」

勢い勇んでズイッと又輔に詰め寄ると、美夜子の不気味さに気圧されて彼は後退しながら顔をひきつらせた。

「いや…何ってわけじゃないんだけどよ。なあ？」

又輔とて何か明確な理由や事象があつた訳ではなく、感覚的に何気なく言つた感想だつたのだろう。それを追求されて困つたように蝶子に言葉を投げかける。

「なあつて言われても、私は別にあなたが言うようなところは感じていないもの。そもそも私はこの屋敷で仕事するのは初めてだし、事件前の朔様と奏にもほとんど接したことはなかったから。」

蝶子にそう言われて又輔は更に困つたように太い眉毛をハの字にする。その大の男の情けない顔を見て蝶子は深いため息をついて、仕方ないというように又輔に詰め寄る美夜子に言葉をかける。

「どうして、急にそんな事を知りたがるの？今で何か感じるところがあつた訳？」

「私、朔さんと奏さんにお会いして、華代さんの思いは見つけられませんでした。ですが、二人から同じ『匂い』を感じました。それが華代さんの失踪の手がかりになると断言はできません。だけど、何か気になるんです。」

『匂い？』

美夜子の言葉に訝しげな又輔と蝶子。

そう。あの『匂い』は間違いなく何かの名残だ。それは又輔と蝶子には感じられない死者の思い…かもしれない。何の匂いなのかもそれが指し示す意味も、その先にあるものも分からない。

それでもあの血塗れの部屋と二人を結ぶ数少ない手がかり。

だから、何でもいいから匂いの手がかりになることなら知りたかつた。結局、又輔はうーとかあーとか意味のない言葉を繰り返して

はつきりしなくてそれ以上の情報は得られずに、本日の調査は終了して私は部屋に戻された。

全てがあやふやで美夜子は何一つ断言できない自分が不甲斐ないと強烈に感じ、こうして悶々と悩み続けているのだが、彼女はこの時気が付いていなかった。

昨日は厄介事ではなかった事件の調査に、自身が思いの他のめり込んでいるという事実には……

……そして、その理由に……

コツン

どれくらい考え込んでいたかは定かではないが、静かな部屋に乾いた音が響いた事に気がついて美夜子が部屋を見まわした時、室内は赤と黒の境目に沈んでいた。

太陽が今にも沈もうとする時刻、昼と夜の狭間は、電気についていない室内に窓から長い影を作り、神秘的なような不気味なような独特な雰囲気醸し出していた。

コツン

再び響いた音に美夜子は首をかしげる。

音の発信源はどこだろうと、きよろきよろとあたりを見回すと、今度は何回か音が連続した。

そうして、美夜子はそれが窓に何かが当たる音だと気が付く。ちなみに美夜子が与えられた部屋は二階である。一体、何が当たっているのだらうと、椅子から立ち上がって窓際に立った。

窓からは屋敷を取り囲む森と、整えられた庭園が見え、全てが夕闇に沈もうとしている様子は物悲しさすら漂わせている。

西日に一瞬だけ目をしかめて、美夜子は庭からこちらを見上げる人影を見つける。

「？」

その人影は黒いマントのようなものを被り誰とも判別できなかったが、美夜子がそれを見つけると身をひるがえし走り出した。

「ちょっと待つて。」

何が何だか分からないがとりあえず止めなくてはと咄嗟に考え、美夜子は声を発して窓を開けた。しかし、人影は止まらない。更に瞬間に感じたあの『匂い』。美夜子は部屋を飛び出した。

蝶子からは単独で部屋を出ることを禁止されていたが、今は彼女にお伺いをたてる暇はない。行儀悪いとは分かっているけど、美夜子はドタンバタンと大きな足音を立て、廊下を全力で走り、階段を全力で駆け降りる。

迷いそうになる屋敷ではあったが、幸い部屋から庭に通じる道順は蝶子によって教えてもらっていたため迷うことなく美夜子は庭に出ることが出来た。

室内から飛び出した途端にムワツと不快な暑さが美夜子を包む。日常的に運動することのない体は少し走っただけで息が上がり、夏の暑さにジワリと汗が噴き出るのも感じた。

沈みそうであった夕日は完全に沈み、夜の闇が庭園に横たわる。しかし、夜になると自動的に電気が付く仕組みになっているのだろう。

庭には幻想的な明かりが灯され、夜でも鑑賞に耐えうる美しさを湛えていたが、美夜子が忙しく見回して探すのはマントを被った人影だけで、庭の美しさは目にとまらない。

（人影はない…だけど、匂いの方はばっちり残っているわね！これなら追える！！！！）

意識を集中させずとも窓を開けた時に感じられた匂いが残っている。それは華代の部屋で感じ、朔や奏から感じたものとよく似ていた。美夜子の中では同じだと確信すらある。

それがあの人影から発せられているかも分からないが、迷うこと

なく美夜子は匂いを追うことを即決していた。

現実の匂いであれば普通の人間並みの嗅覚しかない彼女に、匂いを辿ることなど絶対に不可能だっただろう。だが、これは美夜子にしか感じられない類のものだ。意識を集中させればその匂いの元を追うことは造作なかった。

ただ、どんなに意識を集中させても彼女の足元に闇は現れない。それは生と死の狭間が開かないことを意味していた。

（これって何かの花の匂い？）

これまではほとんど一瞬しか嗅げなかった匂いであるが、走りながらどんどん濃くなっていく匂いに美夜子はそれが甘い花のようなものであることを知った。

花に詳しい知識がないので何の匂いかと言われるとさっぱりであるが、何となくそう感じた。

匂いを追って疾走する美夜子は、気が付くと庭を縦断して森へと突入する。

明かりがあり開けた庭とは違って、うつそうと高い木々が生え茂る森は人の手が入っている様子もなく足を一歩踏み入れた瞬間に、驚くほど暗くなった。

「……」

その暗さはとてもじゃないが、明りの一つもなく森を当てもなく探そうものなら、あっという間に遭難してしまうこと間違いなし。

一瞬だけ迷ったが、美夜子は苛つきながら明りを取りに行くべく取って返す。何しろ匂いは消える様子もなくむせかえるほどに強くなっていたが、いつ消えるとも分らないのだ。明りを取りに行っている間に、この匂いが消えてしまったらと思うと焦らずにはいられない。

しかし、屋敷の方へ再び駆けだそうとした美夜子の前に立ちふさがる人影が森の木々から現れた。

それは間違いなく先ほどの黒マントを被った人影で、心臓が止まるくらい驚いた美夜子であつたが、出た声は相変わらずの平坦なま。

「貴方は誰？」

何も考えないまま追つてきた事を今更に後悔する美夜子。対峙した黒マントを被る人物に身ががすくみそうになるほど恐怖を感じ、同時に匂いが一層に強くなったのを感じた。

甘く良い匂いだと言つても強すぎる匂いは不快で、頭が痛くなつて美夜子は思わず鼻を手でふさぐ。

だが、それは決して現実の匂いではないからなのか、鼻を塞いだところで全く改善には至らなかった。

『貴様は邪魔だ。』

「え？」

マントを深くかぶつた人影の顔は全く見えない。

身長は美夜子よりも少し高いくらいのようなのだが、発せられた声の低さからそれが男であることが分かった。

だが、その声は男だからという理由だけでは片づけられないほど低く、まるでボイスチェンジャーでも使っているかのように奇妙な声。

男は突然のことに戸惑う美夜子に構うことなく断じると、ぱつと両腕を真横に上げた。被っていたマントが大きく開き、広がった黒マントから何かが飛び出して、美夜子めがけて勢いよくぶつかってくる。

「げほっ」

体中にぶつかってきた何か、特に腹部にめり込むようにぶつかってきた何かに美夜子は息が詰まり、ぶつかられた勢いのまま地面に倒れた。

息が一瞬詰まったため生理的に咳が止まらずむせ込む美夜子。

突発的に単独行動に出てしまったが、ここにきて自分の命が危ないことをようやく理解した。

（ともかく逃げなきゃ！！）

屋敷は目の鼻の先なのだ。美夜子は起き上がって、黒マントを交して駆けだそうとしたが、そこで新たな驚きに見舞われる。

（マントがない！！）

代わりに目の前にいたのは、ばさばさと羽音を響かせて美夜子を取り囲んでいる何やら蝙蝠っぽい生き物。

その大きさは美夜子が両手を広げた程はありそうで、はためく翼は何とも気持ち悪い言葉にできない色で光っていた。

大きく不気味な蝙蝠もどきに囲まれて、一人森の中に取り残された美夜子。

真つ暗な闇に浮かびあがる赤い斑の光。蝙蝠もどきが羽ばたくたびに、その光を湛える羽から同じく赤い粉が発光しながら舞い散る。毒々しいその景色に美夜子はごくりと喉を鳴らした。

（……私、どうして？）

今更だと罵られてもいい。後悔先に立たずとはよく言ったもので、美夜子は自分の無謀さというか、無計画さを嘆いた。

これでは一人おびき出されたようなもの。それもあんな妖しさ満点の黒マントを一人で追いかけるなんて…愚かとしか言いようがない。少し考えれば何かの罠だとすぐにわかる。

その自分の無謀さを、無計画さを、愚かさを言い訳しようとは思わない。言い訳する相手もない。それでも…と美夜子は困惑する。

（あの匂いに私は狂わされた？）

と、そこまで思考を続けた時間は一瞬だったろうが、身動ぎしたために小枝を割った音が響いて美夜子は我に返った。

現実に戻った美夜子は、自分が大量の冷や汗をかき、心音が異常に速くなっていることに気がつく。

（現実逃避してちゃ駄目！ともかく、私！何でもいいから考える！考えるんだ！！）

固まっていた所で誰かが助けに来てくれるとは思えない。この状

況は自分のせいなのだから、自分で何とかしなくてはならない。

とはいうものの、こんな得体の知らない蝙蝠もどきを前に立ち向かう勇気をふりしばれない美夜子は、ともかく逃げようと決意する。

そろーり

そんな効果音を心の中だけで唱えつつ、倒れこんだまま逃げようと……した瞬間に蝙蝠もどきが目にもとまらぬ速さで美夜子の横を通り過ぎた。

「痛い。」

やる気のない声とは裏腹に頬をよぎった強い痛みに手を滑らせれば、ぬるりと赤い血がべつとりと付いた。

ばさばさと飛び続け、まるで美夜子を監視するかのような様子の蝙蝠もどきは、どうやら美夜子が逃げることを是としならしい。

かといって次々に襲いかかれるかと身構えるがそういう訳でもないらしい…

(こいつら何がしたいのよ?)

もはや完全なる暗闇に沈んだ森の中には、不気味な蝙蝠もどきが発する光とばさばさと断続的に続く羽音だけだ。

とりたててホラーとかサスペンスものが好きではない美夜子は、自分が血を流しているという事実と、恐怖に血の気が引くのを感じた。だけど、このまま気を失うことなど後が怖くて絶対に嫌だ。

美夜子は気を引き締めると、ともかく何か蝙蝠もどきに対抗する手段を必死で考える。すると、ふと暗闇で分からなかったが振り回すにちょうどよさそうな、ちょっとしつかりした木の枝らしきものが手に触れる。

とにもかくにも、このままこんな怖い森の中で蝙蝠もどきに監視されたまま座り込んでいるのなんて勘弁である。美夜子は枝を握り締めると立ち上がって蝙蝠もどきに向かって振り回した。

「うわああああ」

掛け声は気が抜けるくらいやる気がないが、本人はそんなことを気にする余裕もない。だが、蝙蝠もどきにぶつかっただろう枝は呆気なくくらいポキリと折れた。

「ゲ……」

瞬間に蝙蝠もどきの放つ赤い光が濃くなり、凶悪に変わった気がした。枝が折れたことに一瞬だけ茫然として、美夜子はもうどうにでもなれと全力疾走で走り出す。

その後を追う気配が羽音が追ってくることで分かった。同時に鳴声なのか何なのか分からないが、非常に高い耳に響く音が暗い森に反響する。

更に蝙蝠もどきたちは次々美夜子に体当たりしてきて、何度も倒れそうになるが、火事場の馬鹿力というものが美夜子は踏ん張って全力疾走のまま森を抜けて屋敷の庭に転がりこんだ。

だが、光があるうが、屋敷の庭だろうが蝙蝠もどきには関係ないのか、庭に倒れ込んだ美夜子に容赦なく襲いかかってくる。

腕に足に背中に痛みがはしる。だけど、今はそれに構っている場合じゃない。

庭がだめなら屋敷の中に逃げ込むまでだと美夜子は起き上がって再び駆けだそうとした。が、ぐらりとまた地面に倒れる。

「?!」

何事だと足元を見ると、履いていたヒールの踵が折れかかっている。踏ん張りが利かないのだ。

いっそ折れていてくれれば良かっただろうが、不安定な形で取れかかっているヒールは美夜子を立たせてもくれない。

かといってヒールを脱ごうにも、ストラップが足首に巻きついているタイプだった。ストラップを外そうとするが、焦っているから手元が震えて全然外れない。

「もう」

平坦に悪態をついて、美夜子は靴を放って倒れ込んだままでも体を引きずって逃げようとした。が、はっと顔を上げた先に何匹かの蝙蝠もどきが美夜子めがけて物凄い勢いで飛んできているのが目に入る。

とてもではないが逃げられるとは思えない。美夜子は顔と頭を両腕で隠して目をぎゅっとつむった。

「……」

すぐにでも来ると思われた痛みと衝撃。だが、それは一向にこない。

「?????」

不思議に思いながらも腕をどかし、目を恐る恐る開けた美夜子。かくしてそこには襲いかかる蝙蝠もどきの群れは影も形もない。

「え?……えええええ?」

あたりを見回しても蝙蝠もどきも何もなく、美夜子はたった一人

で庭にいた。全く何が何だか分からなくて、一瞬自分の頭がおかしくなったのか、はたまた幻でも見たのかと思った。

だが、はっとして見つめた掌には頬から流れた血が付いたままで、先ほど蝙蝠もどきに襲われたことが現実であったことを示している。

「一体何だったの？」

放心状態でぼつりと口からついた声。さりとて、それは相も変わらず大根役者の如き感情のない呟きであった。

『一体何だったの？』

庭に座り込む感情のない娘の顔を画面越しに見ながら、彼は嫌な笑みを浮かべる。

「あはは。呪い人形殿は危ない目にあっても何一つ変わらないなあ。演技かとも思ってたけど、あれは本物だ。」

暗い室内にはいくつもテレビ画面らしきものがあり、その画面には屋敷内の様々な場所が映されており、様子が具に分かるようになっていた。

その部屋で美夜子が映る画面を見て麗しく笑うのは、屋敷の主。暗い室内で画面から発せられる冷たい光が彼の表情を美しくも鋭利に照らす。

「静。あれが貴方が今日言っていた女ね？」

「そうだよ。芙由^{ゆふ}。」

静の首に赤いマニキュアを塗った手が回され、女が彼を後ろから抱きしめた。

長い黒髪は緩く結いあげられ、白い肌は陶器のように滑らか、大きな目は化粧によってより濃く大きく見せられ、口元は真っ赤なルージュで妖しく光る。絵に描いたような典型的な色っぽい女性。

更にその色つぼさを増長させるのが、胸の大きく開いたキャミソールとミニスカートの上に羽織った白衣。

芙由と呼ばれたその女は美夜子のことを口にしながら、静の美しい顔をうっとりと舐めるように見つめながら、その耳元に吐息を吹

きかけるように語りかける。

首にまわされた手は静の着ているスーツの中に差しこまれて、妖しい動きを見せる。静は取り立ててそれに動じることなく、ただ画面の中の美夜子だけを見つめている。

「彼女はどうかい？」

「静」

甘えるような声と纏わりつく指。

「芙由」

それを静はただ一言、彼女の名を呼ぶだけで制止した。その声には静かだが凜とした拒絶の色があった。

それを感じ取ってか芙由は静から離れると、モニターに繋がる力ーソルを操作して美夜子のことをずっと録画していたらしく、映像を巻き戻す。もう一度彼女が屋敷を飛び出した場面から再生を始めると同時に、キーを素早く叩いて他の画面に様々なデータなどを表示させる。

それを何度か繰り返し、彼女は静を振り返った。

「確かに貴方が言うように【タマヨミ】ではあるようね。計器は確かに【マシユ】の存在を示しているし、私には見えないけど、静には見えているんでしょう？」

「ああ。蝙蝠みたいな奴が数匹……だけど、美夜子にはもっと違うものも見えている。」

画面の中の美夜子が森の中に入り、無表情のまま口を開く。彼女を追い続ける画面はまるで、彼女主演のドラマのように絶妙なアングルで続く。

それは監視カメラで撮ったというには、あまりに不自然な映像である。

『貴方は誰？』

画面は真つ暗な森の中だがはつきりと美夜子『だけ』を映している。そこには彼女と対峙していたはずの黒マントの人物は映っていない。

しかし、平坦な声だがその言葉から、美夜子が誰かと対峙していることが分かる。

「まさか【ヨルヒト】だともいうの？」

画面の中の美夜子を見つめ続ける静にイライラしているのか、はたまた美夜子何かを見えていることに困惑しているのか、芙由は綺麗に整えられた眉毛を釣り上げた。

静はその問いには答えない。彼は繰り返される映像から目を離さない。

蝙蝠から逃げ、倒される美夜子。蝙蝠が消えて呆然としている美夜子。（実際には美夜子が一人で逃げたり、倒れたりしている不思議な映像でしかない）

どれも無表情な彼女を見て、何故だかふと微笑む静。

「ありえないわ。」

返ってこない返事を肯定だと確信して、芙由は彼女自身が発した疑問を一刀両断した。

「【ヨルヒト】は【オウラン】の末裔の一部だけに現れる異能。その末裔はこの国には桜月家しかない。彼女の素性は散々調べたん

でしょ？彼女が桜月家の血統である可能性は、他の末裔の人間である可能性は、ほとんどないと言っていたのは貴方よ？」

「そう。その通り…なんだよね。」

録画ではなくライブ中継の方の美夜子は、やっと自分を取り戻したらしく再び立ち上がろうとする。しかし、ヒールが折れているのか忘れていたらしく、バランスを大きく崩してすっ転びそうになつたが何とか態勢を整える。

それを見ながら静は何かを考え込むように、右手で顎を触る。

「桜月家の当主の好色を考えれば、隠し子の一人や二人いてもおかしくはない。だが、もしその相手に女子が産まれていれば、あの男が引き取らない訳がない。他の末裔である可能性もほとんどない。何しろ美夜子を見るからに月影の国の人間だしな。」

「それが分かっているなら。」

「可能性はほとんどないと言ったが、ゼロとは言っていない。」

二人が言いあっている所で、かちやりと扉が開く気配がした。開いた扉の先には何もない。だが、トタトタと何かの足音が二人に近づく。

「そもそも、彼女が【ヨルヒト】でなければ説明できない部分がありに大きい。芙由、貴女は説明できるのかい？【ヨルヒト】でない彼女が【ハテノシジマ】に行くことが出来た理由を？」

「それは」

「美夜子は王将の事を言いあてた。更に俺たちが知れなかった事実も…すなわちそれは彼女が【ハテノシジマ】で王将と会ったことを意味する。」

入ってきた気配に二人は気が付いているのかいないのかは不明だ

が、それを一切無視して言葉の応酬は続く。

気配もまた二人が言いあっていようが関係ないようで、意に閑さず静の足元に堂々と腰を下ろした。そうして、やっと姿なきその気配に気がついて静は口の中だけで何かを呟いた。

すると足元に気配だけだった存在が、子犬のような真白の動物らしきものに变化した。

「【シュグル】？」

「美夜子には僕の【シュグル】を何体かつけている。美夜子を監視する意味でも…ね。」

「なるほどこの映像は【シュグル】からのものなのね。」

美夜子の映像は監視カメラではなく、この目に映らない生物が撮っているものらしい。それは美夜子に張り付いているようだが、美夜子はその存在の気配すら気が付いていない。

【シュグル】と呼ばれた生物を膝に抱きあげると静は、その喉元を撫でてやる。犬のような姿をしているが、ゴロゴロと喉を鳴らし静にじゃれつく姿はまるで猫の様だ。

その体を覆う毛は柔らかくふわふわで、尻尾は体の倍以上あってゆらゆら揺れる。耳は短く、その間には大きな一本の角があり、その愛らしい容姿とは裏腹に鋭い。

「あの女を【マシユ】から守ったのも、この【シュグル】という訳？【シュグル】に守られる【ヨルヒト】なんて聞いたことないわ。」

蔑むような言葉に静は特段咎めるようなこともなく、にこやかに彼女を振り返る。

「そつだな。確かに美夜子は何もかもが規格外で、正直僕も彼女の何を信じていいか分からない。だから、貴女にお願いしたいんだ。」

ねだるような甘い声。視線。芙由はそれに心が揺らぐを感じる。

（末恐ろしい男に育ったものね）

静はその表情を崩さないまま、【シュグル】の口元に手をやり、再び小さく言葉を発する。するとそこに今までは存在すらなかった、蝙蝠らしき生物が現れた。

恐らく【シュグル】がずっと啜っていたのだろうが、その大きさは【シュグル】よりも大きい。しかし、それは既に絶命しているようにピクリとも動かない。

「さつき美夜子の頬を傷つけた【マシユ】だよ。ここにはありがたいことに彼女の血液が付着している。貴女の手が必要なんだ。美夜子が一体何者なのか調べてくれないか？」

口元にうつすら笑みを浮かべる静は、何ともいえない色気を湛え、芙由は思わずごくりと唾を飲み込んだ。

「…分かったわ。」

しかし、自分の動揺を知られないように努めて淡々と返事をする。

「だけど、とりあえずその【マシユ】は置いておいてくれる？そんな気持ちの悪いもの、素手で触りたくないわ。」

「ええ？そう？別に死んでるし害はないよ？」

「ともかく、【マシユ】を保管するケースをとってくるわ。」

からりとまるで子供のように無邪気な笑顔に変わる静。

芙由はそんな静に背を向けて、心の中だけでほっと息を吐く。…

それが無意識であることに気がついて苦々しい思いを抱く。

（何？私、この子を恐れているの？？私の大事な【作品】であるこの子を？）

そんなことありはしないと、彼女は暗い部屋を出て一人になったところで首を横に振った。

3 - 4 (後書き)

意味不明な単語が多くて申し訳ありません。追々、説明しますので、何となく雰囲気だけお楽しみ下さい。

4 - 1 (前書き)

少しでもホラー風味かもしれません。

倒れたり、こけたりでボロボロになった上に、顔に傷までこさえて屋敷に戻った美夜子とは合わせて蝶子が目を見開いた。

「美夜子！あんたっ何したの！？」

「…まあ、ちよつと。蝶子さんこそ、どうしたんですか？」

二人が出くわしたのは屋敷から庭に出る扉の所で、庭に行く以外では通ることもない場所だ。

疑問を疑問で返して蝶子の気をそらすつもりだったが、美夜子の傷だらけの様子が目の前にある以上はそれには引っかけたはくれなかった。

「私は夕食を持っていったら、あんたが部屋にいないもんだから探してたのよ！！見つけたと思ったら、ただでさえ残念なのに！可哀そうなくらいボロボロになって！本当に…何したの！！」

まるで、悪戯をした子供を叱りつける母親の様である。心配してくれているのだろうが、如何せん怒る言葉が鋭すぎてその心遣いに感動するより、傷つく美夜子。

「ともかく部屋に戻るわよ！！そんな恰好で年頃の娘が出歩かないの！！」

「すいません。」

「謝るより先に動く！！」

蝶子に急きたてられる美夜子。その手にはヒールの折れた靴が握られていた。（結局、歩きにくいため脱いだらしい）

その手が小刻みに震えていることに気がついて美夜子は自分を叱咤する。

蝙蝠もどきに追われた時はただ逃げることに必死だった。それが消えた直後は、茫然とするしかなかった。

けれど、ちよつと冷静さが取り戻され、先程の事が何度も何度も頭の中でフィードバックされるにつれ、むくむくと膨れ上がる恐怖。何かに追われたことなんて、せいぜい子供の頃の鬼ごっこくらいで今まで一度だってなかった。それも命の危険すら伴った追いかけっこなど普通は経験するはずもない。

そんな美夜子に先ほどの出来事はあまりに衝撃的であるという他なく、美夜子は冷静になれと必死で自分に言い聞かせながらも、振り切れない恐怖に震えるしかなかった。

その後、部屋に戻って蝶子に怒鳴られながらも、とりあえず風呂に押し込められ、服を着替えて蝶子によって傷の当てがされた。

蝶子は心配してくれているのだろうが、美夜子からしたら貶されているとしか思えない言葉を聞き流しつつ、美夜子は自分の身に起こったことを説明した。

正直、美夜子としても夢か現か定かではないので自信なく、蝶子には馬鹿にされるか、呆れられるかされるだろうと思いつつも、結局は美夜子なので常通り淡々とした口調は変わらない。

妖しげなマント姿の人間を追っていった所まではいいとして、その後、この世のものとも思えない蝙蝠もどきの登場である。せめて、その現物でもあったら良かっただろうが、それすらない。

しかし、恐れていた蝶子の嘲笑も嘆息も美夜子には聞こえてこず。かわりに彼女は酷く深刻そうな表情で何かを考えていた。

「蝶子さん？」

似合わないメイド服でシリアスモードに一人で突入する彼女に美

夜子は戸惑いを隠せない。

蝶子はそれを崩すことなく、美夜子に今夜は部屋の前に見張りを立てておくから部屋から一步も出るなと言い置いて退出した。

「えつと……何？」

何もかもに置いてきぼりにされた気分ではあるが、部屋から出るなど言われた以上、後はもう寝るしかないとさっさと寝るかど気持を切り替える美夜子。

恐怖がなくなった訳ではないが、蝶子が手配してくれた見張りの男が二人、どうやら部屋の前で寝ずの番をしてくれることがとりあえず美夜子に安心を与えてくれた。

蝶子が妙にすんなり美夜子の話を信じてくれたことに疑問は感じたが、悩んでも仕方ないと美夜子はその日、早々に休んだ。色々なことに疲労していた彼女に眠りはすぐに訪れたのであった。

静けさも極限に達すると耳が痛いほどに鋭くなる。

ぼんやりと何もない空間に立ち尽くしていた美夜子は、その痛み急速に意識が浮上する感覚を覚えた。

「……は？」

さっきベットに入って寝たはずの自分が、何もない空間……それも見渡す限りの闇に放り投げられているという事実混乱した後、この闇が慣れ親しんだ場所であることに気が付く。

美夜子曰く、【生と死の狭間】その場所である

一瞬、夢かとも思ったが夢にしては感覚が妙にリアルだ。今までこんな風にこの場所に訪れたことはなかったが、来てしまったものは仕方ない。美夜子はきよきよとあたりを見回した。

蝙蝠もどきに襲われた後で何かここに来たことに意味があるのかと思ったが、鉄格子も死者の気配も感じない。さて、どうしたものかと首を傾げた瞬間だった。

ふと薫るあの匂い。だが、それに気が付くより先に強く足を掴まれた。

「!?!」

何が起こったかと考える前に、美夜子のものではない絶叫が静寂を切り裂いた。

美夜子は物凄い強い力で引き倒されると、足を掴まれたまま引きずられる。無防備なまま仰向けに引き倒され、頭や背中を打ちつけた瞬間に息が一瞬止まって、目の前に火花が散った。

けれど、意識はしっかりしており驚きと混乱の中で、倒された痛みを感じるより先に自分の足を掴む何かを探した。

「!!!!!!」

そして絶句する。

それが何か分かると同時に足をばたつかせ、腕を伸ばして自分を引きずり込もうとする力にあらがう。

「は・離して。やめて。」

平坦な声から現在の状況を伝える絶体絶命の様子は何一つ伝わっ

てこない。

だが、ずるずると美夜子を引きずろうとするその禍々しき存在は、確かに人の形をしていたが、それは既に美夜子が以前出会った面影はなかった。

美夜子の足を掴んでいる人物は体は上半身だけ確認できる状態で、下半身は暗闇に溶けているように美夜子からは確認できない。一見すると腹這いのような状態で美夜子の足を掴んでいた。

全身に血を滴らせた真つ赤な顔で、ぎよろりと見開いた眼が【眼鏡】ごしに瞬きすることなく美夜子を睨みつける。

その姿に面影はなくとも、眼鏡には見覚えがあった。

「八条…さん」

間違いない。それは昨日、静に調べるように言われた八条王将の眼鏡。

そして、美夜子が生と死の狭間で鉄格子越しに渡した眼鏡。発狂した王将が投げ捨てたはずのそれが、再び彼の元に戻っていた。

しかし、あの時は眼鏡によって正氣に戻った彼であったが、眼鏡をしていても今の王将にはどう見ても理性の欠片すら存在しない。

（何が起こっているの！？）

昨日、生と死を別つ鉄格子から出て美夜子の腕をつかんだ王将。

それすらも美夜子にとっては驚くべき出来事であったが、今この場所には鉄格子すら存在しない。

鉄格子がない意味

それは王将が死から生に足を踏み入れたということなのか？それとも、美夜子が死の世界に引きずり込まれたという意味なのか？

「やめて…はなして。」

美夜子がどれほど訴えても王将は何も聞こえていないように、ただただ叫びながら彼女を自分の半分が沈んでいる闇に引きずり込む。足を掴む手の力は尋常ではないほど強かったが、我武者羅に逃げることしか頭がない美夜子は痛みも感じない。

だが、どんなに美夜子が逃げようとしても、足から王将の手が離れることはなく、美夜子はずるずると自分が闇に引きずり込まれていった。

4 - 1 (後書き)

美夜子の受難が続いております。というか、今後もまだまだ彼女の受難は続きます(笑)

「はなせ。はなせ。はな―せ。」

往生際の悪さには自信がある美夜子。容赦ない力は確実に美夜子を闇へと引きずっているが、ばたばたと足を動かし身をよじる。

王将は既に完全に闇へと沈み、美夜子の体も足のほとんどが闇に囚われている。闇に浸かった足から背筋へと冷たさが伝わってきて、美夜子は恐怖に襲われながら暴れ回る。

（やばい！！これ、ほんつとつにやばい！！）

心は既に言葉ではなく絶叫しか浮かばない。混乱した頭は美夜子から冷静な思考も奪っていた。そして、無情にも冷たさは足から腰、背中、首にまで徐々に上がってくる。それはすなわち美夜子の体が首まで闇に引きずり込まれている事を意味している。

「くそ―」

そうして『これまでか』と、絶望した瞬間だった。くすくすと誰かの笑い声が聞こえ、体を覆い尽くそうとしていた冷たさが消えた。

「こんな気の抜けた悪態は初めて聞いたな。」

「????」

上の方から聞こえてくる声に、初めて王将も闇も消え一人で倒れこんでいることに美夜子は気がつく。倒れ込んだ姿勢のまま視線を上げると、妙な格好の男がこちらを覗き込んで笑っていた。

男は『白』かった。

着ている服は白い布を複雑な巻き方で体に巻きつけているような形。この時の美夜子に余裕があったならば、それがただの白い布ではなくその細部には美しい刺繍が目立たないように縫い付けられ、その裾には繊細なレースがあしらわれている上等なものであったことが分かったであろう。

纏っている服だけではない。短い髪も長い睫毛も肌も白く、瞳は薄い青い色をしている。服装や華奢な体や顔の造形は一見するとても中性的にも感じられるが、

（キョーレツな男）

何故だか美夜子是一目で彼を男と断じる。それは無意識であつた。その無意識に気がつくことがなく、美夜子は無遠慮に覗きこまれて目を細め、警戒心むき出しでたじろぐ。

彼が纏っているのは淡い色彩にも関わらず、この完全なる闇の中では自ら光り輝かんばかりに眩しく、また彼自体が放つ独特の雰囲気、美夜子に強い印象を与えていた。

「大丈夫かい？危ないところだったね。」

からりと笑う男は全体的に女性的な雰囲気纏っているように見えて、何となく男っぽく。それでいて妙な婀娜っぽさを感じさせる。ちぐはぐというか、腑に落ちないというか、どうにも彼を表現する言葉を欠いて美夜子は戸惑いを覚える。

「もう少しで<シジマ>の最下層まで引きずり込まれる所だったよ……いや」
「え？」

そして、手を差し出す男が途中で言いかけたところで、彼に助け

てもらって立ち上がった美夜子は、自分の足に冷たく重い感触があるのに気が付く。それは先程まではなかったはずの足首にしっかりと填った足枷であった。

「……」

突然の事に言葉を失う。

右足を動かすとジャラリと音を鳴らす足枷は見た目通り重い。鎖が延々と続いていて、それは闇の中に消えて繋がっている場所すら分らない。

この空間で常識が通用しない事は了解していたが、この足枷が意味するものは分からないし、こんなものを填められていい気分がする人間は少ないだろう。

途方に暮れていると、男が美夜子に苦笑する。

「君は何も知らないんだね。それは<ヴェルデスタ・アヴァル>というんだ。<シジマ>の最下層に繋がっているから、あのまま闇に引きずり込まれても君が、<ヨルヒト>であるのであれば無事に最下層に辿りつけただろうね。」

「ヴェル…？シジマ？？」

言葉の意味がさっぱり理解できないため、男は説明してくれているようだが、何一つ説明になっていない。美夜子は眉をひそめる。

男もそんな美夜子を察したのか、少し首を傾げると質問をした。

「君は月影の国の人かな？」

「はい。」

「<ヴェルデスタ・アヴァル>は君の国の言葉で言えば<呪いの鎖>って感じかな？<シジマ>というのは元々君の国の言葉だけど、古いから分からないんだな。<静寂>という意味がある言葉だよ。」

「の…呪いの鎖?？」

どうしてそんなものがいきなり自分についているんだ?と驚いて、美夜子は足についたそれを外そうとするが、外す場所どころかつなぎ目すらない。

「残念だけど、それは今の君じゃ絶対に外れないね。」

「貴方なら外すことが出来ますか?……というか、貴方はどなたですか?」

今更だと思つたが、美夜子は改めて聞く。

男への警戒は解けないが、とりあえず今美夜子をどうしようという気配は男から感じられない。

「俺?俺の名前はトーイ。」

「他の国の人ですか?」

月影の国では聞くことのない名前に、彼が外人であると分かった。月影の国の人間は美夜子と同じように、黒髪に黒い瞳、それに白い肌が一般的なのに対して、トーイは髪も肌も白く、瞳の色も見たことがない青色だ。顔の造形も彫が深く、なるほど外人であることは一目瞭然だと言わざるを得ない。

月影の国は外人を排除している訳ではないが、その気風が強く、美夜子も情報として聞いたことがあるが、その存在を見たことはなかった。なので、なるほど、外人というのはこんな感じなのかと妙な納得をする。

「まあ、そんな感じかな?ちなみにその足枷は俺にも外すことはできないな。それが出来るのは<オウラン>に触れることが出来た<ヨルヒト>だけ。しかも、その鎖はかなり強い力で君についている

からね。相当の実力者じゃないとそれを外すのは無理だろう。」
「全然意味が分からないんですけど。」

どうやら色々説明してくれているようだけど、言葉の意味が一分からなくて美夜子にはさっぱりだ。それを分かっているふりをしても仕方がないので、美夜子はそう告げるとトイは首をかしげた。
「君、本当に物を知らない子だね。ここにいるってことは<ヨルヒト>だろう？その教育は受けてこなかったの？」

その言い方にはカチンときた。

「すみません。<ヨルヒト>って言葉の意味すら分かりませんが。」
「

へえ…言葉の意味を知らないって……君、名前は？」

開き直って言葉だけで謝る美夜子に（気持ちがあっても、同じように聞こえるのだが）、気を悪くした様子もなく逆に気を引かれたように彼は彼女の名を尋ねた。

「鳴無美夜子です。」

トイにだけ名乗らせておいて、自身が名乗らない道理はないので、そこは素直に名を告げた瞬間に彼が息を飲んだのが分かった。

「ミヤコ？君がミヤコ？それは【美しい夜の子】と書いて美夜子と呼ぶ、美夜子かな？！」

勢い勇んで告げてくるトイに美夜子は頷くしかない。

（何？この人は私を知っているの？）

「ああ！！やはり、君は生きていたんだね！！20年前、全てを諦めたけど……！」

「20年前？」

その言葉に思い当たる節があり、美夜子は血の気が引くのを感じた。

『泣かないで、美夜子』

フラッシュバックする優しい声。美夜子は一歩足を後退させる。

「貴方は誰？私の何を知っているというの？」

自分の過去を知る者は少ない。家族だけだと思っていたが、他にも知っている人がいると言うならば、少々厄介なことになる。

美夜子は一人で喜んで踊っているトイに新たな警戒心をむき出しにさせて（そうは見えないが）聞く。

それを見てトイはなおも嬉しそうに顔を緩ませる。

「そんなことはどうでもいいじゃないか！！ともかく、悪いようにはしないから……ここで会えたのも何かの縁だ！さあ、色々話をしようじゃないか……と、今はその時間もないか。」

「あの」

「ふーんくシロツバキ」の後裔が傍にいるんだね。まあ、仕方ない。今日の所は会えただけで良しとするか。さあ、お帰り。俺の愛し子。

「

トイは美夜子の頬を両手で包み、彼女に吐息がかかりそうなほどの近さで微笑む。その近さに異性に免疫のない美夜子は固まった。

おかげでどんどん近づいてくるトイの顔を避ける事が出来なかった。

「~~~~?!!!!」

唇に何か触れたのか否か分からないほど、淡い感触を感じて目を見開いた瞬間、美夜子は気が遠くなる感覚を覚え、そのまま意識はフェードアウトした。

目が覚めた瞬間、美夜子は息苦しさに大きく息を吸った。気管に異物が入り込んだ感覚に、次は大きくせき込む。

「大丈夫!？」

誰かが背中をさすり、咳が止まらない美夜子を気遣う。それに答えたいと思いつつも、呼吸すらままならずそれもできない。

そんな美夜子に冷たい言葉が下りてくる。

「大した力もないのに、<果ての静寂しじま>に深入りしすぎるな。僕が助けてやらなかったら、お前の息は完全に止まっていたぞ。」

声を出せずに苦しみつつも言葉に頭を上げると、穏やかな表情なのに酷く冷たい雰囲気きふきの漂う静が美夜子を見下ろしていた。

涙目の視界。ぼんやりと静の先に見えるのは暗闇に支配された空間ではなく、美夜子が白鷺邸で与えられた部屋。背中をさすってくれている蝶子の他、こちらを見下ろす静とその背後には遥と叉輔がいる。

そうして美夜子は自分が現実に戻ってきた事を、ようやく理解した。

（私????生と死の狭間で八条さんがいて、変な足枷が付いてて、それで変な男に……!!!）

何が何だか分からなくて色々と蘇る記憶の中で、どアップで思い出されたトイの顔に、美夜子は自分が感情を表に出すことが出来

たら赤面していたに違いないというほどの羞恥を感じた。思わず手で口を押さえる。そうしなければ、叫びだしそうな気分だった。

（あ…あれ、あれ、あれ）

「ちよつと大丈夫？」

（私のファーストキス！）

言葉に出して叫びだしはしなかったが、美夜子は思わず塞ぎこんでベッドで前に倒れ込んだ。

どう見ても挙動不審な彼女に蝶子が不審そうに声をかけるが、それも聞こえない。

（信じられない！！そりゃ、この歳でキスもまだとか…ないかもだけど！！仕方ないじゃない！！だって、私、呪い人形なんだもん！！でも、だからってあんな良く分からない男に、分からないままにファーストキスを奪われるとかありえないから！！）

自身でもまとまらない叫びを心で絶叫しながら、ぼすぼすと悶える感情のまま布団を叩く。

訳のわからない行動をとる美夜子を、一同は呆気にとられて見つめるしかないが、静がそれからいち早く立ち直って、倒れ込んだ美夜子の首根っこを掴んで顔を上げさせた。

その顔は当たり前だがいつも通りの能面顔だが、何となく暗い気迫が伝わってきて静は一瞬だけたじろいだ。

「な、何だよ？」

目の前の現実離れた美しい男を間近にして美夜子に思考は一瞬止まる。

「……何でもないです。あの離していただいていいですか？」

静の顔を見て妙に冷めた気持ちになった美夜子。静も奇行をやめた彼女の首根っこを掴んでいる理由はないので、さっさと離す。

美夜子は一つ気を大きく吸った。

（あんなの夢みたいなものよ。ノーカウント。ノーカウント。）

言い聞かせて息を吐くと、やっといつも通りの自分を戻す。

「それで<果ての静寂>で何があった？」

「<シジマ>って静寂って意味の<シジマ>ですか？」

思い出したくもないが、暗闇の中でのトイとの会話がさっそく役に立つ。

「…そうか。お前は何も知らないんだな。知識がないまま、あれだけの能力を使うから今回みたいなことになる。蝶子が気がつかないのなら、本当に死んでいたぞ？」

美夜子の様子が気になって、蝶子はもう一度部屋を訪ねてくれたらしい。

比較的夜としては早い時間帯だったので、起きているだろうと思って部屋をノックしても返事がない。気になって部屋に入ると、ベッドの中で眠っている美夜子を発見。

寝ているのかと安心したらしいが、寝息の一つも聞こえてこないことに蝶子はぎくりとしたらしい。

近づいて眠る美夜子の口元に耳を近づけるが、やはり息をしている様子がなく、胸に耳を押しやっても心臓の音が聞こえない。

蝶子はすぐに静に報告し、静たちも美夜子の部屋を訪れ、現在に至るらしい。

「私、死んでいたってことですか？」

息と心臓が止まっていたということは、すなわち死でしかない。そんなことは今まで生と死の狭間にいたとしても経験がないことで、美夜子も怖いやら驚くやら困惑する。

「実際、どれくらい息が止まっていたかは分からないが、仮死状態には近かっただろうな。お前が死者と対面することが出来る場所は<果ての静寂>と呼ばれる異界だ。あの場には<ヨルヒト>と呼ばれる異能者しか行くことはできない。」

「ヨルヒト？」

美夜子が生と死の狭間と呼んでいた場所は、<果ての静寂>と呼ばれていたらしい。トイが言っていた<静寂しじま>も同じであろうと推測できた。

「人偏に衣と書く<依よ>に<人ひと>で<依人よるひと>と読む。お前のように果ての静寂で死者と対面する能力がある人間の総称だ。だが、果ての静寂は生と死が曖昧な場所。深みに嵌れば今回のお前のように魂が、死の世界に引きずり込まれてそのまま死に至ることもある。」

今まで何気なしに使ってきた能力に死の危険があるとは考えたこともない美夜子は、血の気が引いて行くのを感じた。その様子を見て静が呆れたように息をつく。

「本当に何も知らずに力を使っていたんだな。あんまりに綺麗な手

際で昨日、俺の前で果ての静寂に沈んで行くもんだから、何もかも知っているんだと思っていた。」

「いや……はい。私も気が付いたら使えていた力なので、正直言つて、そんな自分の命を危ぶむ力だとは思ったことがなくて。」

ベッドに横になつたまま、近くの椅子に座る静の不躑躅な視線にも気が付かず、美夜子は自分が今生きていていることに心底ほつとする。

「それがそもそも可笑しいんだよ。」

「はい？」

「果ての静寂に行くことは、依人が長年にわたり勉強と鍛練を持つて使えるか使えないか分からない力だ。お前はそれを赤子がいつの間にか歩いたり話したりするのと、同じ感覚で使っている。僕も何人も依人を知っているけど、今までそんな依人は見たことがない。」

見たことがないと言われても、美夜子は逆に一般的な依人というのを全く知らないので反論のしようもない。彼女にとってこの力は誰に教えてもらったものでも、身につけようとして努力したものでもない。

「ああ、別にお前を責めている訳じゃないよ。お前がこの手の知識に疎いことは、今回のことで証明された。知識があつたら、今回の様に自分の命を危険に晒してまで果ての静寂に留まることはない。もっと上手くやるはずだからね。」

につこり笑つて言われたが、どうにも貶されているとしか思えない言葉に内心面白くない美夜子ではあるが、ここで下手に何か言つて墓穴を掘ることもないだろうと話の矛先を変えた。

「でも、今までこの能力を使って呼吸や心臓が止まったことはなかったのに……今回に限ってそんなことが起こったんでしょうか？」
「さあ。僕もそれは分からない。何か変わったことはなかったのか？」

疑問に疑問に返されて、変わったことなど山ほどあったと思いがら、はたと気がつく。

「えっと、天宮様が助けて下さったんですね？」
「まあね。」

「……ありがとうございます。ですが助けて下さったのに、私が死にかけて理由が分からないんですか？」

死にかけての原因が分からなくては、助けようがないのではないかと美夜子は考えたのだ。

「言っておくけど、僕は依人じゃない。よって、果ての静寂で何が起こっているかなんて全く感知できない。が、お前の魂が体から離れていることはすぐに分かったからな。死にかけている理由が、魂が死に引きずられているからだと推測できた。だから、お前の体と魂を繋いでいる糸を引っ張り、魂を体に戻した。僕がしたのはそれだけさ。」

「……なるほど。」

静が語る内容は理解できたが、その原理はほとんど理解できていない美夜子。しかし、これ以上馬鹿にされるのも癪だし、これ以上色々説明されるのも疲れる。

部屋の中の時計は深夜を示しているし、美夜子はさっきの出来事で疲労している事をようやく実感し始めていた。体も頭も酷く重かった。

「まあ、今夜はお前も疲れただろう。詳しくはまた明日話し合おう。僕も明日は一日屋敷にいるからな。」

「はい。」

美夜子の体調や心情が顔に出ている訳ではないだろうが、静はそういうとさつさと椅子から立ち上がる。その後が続いて部屋をぞろぞろと出ていく男性陣。蝶子だけが護衛として部屋の中に残り、美夜子はそんな状況に恐縮しながらも、疲れはピークに達していたらしくあつという間に眠りに就く。

夢も果ての静寂もその夜、美夜子に訪れることはなかった。

彼は必死にもがいていた。

『シニタクナイ・シニタクナイ・シニタクナイ』

光のない闇の中、その叫び以外の感情と呼べるものは全て消え去った。彼に残ったものは、もはや生存本能だけに近いのかもしれない。

だが、誰も何も彼を救うものはおらず、ただただ永遠にも思える時間をもがき苦しみ続けるしかない。

『まったくお前は役に立たたない。』

聞こえた声が闇を切り裂き、苦しみの時間が止まる。それは彼にとって酷く聞きなれた声であった。

『様！？』

声によって取り戻された理性。彼はその声の主を呼び、辺りを見回す。しかし、闇以外の何物もそこには存在していない。

『いつも役に立たないとは思っていたけど、最後の最後まで役に立たないとは。本当にがっかりだよ。あの女を消すために果ての静寂に残しておいてやったのに、結局失敗しおって。』

彼は混乱していた。聞こえてくるのは確かに主の声なのに、それはいつもの主とは全く違う声音。言葉。あの優しい主が自分にこんな言葉をぶつけてくるはずがない。彼は首を横に振った。

『まあ、アイツが現れるのは予想外だったし。あの女の力も存在もあまりに未知数。そういう意味ではお前も捨て駒なりには頑張ってくれたのかもしれないな。』

『助けて下さい！！！』

主が何を言おうとも今は関係なかった。彼はその声に纏わりつくように悲鳴を上げる。しかし、帰ってきたのは無情な声。

『無理だ。お前がいるのはもはや果ての静寂ではなく、死の闇の中。私はまだ生きているのでな。そこには行けぬ。』

突き付けられた真実に闇の中で見えない瞳を見開いた。

シ？し？…死？

少しずつ浸透する絶望に体が震えた。腹の底から絶叫が木霊したが、その声は次第に闇の中に飲まれ、彼自身も闇の中に消えていった。

翌朝、美夜子は仕事が休みだという静と対面し、昨日、変な黒マントに襲われた事、果ての静寂での事を大まかに話した。大まか…細かいことと言うか、美夜子が抹消したい出来事は勝手に割愛する。

それを聞いた静はあの感情の読めない笑顔を張りつかせて、何かを考え込むように沈黙した。

その背後で相も変わらず遙と又輔がこちらを睨みつけるように見ていることに、何とも居心地の悪さを感じながら、美夜子は能面顔のまま出されたお茶をすすっていた。

「で？」

「は？」

どれくらい沈黙が続いたか定かではないが、いきなり『で？』と言われて美夜子是不敬だとかそう言ったことを忘れて声だけで聞き返した。

そんな美夜子に又輔が眉を吊り上げたのを見たが、当の静の方は気にもとめていないらしい。

「だから、君はどう思うか聞いている？昨日のこと、事件のこと、まあ、一日で色々あった訳だが、何かつかめそうなのか？」

「いや、何が何だかさっぱりでしょう。え？天宮様にはこれだけの情報で何か分かったっていうんですか？」

あまりの横暴な物言いにむっとした。

美夜子は情報のほとんどないままに、危ないことに巻き込まれるし、死にかけるしいっぱいいっぱいだというのに、静はまるでこれでもう事件を解決させると言わんばかりだ。

「おい！美夜子！！静様になんていう口のきき方を！！」

「又輔、うるさい。」

「はっ！！申し訳ありません！！」

静に怒られた又輔を、後ろで蝶子が笑ったのが分かった。昨日と同じく、この場に静がいなければその笑いで又輔と蝶子の言い合いが始まるところだろうが、又輔がぶすつと黙り込むだけでとりあえ

ずは収まる。

静は黙った又輔に満足して、笑みを深くして先を続けた。

「これだけあればある程度のことは推測可能だ。なあ、遥？」

「そうですね。馬鹿じゃなきゃ、分かることがいくつかありますね。」

まさか、そんな言葉が返ってくるとは思わなくて美夜子は内心で驚いた。

「…そうですか。では、私は馬鹿で結構なので、その推測可能なことをお話しいただけますか？」

「あれ？そんなに呆気なく認めていいの？」

「構いませんよ。」

自分がどう思われてもいい相手に、馬鹿だと思われようが、阿呆だと思われようが美夜子は構わない。元々、この厄介な病気のせいで悪く思われることには慣れている。

「むしろ、私が馬鹿だというのなら、さっさと私を解放してください。その推測可能なことで事件自体は解決出来るんじゃないか？」

「それは無理でしょうね。」

そして、続けるのは遥。

初日以来、何度かあっている相手ではあるが、叶の上司であるということ以外、あまり彼のことは分からない美夜子は僅かに警戒心を強めた。

何しろ先程、馬鹿と言われたばかりである。貶められることに慣れていても、それが平気な訳じゃない。

「まず、鳴無嬢の話で注目すべき点は彼女がそこかしこで感じている『匂い』です。実際、それを感じることが出来ない私たちでは判断しかねる点ではありますが、私たちが認識できないという点からそれが【呪い】の産物であることは確かでしょう。」

「の…呪い？」

「話の腰を折らないでいただきましょうか？」

何の話が始まったのかとぼろりとこぼれた美夜子の言葉を、遥はぴしゃりとはねつけた。眼鏡の奥から光るその強さと冷たさには一片の曇りもなく、美夜子は恐ろしさに黙って頷くしかない。

「【呪い】…その可能性が出てくるのであれば、私たちが何の手がかりも得られない説明が付く。何しろ【呪い】を感知できる依人はいないというのが、現状ですからね。そして、鳴無嬢を襲った相手は恐らく【マシユ】、それを操っていたのが【呪い】の本体と言ったところでしょうか？」

「まあ、そうだろうな。」

以上、会話は簡単に終了。

静と遥の間だけで完結した会話に、美夜子はぼそりと小さな声を発した。

「そんなんで分かるかい。」

「まあまあ。あの二人にはイラつくだけ損よ。スルーなさい。それが一番簡単よ。…ほら、あの馬鹿顔を見て、少しは怒りも収まるわよ？」

彼女と離れたあたりに座る男三人には聞こえなかったが、蝶子には聞こえていたらしい。彼女も非常に小さな声でそう返した。

その声に促されて、納得しているような様子の静と遥の後ろで、

どうみても話の内容を理解できていないと全身で表現している又輔を見て、笑えはしないが苛つきとともに息を吐き出した美夜子であった。

説明するのに適した場所があると言うので、場所を移すことになった一同。

美夜子は静を先頭にした男性陣の後ろで、蝶子を従えながら歩いていった。ちなみに蝶子は今日も似合わないメイド服、それも昨日とは微妙に型の違うものを着ている。

（メイド服を何着も持つてるのかな？）

何となく気になったが、聞いてはいけない気がして口はとりあえず噤んだ。

そんな呑気なこと考えながらずんずんと戸惑いなく進んでいく静についていくと、そこは美夜子がまだ立ち入ることのなかった地下。地下は美夜子が見てきた屋敷内とは違い、無機質で無装飾な壁がむき出しで存在し、まるで近未来都市にでも迷い込んだ装いであった。ただ、色はやはり白が基調となっている事は変わらない。

広さも大きいようで、同じような廊下しか続かないため、何度か右に左に廊下を曲がったが、美夜子は絶対に一人では迷うに違いないと確信する。

そうして、同じ屋敷内だというのに、数分歩いた先に一つの部屋に案内される。

「さあ、ここだよ。」

空気が抜けるようなエア音の後に自動ドアが横滑りして、扉が開く。

何があるのだろうと緊張していた美夜子であったが、そこはとりたてて目を引くようなものもない薄暗い部屋でしかない。

とりあえず感じたと言え、機械がひしめき低い音と籠る熱を
発していて、とりあえず酷く息苦しさぐらいだろうか。

縦に長い薄暗い部屋の奥には、壁一面に光を放つ画面がたくさん
あり、その全てに同じ映像が映し出されていた。それを確認して美
夜子は目を細めた。

「これは昨日、お前が襲われた映像だ。」

「そのようですね。」

「あれ？驚かないの？」

「驚いていますよ。そう見えていないかもしれませんけど。」

そう言いながら、もう諦めと言うか、どうにでもしてくれという
気持ちが大きい美夜子は、本当に驚いていない。だが、驚いている
と言え、それが美夜子である以上嘘か真か判断することは難しい。
静が腑に落ちないような表情を浮かべている気がしたが、そんな
ものとりあえず無視である。

「美夜子、この映像：あんたが一人でいるようにしか見えないけど、
何かに追われたりしているのよね？」

そう言われて、どういうことかと美夜子は無表情で頭を傾ける。

「はい。映ってますよね？蝙蝠みたいな生き物が。」

映像として見るだけで昨日の記憶がまざまざと蘇り、恐怖感
は拭えない。客観的に見ると、実際に襲われているのではその度
合いは大きく違うが、昨日の今日では忘れることはできない。

「…俺にも何にも見えねーぞ。お前が一人で馬鹿やっているように
しか見えない。」

「本当ですか？」

「残念だけど、私にも蝙蝠みたいな生き物は見えない。」

又輔と蝶子に見えていないという蝙蝠もどきの姿を、美夜子はもう一度確認する。そこには今まさに昨日の美夜子に襲いかかる大きな黒い影がはつきり映っている。

「こんなにはつきり映っているのに……何か理由があるってことですよね？」

二人が嘘を言っているようにも見えないし、嘘をつく理由も見当たらぬ。美夜子がずばりと聞くと、静は場所を移ったこともあるのか、今度はあっさりと教えてくれる。

「その通りだよ。この場ではお前を襲ったあの【マシュ】が見えるのは、僕とお前だけだ。」

「いい加減にその当たりの説明もしていただけませんか？」

居直った美夜子の挑戦的な物言いに、又輔がまた目くじらを立てているのが見えたが、蝶子はその横で彼の足を踏みつけてそれを止める。

「勿論。【マシュ】とは【魔の種】と書く。あれは魂の欠片さ。だから、魂が見える者【タマヨミ】にしかその存在は見えない。ちなみに【タマヨミ】は【魂を詠じる】と書く。」

（なんか……段々、色々、深みにはまっているような気がする）

なんとなく美夜子が知りたいから教えてやるといふ体裁を取られているが、それはまるでこの目の前の男によって操られて辿り着い

た状況の様な気がしてならず、美夜子は気持ちが重くなってくる。
そんな彼女の気持ちを助長させるためか、はたまた慰めるためか、
静はにっこりと笑みを深めて言葉を続ける。

「この世界に生きる存在はその体に魂を宿す。それがなくては体が生きていても、死にいたることは誰しもが知っているだろう？」

この国の人間は帝に魂を与えられなければ、健康に生まれた赤子でも死にいたる。母から生まれた赤子は徒の入れ物に過ぎず、魂を与えられて初めて人間として生きることができる。

「魔種とは体を得られなかった魂だと言われている。入る体がなく、生まれることが叶わず、死すら訪れない彷徨える魂。そういう存在がこの世界には数多存在している。お前を襲ったのもその一つさ。」

「私は初めて見ました。」

美夜子が魂詠だというのであれば、これまで何回もそう言った存在を見てもいいはずだ。

「通常、魂だけの存在では現実には存在することは不可能だ。魔種も本来は果ての静寂に存在する。あそこは魂だけの存在しか認めない場所だからな。」

「果ての静寂でも見たことはなかったです。」

「お前の能力がどういうものか僕にも把握できていない以上、憶測でしか語れないが、お前は死者の魂の気配を追ってピンポイントでしか果ての静寂には降り立っていない。そのために魔種に出くわす確率は低かったのではないかと思う。」

（なるほど魔種に魂詠。世の中、私の知らないことばかりねえ）

聞いているうちにまるでお伽噺かマンガにでも潜り込んだような気分になってきて、美夜子は非常に他人事のようにそんな風に考えていると、静がじつとりとした目で彼女を睨む。

「…聞いている？」

「聞いてます。それでなんで果ての静寂にしかない魔種が、現実で私を襲うことができたんですか？」

ありえない話であるが、どうにも静が現れないはずの彼女の感情を読み取っているのではないかと思われる態度や言動をとることがある。

単なる偶然か、それとも天宮家の特殊能力が知ったことではないが、やはりこの男には気を許してはいけないと美夜子は気を引き締める。

「そう。それこそ呪いの力だよ。」

言葉にぞわりと悪寒を感じた。

その声はまるで睦言を囁くような甘さを湛えているというのに、美夜子には刃を首筋に付きつけられたような冷たさしか感じられなかった。

「森に入るまでお前は黒いマントを被った男を追った。そして、魔種をそいつからけしかけられたと言ったね。」

「はい。」

「だけど、僕にすらその姿は見えない。その黒マントの姿は普通の人間にも、魂詠の僕にも見えない。見えるのは依人のお前だけ。それはすなわちそれが呪いである証拠。」

画面は蝙蝠モドキに襲われて、茫然と座り込んでいる美夜子を映

しだしていた。その表情と今の美夜子の表情は全く同じ表情を浮かべている。（いつも同じ表情だが）

「呪いっていうのは、死者だけが許された邪法。魂の安寧と引き換えに、強い力を現実に作用させることが出来る、最強で最悪の武器。呪いは死者の願いを叶えるまで作用し続け、誰にも止める術がない。」

「……」

おぼろげには理解できるが、だから何が重要なのかいまいち理解できない。黙り込む美夜子に蔑んだ表情で遙が碎いて説明を加えてくれる。

「すなわち、死んだ人間の願いが呪いの原因だ。その願いがどんなものであれ、それが呪いとして発動すれば、願いが成就するまで呪いは現実に存在し、作用し続ける。まあ、呪いとはその言葉の通りの意味ということだな。…まったく、これくらいすぐに理解しろ。」

そう言われても、現実に呪いを見たことも体験したこともない美夜子には、いまいちピンとこない。例えばどんな事だろうと考え見ても思い浮かばない。普通、死者が願うこととはどういうことだろう。

『シニタクナイ』

美夜子がそう考えた瞬間に、フラッシュバックする叫び。

「呪いとやらで死者の復活も可能なんですか？」

「それは無理だよ。呪いは死者の魂そのものが対価だ。魂がなくて復活もないだろう？そんな願いがかなえば、世の中蘇ったゾンビ

だらけになる。」

「なるほど、それはそうですね。じゃあ、呪いって例えばどんなものがあるんですか？」

そう聞いた時、美夜子は画面に背を向けていた。

無数の美夜子を映す画面。その時、誰もがその一つの画面が一瞬だけ揺らいた事に気がつかなかった。そして、その画面の中の美夜子と対峙していた黒マントが他の画面とは違う動きをしたことに、見えないのだから誰も気がつくはずもない。

画面の中で録画された映像とは別の動きを見せる黒マントは、首をぐるりと画面の正面に向けると唯一見える口元をにたりと歪めた。

「そうだね、例えば死者を死に追い込んだ借金取りを殺すとか。自分を捨てた恋人に復讐するとか。ああ、後は残された家族を――」

明るく笑いながらいう話題ではないが、静は淡々と続けた。

それを黙って聞きながら、美夜子はまたあの匂いが彼女を包んだことに気がつく。

「!？」

この匂いが近づいた時には碌なことがないことを、身を持って理解している美夜子のはっとして辺りを見回した。そして、悲鳴にならない声を上げた。

「美夜子!？」

気の抜けるような悲鳴に笑いを誘われそうになりつつも、突然の彼女の奇行に他の面々は目を見開く。何しろ美夜子は独りでに宙に浮かび画面に引き寄せられていくのだ。

ただ事ではない事は一目瞭然であつた。

「呪いか!!」

静が低く唸つたが、美夜子にその声は聞こえない。

彼女は今、一人だけ見えているものと現実に脅えていた。

美夜子以外には彼女が独りでに宙に浮かんでいる状況であるが、実際には黒マントの人影に埋め尽くされた画面から現実に無数の黒マントの手が美夜子に向かって伸び、彼女の体をつかみ、画面の中に引きずり込もうとしているのだ。

その力の強さは又輔と蝶子が二人がかりで美夜子を引っ張ってもものともしない強い力。

声を出して叫びたくとも、口すら黒い手に覆われて息をするのも苦しい。

「美夜子!!!」

ぐんと一段と強い力が美夜子を引っ張り、又輔と蝶子を振りほどく。その勢いのまま、美夜子はテレビ画面の中に引きずり込まれた。その瞬間にいつも果ての静寂に沈むような冷たさと暗さを感じた。美夜子の視界は全てを闇に覆われた。

静は突如として消えた美夜子に慌てる部下たちを叱咤した。（遥だけはしれつと何もしないで立っていたただけだが）

「又輔、蝶子、落ちつけ。」

「ですがっ！」

「美夜子は体ごと何処かに連れ去られた。行先は果ての静寂じゃないことは確かだ。ならば僕が追う。」

静は美夜子が消えた画面に手を当てると、美夜子の気配を追う。その肩を遥が掴んだ。

「お待ちください。貴方が自ら助けにいかれる危険を冒すおつもりですか？」

「そうだ。」

「貴方ともあるうものが愚かなことはやめることです。相手は呪いと思しき存在ですよ。貴方にどれほどの力があっても呪いの前には無力です。依人をすぐに手配します。」

丁寧な物言いだが、遥の眼鏡の奥の鋭い眼光と言動からは主に對する敬意が一切感じられない。だが、静は臆することなく、彼の提案を切つて捨てる。

「そんなものを待つていては美夜子は助からない。」

「あの女性に貴方が危険を冒すほどの価値があるとは思えませんが？」

制止を振り切る主に対する割には、遥は一切の冷静さを失わない。

いや、慌てる必要すら彼は感じていないようだ。

「価値はある。今のことで確信が持てた。呪いは何故美夜子を攫う？それは彼女が間違はなく依人である証拠。華代がいなくなった今、あれの登場は僕にとっては僥倖の兆し。」

後半は呟きのように小さく、慌てふためく又輔や蝶子には聞こえない。だが、遥だけには聞こえていたようで、人の悪そうな笑みを浮かべてそれ以上はないも言わなかった。

次の瞬間には静も美夜子と同じように跡形もなくその姿を消し、後に残った部下三人は三者三様の様相と呈していた。

「静さーまー！！！！！」

「うるっさいわよ！！！！！」

涙目になって主の名を呼ぶ又輔を、こちらも混乱しているようだがとりあえず怒鳴り散らす蝶子。

「はいはい。慌てるのはいいですが、静様がいない間に私たちがやることも多いですよ。二人ともしっかり働いてください。」

ぱんぱんと手を叩いて遥は早々に部屋を出ようとする。その何の感慨もない言葉に又輔はかっとなつて遥の肩を掴んだ。

「お前は！！！！！」

恫喝してぐいつと背中を向けている遥を自分の方に向けようとした瞬間に、又輔は宙を舞った。巨体が遥に投げられて固い床に叩きつけられる。

放心する又輔に、蝶子は呆れたように手で顔を覆った。

「その有り余る力は他のことに使ってください。なあにあの人の事です。私たちが心配するのも馬鹿馬鹿しいほど、あっさりと何事もなかったかのように帰ってきます。」

「それだけ静様のことを信用しているってことなのかしら？」
「いいえ。」

にっこり眼鏡の奥で笑って遙は続ける。

「それくらいでなくては、この私がお仕えするのに相応しい方ではないということです。」

背を向けて部屋を出ていく遙を見送って蝶子は仕方ないわねと言った感じで息を一つ吐く。

「全くどいつもこいつも面倒な奴ばっか。ほら、あんたもそんなとこで寝てばっかないで行くわよ！」
「ぐっ!!」

蝶子は叉輔を踏みつけて遙の後を追った。

テレビ画面の中に連れ込まれるという、あまりに非現実的な出来事に遭遇して、美夜子は茫然自失になりたかった。

しかし、美夜子はたとえ知らない場所に連れられ、蝙蝠もどきに囲まれているという絶体絶命の状況であろうとも、今のところ冷静さを失わずにいた。

それはこれがいかに現実離れした状況だからなのか、美夜子の性質なのか定かではないが、冷静になれとただただ自分を奮い立たせる。

「依人にこれ以上、事件に関与されては困るのだ。昨日、忠告したはずだ。それを無視した貴様が悪い。…ここで死んでもらおう。」

黒マントに連れ込まれた場所は、美夜子が見たこともない場所であつた。

あたりは全てが満開の桜の木、まるで桜の森と言つた様相の場所で、彼らが対峙している場所だけぽかりと穴があき澄んだ泉が存在していた。そして、空間はあの匂いで満たされていた。

時刻は夜。月は満月。

舞い散る桜の花弁は、月の光にきらきらと光り、淡い桜色を瞬かせる。

こんな状況でなければ、さぞ美しい光景であらう。

「貴方は誰？」

（私…こんな場所知らないけど見たことがあるような気がする）

「今から死ぬ貴様には関係のないこと。貴様はこれからこの魔種たちに切り刻まれて死ぬ。」

「私を殺したいだけなら、もっと問答無用でやればいい。こうして今、私と話していることには意味があるのでしょう？」

黒い手に体を拘束されたままこの空間に連れてこられて、美夜子は解放された。殺すだけなら彼女が言うように、拘束を解くことなくすぐに魔種をけしかければいいことだ。

だが、黒マントは魔種をけしかけることもなく、彼女と対峙して会話を続けている。

「貴方は何かを待っているの？」

「その頭はお飾りではないらしい。ああ、待っているさ。だが、それは結果が同じだから待っていていられる。待っていても、待たなくても貴様が死ぬという結果が。」

それほどに自分の力に自信があるということだろう。呪いが最強最悪といていた先程の話を思い出す。

「貴方は天宮様たちが言っていた通り呪い…なの？」

（何を待っているかは分かんないけど、少しでも時間を稼ぐ。そんなもって何か…何かないの！？）

黒マントに対峙しながら、辺りを探る。目の前を邪魔なほどにヒラヒラと舞う花弁が鬱陶しくすら感じ、イライラと募る焦燥にぐつと拳を握り込む。美夜子はこんな状況でもまだ何一つ諦めてはいなかった。

「それを知ってどうする？」

「否定しないのね。事件に関わるなとあんたは言った。事件っていうのは桜月華代さんがいなくなった事…貴方はそれに関わっているの？」

「言っただけだ。今から死ぬ者が詮索無用だと。」

「呪いは死者が使うものだと言いたわ。貴方は死んでいるの？」

「耳がないのか？」

立て続けに質問をする美夜子に黒マントの声音にいらいらとした感情が滲む。

「貴方が誰なのか私は知らない。願いが何なのか知らない。呪いが何なんかなんて分からない。だけど、生き返ることができない以上、

死者は死者でしかない。願いを叶えてもあんたは何一つ報われることはない。」

死んでしまった後に、生きることができない世界で願いがかなって何が楽しいものかと美夜子は考える。

死にたくないという本能だけじゃない。美夜子には生きて叶えたい、強い願いがあった。約束があった。それは全て死んでしまっただけは意味がない。

だから、呪いの説明を受けて、まずその存在そのものに拒否感を抱いた。

震える体を叱りつけて、美夜子は背筋を伸ばし顔にくつつく花弁を乱暴に振り払った。

「私はこんな所で死んでいられないの。生きている者にだって願いはある。貴方になんか殺されてたまるもんですか。私は生きて事件を解決する。（でないと家にも返してもらえないし）」

小さく心の中だけでばやきを付け足しつつ、自分の周りを飛ぶ魔種たちがまるで黒マントの心情を表すかのように、ばたばたと段々音や上下の揺れが大きくなっていくことを感じた。

（黒マントは動揺している。この隙に　　）

とりあえず、森の中に入れば隠れる場所もあるだろうと一歩後ずさり駆けだそうとした瞬間だった。

「見つけた。」

笑いを含んだ涼やかな声に美夜子は、彼が黒マントの待ち人であることを察した。

「天宮様。」

それはありえない情景であつたが、一枚の絵のように美しい景色。月の光に照らされた絶世の美男子が泉の上に浮かびあがり、まるでさながら桜の神かのような神々しさと、清廉さを持っていた。

5 - 3 (後書き)

色々と言葉の意味とか説明が多い部分が続いていましたが、分かりにくい部分などがあつたら申し訳ありません。これからしばらく説明部分というよりは、物語が展開していく予定なので更新が早くできるように頑張ります。

拙い作品ですがお気に入り登録や評価などして頂いてくださった読者様！本当にありがとうございます！！

静は泉からふわりと浮きあがり、体重を感じさせない軽やかさで花卉が敷き詰められた地面に降り立つ。

「へえ、これだけの数の魔種を集めるのも大変だろうなあ。さすが呪い。」

そう口先だけで感心してみて、魔種たちを歩くだけで吹き飛ばす静の表情はいつもと変わらぬ笑顔。

それを呆然と見詰めながら美夜子は恐怖に似た強い感情を覚えた。『思わず魔種だとか、どうして静が現れたのか、様々なことが頭の中から抜け落ちるほどに。』

「おい瞬きくらいした方がいいぞ。」

「…はい。」

「大丈夫か？」

「まあ、一応。」

受け答えは一瞬の詰まりの後に平常にしていたものの、あまりの強い感情に静が目の前にきたことにも気がついていなかったため、覗きこまれて心の中では大絶叫を上げていた美夜子である。

そんな美夜子の対応に何を感じたかは定かではないが、静は一つ頷いた後きよろきよるとあたりを見回した。

「うん。とりあえず、呪いはどの辺にいる？」

魔種は見えているがやはり黒マントは見えていないらしい。美夜子は静が現れてから動きのない黒マントの方を言葉なく指さした。

静はそちらの方を向くと、美夜子を呪いから守るように一步前に出る。

「僕の前にも姿を現してはくれないかな？僕をおびき寄せるために、いつでも攫えるはずなのに、わざわざ僕の前で美夜子を攫ったんだろ？」

その言葉に従ったのか、はたまたそのつもりなのかは知らないが空間に充満していたあの匂いが一層濃くなったような気がして、次の瞬間には黒マントは静にも見えるようになったらしい。静はいかにも演技かかったように目を大きく見開いた。

「ホントだ。美夜子が言った通り黒マントをすっぱり被っているんだ。それで僕に何の用なの？」

「願いはただ一つ、これ以上の詮索をやめてほしいだけです。」

(?)

美夜子は黒マントの様子が自分と接する時と、静と接した時では何やら違うことに気がついた。

マント越しのくぐもった声だが、言葉の語り口調、言い回し、トーンが美夜子に対する硬質なものから妙に恭しい物言いに変わった。

(呪いの人物は…天宮様の関係者?)

華代を攫った相手である以上、その婚約者である静の関係者である可能性は十二分にあったが、いよいよその可能性が大きくなった。静もその可能性を感じ取ったのだろ。僅かに目を細める。

「君は誰だ？華代や王将を殺したのは君なのか？」

「それを知ってどうするのです？」

「僕にはその権利があると思うが？」
「貴方に？」

ソワリ

美夜子は背筋から駆けあがる悪寒を感じ、藁をもすぐる思いで咄嗟に静の服の裾を掴んだ。

静の登場で収まっていた魔種たちの動きが再び大きく激しくなる。

「貴方に華代様の何が分かるというのか！！」

怒号と共に黒マントから発せられる強風に、美夜子は目を細め顔の前に腕を掲げる。ひらめく黒マントの隙間から僅かに見えるその顔。

一瞬しか見られなかったそれは、美夜子が見たことのない青年だった。年頃は美夜子と同じくらい、とりたてて美しくもなければ、醜くもない顔。だが、その頬に大きな傷跡が印象に残った。

「名ばかりの婚約者！彼女が何を想い、何を考え、何のために貴方と結婚したかまるで分かっていない！！ただ、自分のためだけに彼女を利用した悪魔！そう、貴方は天使の顔をした悪魔だ！！」

急激な感情の高ぶりは、死者にはよくある傾向だと美夜子は常々思っている。

その理由として死者には生きている時にある柵や枷といったものが何一つなく、体も未来もない。あるのはただ魂に染み付いた感情だけ。それゆえに感情というよりは、本能や欲望といった原始的な様子が強くなるのではないかと、美夜子は死者との対面で分析する。

「悪魔とは失礼だな。あれはれっきとした契約だよ。華代も望んだ

結婚だ。」

「馬鹿を言つな！！！」

黒マントから発せられる風がまるで竜巻のように立ち上る。

静は挑発するようにうつすら笑みすら浮かべ、美夜子はハラハラしながらそれを見つめる。

「あの華代様が感情の通わない結婚なんか望むものか！！あの女性は幸せな家庭を、彼女の家族が幸せになれる場所！それだけを望んでいた！！それを貴方が彼女を望んだことで壊したんだ！だから、これ以上彼女の邪魔をするのであれば、貴方には死んでもらう！！その手伝いをする女もだ！」

黒マントは両手を頭の上にあげると、それを思い切り振りおろした。

その動きに呼応して美夜子たちを囲んでいた無数の魔種たちが一斉に襲い掛かってくる。

（げえ！）

あまりの急展開に美夜子も行動が追いつかない。静を置いて逃げ出すにも、四方八方から襲いくる魔種に逃げ道すらない。

そんな風に行動を躊躇して何もできないでいる美夜子など関係ないように、静は慌てる様子一つなくパチンと指を一つ鳴らした。瞬間に静にしがみつくようにしていた美夜子は、彼が白い光に包まれたのを見て目が眩む。

反射的に閉じた瞼をすぐに開くと、そこには襲いかかってきた魔種たちの残骸が花卉の敷き詰められた地面に横たわっているのが目に入る。

「えええ？」

驚いているとは思えない驚嘆の声。それに静が笑う気配がして、彼が僅かに振り返る。

「顔に出なくても怖いものは怖いみたいだね。」

「へ？」

「腕が掴まれていたんだけど？」

「す・みません。」

無意識に力の限り掴んでいた静の腕どころか、静自身から飛び退き恐れおののいて美夜子は勢いよく頭を下げた。

「いやいや。別にそこまで恐縮しなくてもいいよ。怪我はないよね？」

「はい。」

「ここににいるうちは僕から離れないで。」

状況が状況ならうつかり惚れてしまいそうな言葉だが、状況が状況なだけに美夜子はこくこくとそれに頷く他に余裕がない。

それを確認して静は改めて魔種を悉く倒されて立ち尽くす黒マントに向き直る。

「さて、君が誰で、何のために僕をおびき寄せたのか…今ので大体のところは分かったよ。」

美夜子はその言葉にはっとしたが、静は黒マントにまっすぐに視線を向けていた。

「ど・どうして！？呪いの力に貴方が対抗できる！！」

「まさか、僕が呪いに対抗できるわけがないだろう？」

「だが！！今！！」

「どうして、僕が呪いである君の魔種を倒せたか？…知りたい？」

驚きのあまり言葉に詰まる黒マントの言葉を静が続けた。くすくすとしげに笑いながら続けられる言葉にぐつと黒マントが息をのむ気配が美夜子には伝わってきた。

「分かっているようだから教えてあげるけど、呪いが絶対的な効力を発するのはたった一つの願いだけ。その願い以外に使われる場合には、魔種であろうが何かであろうが、君から発せられる全てはただの魔種であり何かではないんだよ。君にとって『僕を殺す事』はその願いか？呪いか？違うんだろう？」

「…」

沈黙は肯定だろう。そうして黙り込む黒マントに静は清々しく笑みを浮かべた。が、美夜子にはそれが魔王の嘲笑にしか見えなかった。

「まさか、ただの魔種をけしかけて僕に傷一つつけられるとも思っただの？」

ぐしゃりと魔種を踏みつぶして静が一步前にでる。黒マントはそれに気圧されるように後ずさりする。

（一体、どっちが悪役なんだろう？）

ふふふと笑いながら黒マントを追い詰めんとする静の様に、悪魔というよりは魔王の方がやはりぴったりだろうと美夜子は思った。

魔王の笑みを浮かべゆつくりとした足取りで黒マントに近づいて行つたかと思われた次の瞬間、静が目にもとまらぬ速さで黒マントとの距離を詰めた。

しかし、黒マントも伸ばされた静の腕を咄嗟の所で後ろに飛ぶことで避けた。するとすぐに静がそれを追う。素早い動きの応酬に地面に落ちた花弁が舞い上がった。

「???」

物音や花弁を目で追うが、常人の美夜子には二人の動きの残像すら目に映らない。

ちなみに美夜子には見えない二人の様子といえば、速さが上なのはどう見ても静であり、黒マントは避けるのが精一杯で逃げることにだけに注視しているため、辛うじて逃げていられるといった感じだ。しかし、黒マントが何かに足を取られてぐらりと体が後ろに傾いたことでその均衡が崩れる。静がその隙を見逃すはずもなく、倒れる黒マントの上に乗るかかり地面に押さえつけた。

「ちょこまか逃げないでくれるかな？」

「離せ ツグ…」

静は相変わらずの笑みを浮かべたまま黒マントの首元を押さえつけている。その手際は尊い貴族のものとは思えぬ慣れた様子で、美夜子は心の中で思いつき眉を顰めた。

言い知れぬ迫力の様なものは感じて、実際の男性的な強さは静からは微塵も感じられない。少なくともイメージから言えば、又輔の様なボディーガード的なものに常に守られていそうだ。だが、美

夜子のそんなイメージは全て覆された。

「このまま大人しく僕らと一緒に現実に戻ってもらおうか？色々見当は付いているけど、聞きたいことも山ほどあるからね。」

静は腕をひねり上げながら黒マントを起こし、彼を逃がさないように鮮やかな手つきで立たせた。それにも一分の隙もない。

それに戸惑いながらも美夜子もとりあえず無事に帰れるのかと息をついた。

「？」

と、薄らいでいた充滿したあの匂いが急に濃くなった事に気がつく。同時に何かがドクンと鳴動したように感じ美夜子は辺りを見回した。

黒マントが何か仕掛けようとしているのかと、少し離れたところにいる二人へ視線を向けるとそこには先程まで静に捕まっていたはずの黒マントが消えていた。

まさかと思い、美夜子が静の方へ足を向けた瞬間にぐつと足が引かれ体が倒れこむ。急なことに美夜子は一瞬息をするのを忘れた。体が強く地面に叩きつけられ目の前に火花が散る。

「何処に行った!？」

僅かに飛びそうになっている美夜子のチカチカする意識に静の怒号が飛びこむ。

恐らく美夜子に消えた黒マントの行方を聞いているのだろう……
がとてもじゃないがそんな余裕は彼女に存在しなかった。

痛む体を叱咤して状況を把握しようとした美夜子の右足には、先程までなかったはずの鎖があった。

（これ…昨日と同じ！？）

そう気がついたと同時に強く鎖が引かれた。

鎖は地面を這い泉の中へと続いている。泉に引きずり込まれることを拒もうと咄嗟に何かと掴もうと腕を伸ばすが何もなく、地面に爪を立てたが鎖を引く強さの前には何の障害にもなりえなかった。

「美夜子、何やってるんだ！！」

そんな美夜子の様子にただならぬものを感じた静が声を上げ走り寄り、地面に突き立てた爪が割れ、血が滲む手を掴んだ。

「ツク…何が起こっている！？」

美夜子の手を掴んだ静であったが、想像以上に美夜子を引っ張る力が強かったのだろう。ぐらりと一瞬体が傾いだが、彼は地面を踏みこんでそれに耐えた。

その力強さに少しだけ安堵しながら、美夜子は状況を実際は非常にパニック状態だが、相変わらずの無表情で伝える。

「この鎖が急に現れて。」

「鎖？」

「見えないんですか？」

美夜子の右足に確かに繋がれた鎖。その質感も重さも美夜子は現実のものとして確かに感じるというのに、静には見えていないらしい。

「呪いか！？美夜子、自分で何とかできないか？」

「何とかといわれても……うわっ」

「美夜子！！！」

美夜子を引っ張る鎖が力を増し、美夜子を掴んでいた静が振りほどかれた。

静は泉に吸い込まれるように引きずられていく美夜子をすぐに追ったが、その彼を何かが横から吹っ飛ばした。

「グッ！何だ！？」

吹っ飛ばされても、地面にたたきつけられた時には受け身の態勢を取っていた静は大したダメージを受けた様子もなくすぐに起き上がる。

だが、次々に見ない攻撃が彼に襲いかかるらしく、何かが叩きつけられる鈍い音だけが断続的に続き、静は頭を庇い蹲ることしかできない。

（これも呪い！？だけど、私にも見えない！！）

届かないと分かっているにもかかわらず美夜子は精一杯静に手を伸ばすが、無情にも美夜子は泉に引きずりこまれた。

ざばつと水に落ちる音、水中に入って息が詰まる感覚、夢じゃない。全てがリアル。

泉に入ってもなおも引かれる右足に、美夜子は必至で腕や足を動かし、体を浮上させようと試みる。しかし、水面はすごい勢いで遠のく。

水面越しに見える満月は大きく、まるで白い太陽の様に煌々と冷たい光を泉の中に降り注ぐ。その光に美夜子は必至で手を伸ばすが、何も彼女を助けるものはその手に収まりはしない。

次第に息が苦しくなり意識が薄らぎ、塞いでいた口が大きく開き

空気が泉の中で泡沫となって消えていった。

そして完全に意識を失った彼女をふわりと光が包んだが、意識を失った美夜子は何も気がつかないまま泉の底へ沈んでいった。

5 - 5 (後書き)

美夜子の受難続いておりますが、次回から彼女のにも光明が訪れる予定です。あくまで予定ですが(笑)

意識がないまま水中に沈み続けた美夜子は光に包まれたまま、とある場所で水の満たされた場所から開けた空間にでる。

光に包まれたまま何もない場所に投げ出された美夜子は、ふわふわとゆつくりと開けた空間をさらに降下していく。

深い水中であるため月の光りすら届かないはずだが、空間を支えるようにそびえたつ無数の柱自身が光を放っており、水中とは思えぬ明るさと幻想的な雰囲気醸し出していた。

その柱の間をかなりの高さ降り、柱と同じ材質でできている光を放つ石畳にゆつくりと落ちると美夜子を包んでいた光は消滅した。同時に美夜子はぼんやりと目を覚ます。

「ん…ここは？」

体を起こすと軽い頭痛を感じ額に手を当てたところで、気を失う前の事が怒濤に思い出されて美夜子は今度こそ目を見開いて自分の状況を確認した。

少なくとも泉の中ではない。息を大きく吸ってみて、少々埃っぽいが確かに空気が存在することを確認する。何処を見回しても石畳と柱が続き、上を見上げてみても柱が延々とそびえ、天井が何処なのかも美夜子には分からない。

この不思議な場所が何処なのか全く分からない美夜子であったが、彼女にはまだ確かな道標が右足に括りつけられていた……足枷と鎖。もう引っ張ってはこないようだが、鎖の終着点はまだ遠いようだ。

（もうこうなったら、この鎖の行方を見定めさせてもらいましょうか）

自分が何故この場所に来ることになったのか、その理由も分からないが、何か彼女をここに導いたのは間違いない。

美夜子は気持ちを改めると、鎖が続く場所を目指して歩き出した。

ジャラジャラと鎖が引きずられる音と、美夜子が歩く足音以外の音はしない。

不思議なことに鎖は美夜子はその終着点に近づいているにもかかわらず弛む事がなかった。おかげで鎖を手にとって歩くことはないのだが、美夜子がつくづくこの場所では常識が通用しないのだとため息をついた。

結構な時間を歩いたつもりだが、景色は延々と変わらない。まるで同じ場所をぐるぐる回らされているような気がして、強い疲労感が美夜子を襲う。

その疲労感と戦うこと数十分。投げ出すことなく、黙々と歩き続けた美夜子はこの場所で初めて柱以外の建造物を見た。柱など同じ材質で造られているらしい巨大な神殿。その中に鎖が続いているのを見て、美夜子はごくりと唾を飲み込んだ。

「いよいよって訳ね」

誰に言うでもなく独り言をつぶやいて、美夜子は一人その中に入る。

神殿内はほの暗く、ひんやりとしてカビ臭い匂い。その中を注意深く慎重に進むと、だだっ広い空間があり、大きな祭壇のようなものが中央に鎮座していた。

その祭壇の上に一人の人影を見つけて美夜子はそれに近づいた。

鎖は祭壇へとまっすぐ向かっている。

じやらじらと音を鳴らして近づいているのだ。相手が人形でなければ美夜子を振り返ってもいいだろうが、人影は美夜子に背を向けたまま動こうとしない。仕方なく意を決して人影に話しかけた。

「貴方が私をここに呼び寄せたの？」

白い衣に身を包んだ人影はその声によつと振り返る。美夜子はその顔に見覚えがあり、無表情のまま驚いた。

「トイ」

「ああ。名前を覚えてくれていたんだね。嬉しいよ美夜子。」

にこりと悪意なく微笑まれたが、美夜子は昨日奪われたファーストキスのことが思い出されて咄嗟に後ずさった。だが、トイは美夜子の態度を気にすることなく、にこにこと笑いながら言葉を続けた。

「君がここに来るのにはもつと時間がかかるかと思ったけど、良かったよこんなに早くまた会えて。」

「貴方が私をここに連れてきたの？」

微妙にトイと距離をとる美夜子。それを面白そうに見ながらトイはじりじりと彼女との距離を詰める。

「どうして離れるのさ？」

「ち・近づかないで…質問に答えなさいよ。」

「うーん。せつかくだからもう少し君と戯れたいところだけど、今日も時間ないしなあ。しょうがないから話してあげようかなあ？」

美夜子はもつたいぶるなと内心強く憤慨したが、ぐっとこらえて押し黙る。無用な言葉の応酬は避けたいし、何よりトイーに近づく事を本能が警告していた。

「残念だけど、君を呼ぶ力を俺は持っていない。マーキングはさせてもらったけど。」

「…じゃあ、誰が？ここは何処なの？」

「あれ？今の俺の言葉に聞くところはそれ？」

「そうよ。さっさと答えて。」

無論、美夜子も気になった。『マーキング』の単語。

だが、その意味も理由も聞くのが怖くて美夜子は面白がるトイーの言葉を切って捨てた。

「しょうがないなあ。まあ、いいけど…ここは果ての静寂の深淵。【魂の霊安室】と呼ばれる空間だ。君を呼んだのは果ての静寂の主・オウラン。」

【魂の霊安室】……その言葉の意味と音の不吉さに美夜子は自分の心が萎えるのを感じた。

知りたくない。だけど、この状況で知らない訳にもいかない。相反する感情を律するかのように自分を戒める。

トイーは暗がりでも昨日と同じように白い輝きを放ちながら、至近距離でありながら美夜子を指差した。

「美夜子、君は選ばれるべくして選ばれた依人。君がここに来るのを俺もオウランもずっとずっと待っていた。」

「え？」

「さあ、オウランから君を案内するように言われているからね。早く行こうか。」

美夜子の戸惑いなど見えていないかのように全てを無視すると、祭壇で何かを操作した。すると、大きな何かが動く音がして祭壇のすぐ傍の床が開き、地下へと続く階段が現れていた。

気が付くと祭壇へとのびていたはずの鎖は、その階段の下へと向かっていった。それを確認するとさっさと階段を下りていくトイを美夜子は仕方なく追う。

地下への道は暗かったが、トイが人間発光体となって足元を照らしてくれる。足を踏み外さないようにだけ気をつけつつも、美夜子は光る背中に言葉を向ける。

「ねえ、この鎖…貴方は呪いの鎖って言うていたけど…死者の呪いと何か関係があるの？これは何処に続いているの？私が選ばれたって」

延々と続く階段を降り続けながら美夜子の疑問は尽きない。だが、トイはそれらには何一つ答えてくれなかった。美夜子も狭い階段で詰め寄って階段から転げ落ちるのも怖く、言葉が途切れる。

カンカン、ジャラジャラと階段を下りる靴音と美夜子の足から地下へとびる鎖のなる音だけが響いては消えていく。

そして、階段を下りた先で美夜子は言葉を失った。

地下は神殿よりも更に広く、その場所の果てが美夜子には見えなかった。

中央に何か大きな柱のようなものが見える以外は、延々と等間隔に人が入れるくらいの石造りの箱が陳列されているだけ。その箱が何なのか見当がついて美夜子は呆然とつぶやいた。

「これ…まさか、全部…棺桶なの？」

美夜子のすぐそばにあるそれは、中を見なくてもそれと分かる石

棺に違いなかった。【アルヴァ・ウイン】と恐らく棺に収まっている人物の名前とその人物がなくなっただろう日が刻まれていた。

驚くべきはその数。そして、その棺から伸びる鎖。美夜子の目に見える全ての棺からはその蓋に鎖が伸びていて、それは皆それぞれに様々な方向へ広がって、まるで蜘蛛の巣のようになっていた。

その蜘蛛の糸の一つが自分の右足に繋がっている。美夜子は自分の右足についた足枷とそこに付いている鎖が、どこかの棺に伸びているんだと確信した。

「魂の霊安室。ここは呪いの根源なんだよ。」

「呪いの根源……」

言葉を無くす美夜子にトニーは棺に触れ、その鎖を持ち上げた。

「呪いのこと、少しは聞いただろう？ 死者が願いを叶えるために、転生することなく魂を差し出すことで得られる邪法。ここはその呪いを叶えるために差しだされた魂の安置所。」

「じゃあ、この【呪いの鎖】は？」

「呪う魂と呪われた魂を結ぶ呪縛……美夜子、君は呪われているんだよ。」

美夜子はすうつと血の気がなくなる感覚に目の前が真っ暗になった。

6 - 1 (後書き)

あれ？光明のはずが…。

すんと体から急に力が抜けて美夜子はその場に座り込んだ。

（呪われている？私が誰に？呪いつて何？）

美夜子を取り立てて健康に問題はないし、経済的にも親のおかげで今は何不自由ない。対人関係も……とそこまで考えて、自身の『病氣』が意味を持って彼女にのしかかった。

「もしかして、私の感情が表情や声に出ないのが呪い？」

思わず触った顔が冷たいと感じた。だけど、それほど血の気を失うほどに衝撃を受けていても、美夜子の表情はいつもと同じ無表情が張り付いているだけ。

『心失病』とも違う、原因不明の病。感情はあってもそれが表情に、声に現れない。美夜子はずっと仕方がないと、理由が分からない以上どうしようもないと思って諦めてきた。いや、諦めるしかなかった。

「その可能性は高いだろうね。」

「はぐらかさないで。貴方が誰だか知らないけど、知っていること全部話して。」

さらりとそう告げるトニーに噛みつく。だけど、どんなに感情が高ぶっても、美夜子の表情も声も全く動くことはない。それが彼女にとってはおく当たり前のことだ……だけど、だと美夜子の心はざわめく。

（呪い？私は呪われているから、こんなに無表情なの？人形だと言われ続けたの？）

過去の出来事がまるで走馬灯のように美夜子の頭の中を駆け巡る。

『ははははっ！コイツ、ほんとに何されても泣かねーぞ！！』

そういつて幼子のころ、様々な苛めを受けた。

『あの無表情：本当に見ていだけで不気味だよ。』

そう言つて思春期のころ、誰も私に近寄らなかった。

別に美夜子の何が悪い訳でもなく、美夜子は彼女の呪いのせいで良好な人間関係は皆無といつてよかった。彼女のそばにあったのは家族ぐらい。

仕方ないと諦められたから、今まで我慢できた。なのに、今更分かつてしまった事実には美夜子は大きく動揺していた。

「【鳴無家の呪い人形】：言い得て妙、単なる通り名だったのに、ずばり真実だったてこと？」

自分に表情があつたら、声に感情がこもればどんな風なのだろう？美夜子にはそれももう分からない。感情はある。だけど、美夜子にはそれを表現する方法が何も見当たらなかった。

それが悲しかった。それが辛かった。それが：苦しい。

（苦しいよう…お母さん）

項垂れて視線を落とす美夜子の視界に彼女を呪う鎖が目に入る。この鎖さえなければという思いに、それを強く握りしめて石畳に叩

きつける。だけど、乾いた音を響かせただけで、鎖には傷一つつきもしない。

「それを壊す力が――」

それを見ていたトイーが何かを言いかけたが、美夜子はもはや何も聞いてはいなかった。無言でむくりと立ち上がり歩き出す。

「おい！何処に行くんだ！？」

いきなりの行動にトイーも驚いたらしい、後ろを振り返らない美夜子には分からないだろうが彼は眼を見開いて狼狽していた。

「私を呪っている人を突き止めに行く。鎖を辿れば私を呪っている人の棺に辿りつくんでしょ？貴方が何も教えてくれないなら、自分で探す。」

「言っておくけど教えない訳じゃなくて、俺は君の呪いについては本当に何も知らないよ。俺はこの場所の管理人だけど呪いについては何の力も発揮できない。呪いを発動させ契約を交わすのはオウランだからね。」

美夜子は後ろを振り向かないままだが、トイーが後ろから彼女を追いかけてくる気配と声は続く。その中で出てきた名前に美夜子は視線だけ後ろに向けた。

「オウラン？」

何処かで聞いたような気がした。だけど、何処だかは忘れた。思い出そうとしたが、トイーが説明を始めたので美夜子は聞いたことがあるような気がしたことすら忘れた。

「あの巨大な柱が見えるだろ？」

霊安室というにはあまりに広大な空間の、恐らく中央に位置すると思われる場所。棺桶しかないため、遮るものがない空間で、高く高くそびえるそれは異様な雰囲気を纏っていた。

色は黒、今美夜子たちがいる場所は柱から離れているため細かいところまでは確認できないが、柱は綺麗な円柱ではなくグニヤリと曲がっている部分も確認できた。また、その太さや高さはかなり巨大であることも想像がついた。

美夜子はそれをちらりと確認したが、鎖が繋がっている棺を見つけてその場に立ち止まった。食い入るようにその棺を見つめ、ごくりと唾を飲み込む。

「……」

かみしめるように瞼を閉じ、美夜子は自分と繋がる棺へと歩き出した。そんな彼女を追うようにトイーが声をかける。

「さっき話をしただろう？君をここに呼んだのがオウランだ。」

トイーの声は美夜子を素通りした。

美夜子の足は段々早くなっていき、トイーはもう彼女を追いはしなかった。そして、柱の方を見やり小さく呟いた。

「あの柱は人柱。オウランはその贅さ。」

吐息のように吐き出されたその言葉は、最初から美夜子に聞かせるための言葉ではなく、トイーの独り言の様な呟きであった。

『E5809・5・2 ナルカミ ヨシコ』

棺の前に立つた美夜子の目に入っただのは、石に彫られたその日付と名前。

その掘られた文字の下に鎖はしっかりと繋がっていた。間違いない、この日に死んだこの名を持つ人物が美夜子を呪っている。

それを理解して美夜子は一瞬だけ呼吸を忘れた。

「……」

沈黙が続いた。

その沈黙の間、美夜子はその人が美夜子を呪う理由を噛みしめた。

（ああ、貴方が私を呪ったの）

天を仰ぐ。その胸に過るのは懺悔か、絶望か、怒りか、恨みか……無表情のままの美夜子からは何も感じることはできない。

「美夜子？」

てつきり表情が出ないなりに、何らかのリアクションを予想していたトイはその反応に戸惑い、様子を窺うように美夜子の名を呼んだ。

「ああ、思い出したオウランって人が私をここに呼んだんだっけ。」

だが、ここで始めてトイを振り返った美夜子は、まるで何事もなかったかのように少し前の会話に戻った。

自分を呪う棺を見たことなどなかったかのようにふるまう美夜子を不思議そうに見て、だが、トイ自身もそれ以上は何も問わずに頷いた。いや、美夜子自身がそれ以外の態度をトイに許してないような気がして、彼はそれ以上何も言えなかった。

「そうだ。オウランは君に力を与えるためにここに呼んだ。」
「力？」

美夜子と棺を繋ぐ鎖を持ち上げるトイ。鎖は不思議と常に一定の弛みを有し、美夜子が近付けば短く、遠のけば長くなるようだった。

「呪いを倒す力だよ。」

そう言って鎖に口づけるトイから美夜子は鎖を奪い取った。

「気持ち悪いことしないで。呪いは倒す方法がない最強最悪の邪法だって聞いた。」

「まあ、概ねそれは間違った考えじゃない。呪いを見ることが出来るのは依人だけ、そして、それを倒すことが出来るのは依人の中でもオウランに選ばれた【呪い持ち】だけ。」

「呪い持ち？」

「魂の霊安室は果ての静寂の最深部に当たる。本来、どれほど依人として熟練した人でも、この場所に来ることはすなわち死に値する。なぜならこの場所に来る前に死の闇に引きずり込まれてしまうからだ。」

『死の闇に引きずり込まれる』それを聞いて、美夜子は昨夜自分が王将に闇に引きずり込まれたために仮死状態に陥っていた事を思い出した。トイが、そして、静が助けてくれなければ、もしかし

たら美夜子はその死の闇とやらに引きずり込まれていたのかもしれない。

「果ての静寂は生きる者が存在する現世と死の世界の境目が曖昧な場所だ。その狭間だと言ってもいい。魂が死へと引きずりこまれれば、例え肉体が健康体でもあつというまに死んでしまう。ちなみに果ての静寂は下に行けば下に行くほど、死の闇の割合が大きくなり、死へ引きずり込まれる可能性が高くなる。」

美夜子を呪う棺の前で会話をつづけていた二人だが、トイはくると方向転換すると歩き出した。

それを慌てて追う美夜子だが、その方向の先にそびえたつ黒い柱が見えた。

「だが、『呪い持ち』…その名の通り誰かに呪われた依人だけは、どんなに死へ引きずり込む可能性があつたとしても魂の霊安室に来ることができる。それがどうして分かるか？」

分かる訳がないので美夜子は首を横に振る。

「その呪いの鎖をオウランが手繰り越せるからさ。」

トイは歩きながら棺から離れて行っているため、伸び続けている鎖にちらりと視線を向けた。

「その鎖はオウランとそれに由来する力以外をもつてして絶対に壊すことができない存在だ。鎖に引きずられることで死の闇に迷い込むことなく、まっすぐにこの場所に来ることができる訳さ。」
「どうして私を？」

この場所に来る原理は分かったような気がしたが、理由もなく鎖を引っ張るはずもない。その理由を聞こうとした気もしたが、先程は話が中断された。

「それは多分、本人から聞いた方が早いと思うから……」

気が付けば柱のすぐそばまで美夜子たちは辿り着いていた。柱に向かっていると感じた直観は当たっていたようだが、あまり歩いていないのにすぐに辿り着いたことに戸惑った。

その戸惑いを無視するかのようにトーイは美夜子に笑いかけると、体をずらして美夜子を柱の前へと誘う。

その全貌を間近にして美夜子は心の中で驚嘆する。

「はじめまして、美夜子。私はオウラン。」

彼女は微笑んで美夜子に挨拶をした。

美夜子よりも年下。まだ少女と違っていい容貌は儚げで美しい。

トーイとよく似た色彩を纏い、白い髪に肌は眩しく、微笑んで細められた瞳は金色に似た輝きを放っていた。

彼女が『柱に埋まって』さえいなければ、美夜子にとってオウランはただの美しい少女だなというだけでその感想は済んだことだろう。笑顔で美夜子に語りかけるオウランは腹部より上は柱の外に出ていたが、後の部分は柱の中に埋まっていた。

……それはまるで磔にされた聖人の如く

6 - 2 (後書き)

この物語の日付は一年が十カ月、一月が四十日です。別に物語に対して影響はないですが参考までに。

『オウラン』

そう名乗った人物を自分をすぐに取り戻した美夜子は具に観察した。

とりあえず驚いたのは無論、彼女が柱に埋まっているという事実。いや、埋まっているというよりは柱と一体となっていると言った方が正しいのかもしれない。

オウランは上半身だけ前のめりで柱から出ている状況で、その全貌は明らかではない。ただ、衣一枚纏わないその体は、なめらかな人肌ではなく冷たい石のような質感。それは彼女を取り込む柱と同じであつた。

故にその造形がうつとりするほど可憐で美しいといえども、人間というよりはまるで彫刻のようで、それが美夜子よりはるかに表情豊かに変わり口を開くさまはとても異様であつた。

「私はこの場所の主にして、死せる魂を司る女王。」

不吉な言葉を続けるオウランは、大きな瞳を縁取る睫毛までが石で形作られている。それを見つめながら、瞬きをするだけで重そうだと美夜子は思った。

「それで私に何の用です？」

驚きの後、美夜子に訪れたのはもはや開き直りの極地であつた。この状況、相手に脅えているだけでは美夜子にとってあまりに分が悪い。

「ふふ…せっかちなのね。」

婀娜っぽく笑って見せるオウラン。

彼女の年頃の正確な所は分らないが、見た目だけ言えば美夜子より年下の少女といってもいい容姿だ。だが、その笑みは女の美夜子から見ても妖艶だった。

「私はね…貴方に力を与えたいの。呪いを倒す力を。」

「呪いを倒す？呪いは発動したら、死者の願いを叶えるまで止められないと聞いたけど。」

非常に嫌な予感がした美夜子は、それを全力で回避するためにとりあえず言いながら一歩後ずさった。すると背中になにかが当たる。

「何処に行くつもりだ？」

美夜子の頭上から聞こえるトイーの声。美夜子は咄嗟に彼から離れようとするが、右足の鎖でつんのめってその場から動けない。

「!？」

さっきまで弛んでいたはずの鎖が急に美夜子をその場に引きとめるかのように動かなくなる。

「無駄無駄。この空間も、呪いも全ては死せる魂によって成り立っている。全てが女王である私の思うが儘よ。諦めなさい美夜子。」

ぴしゃりと言って、美夜子の言葉など聞こえないオウランは異様な姿を差し引いても女王の威圧感を持っていた。

「そうそう。誰も君の事を取って食いやしない。むしろ、俺たちは君を助けたいと思っているんだ。」

甘言が重ねられれば重ねられるほど胡散臭さは強くなる。表情には出ていないだろうが、嫌な汗が背中を伝う。

「助ける？」

「だって、貴方と彼は呪いについさつき襲われていたでしょう？彼はまだ呪いと戦っている。美夜子…彼を助けるためには力を受け入れるしかないのよ？」

「彼って…天宮様の事？」

そこで美夜子は僅かな時間しかたっていないはずなのに、久しぶりに静の事を思い出したような気になった。自分の事で精一杯すぎて静の事など頭の片隅にもなかった美夜子である。

「っていうか、あの黒マントが急に見えなくなったのは、呪いの力が作用したからなの？でも、私が依人だというのであれば、その私にも見えなかったのは何故？」

依人である美夜子には呪いが見えるはずではなかったのか。

「呪いだけじゃない。あそこにはまた別の力が作用してい…あれは見えなくなった。その力は貴方より強い。だから、見えなかった。」

「別の力？」

「私が力を上げれば、その正体も分かる。彼も助けてあげられるわ。」

「

どうあってもオウランは美夜子に力を与えたいらしい。だけど、美夜子の本能はそれを受け取るなど警告を発している。美夜子はそ

れに従った。

「天宮様がどうなろうと私の知ったことじゃない。私は」

「あら、そう？でも…貴方の本当の願いを叶えるためにも力は必要よ？」

側に静がないからこそ言える言葉だが強気に言い切る。しかし、それを遮ったオウランの言葉にぎくりと心が軋んだ。

「私はずっと貴方をここから見てきた。貴方が私の近くに來て、私の呼ぶ声が聞こえる、今この時を待った。だから、全部知っているのよ？」

美夜子は変化しない表情で柱の中で微笑むオウランを見つめた。

「可哀そうに…呪いで笑顔をこぼすことも、涙を流すこともできない哀れな美夜子。そんな貴方だから私は力を上げたいのよ？」

「何？貴方は私にその力を与えて、私に何をさせたいの？」

耳触りのいい言葉だけ並べるオウランに美夜子は強い不信感を抱く。そんな美夜子にオウランだけでなくトイもくすくすと笑いを洩らす。

「美夜子は疑り深いなあ。ねえ、オウラン？」

「ええ。でも、この間の娘ほどは苛烈じゃないわ。」

（『この間の娘』？）

口には出さず、心の中だけでオウランの言葉を怪訝に思う。

『この間』というのがどれくらい前を差すのか定かではないが、少なくともここに来たのは美夜子が初めてでは無いということだ。

「あの娘は私に向かつて自ら取引を持ちかけてきた。それにいつかのあの娘……何も疑わずに私を信じて力を得た娘もいた。貴方はその二人のちょうど半分くらいの反応かしら？……なんとも中途半端だ」と。

嘲るように言われても、美夜子の表情も心も動かない。

「中途半端で結構。それはどっちよ？どいつもこいつも奥歯に何かが挟まったようなことしか言わないし、何か知っているようなのに肝心なことは何も教えてくれない。そのくせ、私に何かをさせようとする。」

たかが数日のことだが、その数日が美夜子にとってはあまりに濃密過ぎた。美夜子はため込んだものを吐き出すように淡々と続けた。

「私は別に特別じゃないし、特別になりたくもない。力が欲しい訳じゃない。私の願いはただ、逢いたい人に逢いたいだけ。伝えたい言葉を伝えたいだけ。そのためなら私はなんだってする。でも、私は自分の身の丈は理解している。だから」

まくしたてる美夜子の言葉が止まった。そつとトイーが彼女を後ろから抱きしめたからだ。

咄嗟のことに固まった美夜子であるが、すぐに彼の腕の中で暴れだす。だが、小娘一人の力では成人男性の腕をふりほどくのは聊か難しかった。

「離して」

何故だか暴力は働かれないという良く分からない確信があったた

め、油断していた自分を美夜子は責めながら、暴れまくった。肘や腕がトーイにかなりあたっているはずだが、彼はびくともしない。

「まあまあ落ち着きなよ。俺たち別に君のことを悪いようにはしないよ。君が願いを叶えたいように、俺たちにも願いがあるんだ。」

耳元で息を吹き込まれるように囁かれる声に、ぞぞぞと悪寒が走った。

「貴方にはその手伝いをしてもらいたいだけ。だけど、今の貴方は足りないの。心配しないで。この力を得た事を貴方は後々絶対に感謝するわ。」

「そんなこと決めるのは私よ。」

決めつけられた言葉に強い拒否感を抱く。それに比例するように美夜子は更に大きく動く。だけど、トーイの力は尋常ではないくらい強い。美夜子がどれほど暴れてもビクともしない。

柱から飛び出ているオウランの上半身が伸びて美夜子の方へ迫る。トーイが彼女を抱いたままそちらに近づく。

徐々に近づいてくる石で造られたオウランは正にホラー。無表情のままだが、美夜子はかなりの恐怖感を感じていた。

（無理！怖い！もう…やだっ！！）

伸ばされるオウランの手を美夜子はトーイの腕の中で身をよじってよけようとするが、所詮は足掻きに過ぎない。オウランの冷たい質感の指が美夜子の額にひたりと当たった。

「何するの…やめて」

首を振る美夜子をトイががちりと押さえつけ、美夜子は何の光りも色も映してない虚ろな石造の少女の目を真正面から見つめることとなる。

その闇の深さに怖さが先だった。

「貴方はこんな諺を知っているかしら？『月に叢雲、華に風』（
1）どういう意味だかわかるかしら？美しい月や華がある時は、かならず雲や風がその美しい景色を壊してしまう。好事にはそれを損なう存在がつきものという意味合いがあるのよ？」

冷たいはずのオウランの指が急速に熱を帯びていつているような気がした。額が熱く美夜子は苦痛を感じるほどだ。

「別に雲や風が常に邪魔だったり無用なものであるわけがないのに、月や華というあまりに美しい物の前ではそうなってしまう。それってあまりに傲慢な考え方だと思わない？…私や貴方はその雲や風よ。」

「どういう意味？」

「そのうち分かる。いいえ、分かってもらわなければ困るの。そして、それを理解した時、もう一度貴方は私の前に現れる。これは予言よ、美夜子」

体が一瞬かつと熱くなつて、美夜子は自分の胸から光が発せられるのを見た。

トイが腕を離し、美夜子は力が出ない体で崩れ落ちる自分を感じた。そして、自分の胸から何か熱いものが迸るのを感じた。

6 - 3 (後書き)

1) 月に叢雲 花に風・世の中の好事にはとかく差しさわりが多い事(参考『大泉辞』)

6 - 4 (前書き)

今回は静視点です。

（面倒なことになった）

心の中で冷静に呟きながら、静は荒い息を整える。

しかし、息が整う前に静を強い衝撃が襲い、転げるように避ける。衝撃がまだ刺激くらいである時点で察知して避けているので、腕の肌が切れた程度で何とかなったが、静がいた場所は大きく土が抉られている。

（僕の運動神経をもってして何とかなっているけど、アレをまともにくらったら、いくら僕でもただじゃ済まないだろうな）

美しい景色なのにいくつも抉られた大地を見やりながら、さらりと自意識過剰な思考を乗せつつも自分が置かれている状況を考える。

（いくら僕がすごいからって…さすがに見えない攻撃を避け続けるのは至難の技だ）

そう美夜子が消えてから、静が襲い続ける何者か（恐らく黒マントなのだが）は、その姿を消し続けたままだった。

見えない攻撃は静を襲い続け、静はそれを（自分で言っちゃっているように）人間離れた身体能力で紙一重でかわし続けていたが、それはあくまで紙一重。実際には避けきれておらず、攻撃を僅かだが受け続けている。

それが続けば次第にダメージも大きくなる。気が付けば静は結構ボロボロとなっていた。

（　　）　　たく、あの呪い人形は一体何処に行った？）

そんな風に美夜子に対して暴言を吐いた瞬間、再び襲いかかる攻撃で頬に痛みが走る。

（僕的美貌が！！）

声には出さないが、大層なナルシストぶりを露呈する独白を美夜子が聞いたら、さぞ閉口してたことだろうが、その彼女がいないことが静をここまでの窮地に追い込んでいた。

見えない相手に逆に攻勢をしかけたが全て空振りしているし、逃走という選択肢も現状ではあり得る状況ではあるのだ。

しかし、美夜子がいなくなってしまうている現状で彼女を置いていけもしない。さりとて、実際問題として静にも限界が近づいていた。

（一端…引くか？）

そのため静の頭の中で逃走の選択肢にピピッとカーソルが止まる。なにしろ美夜子が泉に沈んで小一時間は経過している。

落ちた瞬間は彼女が溺れるのではないかと、泉を覗き込んだ静であるが既にその姿は泉にはなかった。

消える前、美夜子は鎖に引きずられていると言った。

その鎖は静には見えなかった…それはすなわち、それが呪いであることを示している。

呪いである以上、静にはどうすることも出来ないし、後は美夜子自身に頑張ってもらうしかない結論付け、

（まあ、美夜子なら大丈夫だろう）

と、何故だかそんな根拠のない確信を抱いて、『逃走』のコマン

ドを正に決定しようとした瞬間……背中を向けていた泉から突然爆音が聞こえ水柱が上がった。

前触れのない突然の事に静も一瞬思考が追いつかない。

しかし、その立ち昇り続ける水柱の中から、何の抵抗もなく現れる人影が見知ったものであることに思考を引き戻された。

「……美夜子？」

歩いてくる人影は美夜子に違いなく、彼女が相変わらざる無表情のまま地面に降り立つと水柱はその勢いを失い、霧の様な水滴が辺りに落ちた。

残ったのは時が止まったような静寂と、水柱から出来たというのに、全く濡れた様子のない美夜子。

無表情はいつもの事だが、正面を見たままピクリとも動かないことを不思議に思った静は美夜子の全身に目を走らせ、ある一点で視線を止めた。

（鏡？）

月の光を反射する鏡らきし物体に静は目を細める。

それは美夜子が泉に引きずり込まれる前までは確かになかったはずのものだ。

（あれは……？ いやそれよりも今は）

「そんな所にぼんやり立つな……！」

突然現れた美夜子に敵の方も驚いているだろうが、あんなにぼんやりしてはすぐに攻撃されても文句は言えない。

美夜子に危険を知らせるためにも叫ぶのと同時に走り出す。

だが、美夜子にはその声すら届いていないかのように微動だにし

ない。

どうにも様子がおかしい美夜子に盛大な舌打ちをした。

しかし、そんな静の声も存在も感じてないかのように正面だけを見つめて、美夜子はふらふらと歩きだす。そして、胸のあたりに抱いていた鏡を頭上に掲げた。

鏡から強い光が放たれる。

「!？」

静はその光の強さに目が眩む。

(何かするならするって予告しろ!!!)

光が放たれて目が眩んでいること以上に、どうにも様子のおかしい美夜子に罵声一つ腹の中で叫ぶ。

光により遮られた視界は、光がフラッシュの様に一瞬であったためすぐに戻ったが、静は再度驚くこととなる。

(おいおいおいおい)

ちなみに美夜子には驚く要素は何一つない。

先と同じように鏡を掲げ、瞬き一つせず本当にまるで人形になったかのようにそこに佇んでいる。

しかし、静が思わず『おい』を連呼してしまった要素は彼女のすぐ前にあった。

- - -それは大きな大きな蝙蝠

先程までいた魔種の比ではない。

その大きさはすぐ側にいる美夜子の2倍はある。

黒いグロテスクなフォルムは蝙蝠そのもの、翼にはあの魔種と同じように赤い光源があり、同じく赤く光る粉を撒き散らしている。

『何故！？体が動かない！！！』

恐らく蝙蝠から発せられた声なのだろう。それは音ではなく、なにやら思念のようなもので静の頭に直接響いた。

声の通り体が動かないらしく、何かに絡め取られているかのように空中でジタバタしている蝙蝠にはっとして、静は今度こそ美夜子の傍に駆けつけた。

彼女と蝙蝠の間に入り、蝙蝠の真正面から見詰めて今度こそ声をなくす。

「お前っ…！」

驚く静の声に蝙蝠が翼でさっと自分の体を隠す。

隠れた蝙蝠に静が詰め寄ろうとした瞬間、どさりと何かが倒れる音がして、静が振り向けば美夜子が意識を無くして倒れていた。

「美夜子！」

咄嗟に彼女に駆け寄り寄る静。

しかし、今度は蝙蝠に背を向けた瞬間にバサリと羽ばたく音を聞かして、振り向けば体が動くようになったらしく、蝙蝠が逃げている。

「逃げるな！」

叫んだが無駄な事は分かっている。蝙蝠は桜の森の中に飛び込むと、すぐに静の視界から消えた。

追いたい気持ちはあったが、倒れた美夜子を置いて追う訳にも行かない。

「本当に一体何なんだ？」

大体の事を自分の思うままにすることを当たり前に思っている静にとつて、ここ一時間くらいの出来事は、あまりに驚く事ばかりで彼の思い通りにならない事ばかりだ。

そのために微妙に疲れた彼からは珍しく弱気な声がついて出た。

「はあ…勘弁してよね。」

そんな彼の呟きなど知らず。倒れたまま意識が戻らない美夜子の腕の中には、確かに彼女の顔ほど大きさがある丸い鏡が抱きしめられていた。

6 - 4 (後書き)

【魂の霊安室】で美夜子に何かあったかすつとばしたままですが、それは追々で色々分かっていきます。次からはまた現実世界に戻ります。

静は普段わりとおっとりした話し方をしますが、実は結構口は悪い方です（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0678r/>

月に叢雲 華に風

2011年9月15日00時16分発行